法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

2017年度 国際文化情報学会 各部門最優秀賞・奨励賞

法政大学, 国際文化学部

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化 / 異文化
(巻 / Volume)
19
(開始ページ / Start Page)
23
(終了ページ / End Page)
117
(発行年 / Year)
2018-04-01

最優秀賞

古着援助の功罪とNGOの挑戦

－WE21ジャパンへの参与観察から－

松本ゼミ
幸坂悠菜

第1章　古着援助の歩み

1.1　問題意識と問い

不要になった服を使い、国際協力活動を行うことを「古着援助[1]」と呼ぶ。具体的には、寄付された古着を必要とする国に送る活動を指す。近年ファストファッションの流行に伴い、洋服が頻繁に買い替えられ、古着の寄付が増加している（Bianchi and Birtwistle 2010）と言われている。

従来古着援助は、市民団体[2]が中心となって行われていたが、近年では民間企業も行うようになってきている。例えば、日本のアパレルメーカーのファーストリテイリング社は2007年から「全商品リサイクル活動」[3]を実施し、古着を通じて難民支援を行っている。古着の寄付者が増え、古着援助が市民団体から民間企業にも広がっていることから、現在古着援助は日本社会で普及しつつあるといえる。

一方、古着援助による問題点も指摘されている。古着を海外に送る際の高額[4]な送料（朝日新聞 1992）や、被援助国経済への悪影響（Brooks and Simon 2012）がある。これらの批判を受け、現在は直接古着を送る支援に加えて、一般市民などから提供された古着を販売し、収益を国際協力活動に充てる新しい形態の古着援助も行われている。

本研究では、新しい形態の古着援助は過去に指摘された問題を克服することができているのかを明らかにすると同時に、そうした活動の中で新たに抱えている問題について考察する。

第2章　古着援助とは

2.1　古着援助のはじまり

着なくなった衣類を寄付し、それらを国際協力活動に活用する。今では耳にすることが多くなった古着援助だが、日本でのはじまりは江戸時代にあった「仕着せ」という文化である

1　古着を使った援助の形は、国内で災害が発生した際に救援物資として古着を援助するものもあるが、本論文では古着を活用し、国際協力活動を行うことを古着援助と定義する。
2　市民が自分たちの利益向上、生活向上などのために団結し、社会を動かすことを目的とした団体。非営利団体・非政府組織とも重なる。
3　ユニクロ・ジーユーで販売した全商品を対象に、寄付された古着を世界中の服を必要としている人に届けている。2007年にはUNHCRとパートナーシップを結び、支援の対象を拡大し活動している。（ユニクロホームページ「全商品リサイクル活動」2017年8月12日閲覧）。
4　1992年のバングラデシュでは子供の古着を一箱送るのに5300円の送料がかかると書かれていた（『朝日新聞』1992年1月21日「途上国へ寄付、高すぎる送料」）。

と考えられている（日本繊維機械学会 2012）。仕着せとは、江戸時代に身分の高い人が支援したい者に自分が着た服を与えるという慣習である。このような慣習がもととなり、服を必要としている人に寄付する行為が始まったとされる（ibid.）。

日本における国際協力活動としての古着援助のはじまりについては、主要新聞[5]のデータベースで調査を行った[6]。その結果、紙面上で確認できる限りで最も古い古着援助は 1968 年[7]に実施されたものであったため、本研究ではそれ以降を調査対象とした。次項からは古着援助への批判を整理し、それらの批判をどのように乗り越えてきたのかを述べる。

2.2　古着援助が抱える困難

古着援助に寄せられた批判については、例えば 2012 年の新聞記事[8]に古着援助による弊害が記されている。

「アフリカなどの貧しい国々に大量の古着が流れ込んでいる。（中略）恩恵を受ける被災者も多いが一方で大量に流入した古着に市場を奪われ、途上国の零細な繊維産業が破綻している。」

また、寄付された古着を海外に送る際にかかる費用も大きな障害になっている。この費用は、古着の受け手と送り手両者の負担になり得る。受け手については 1984 年の新聞記事[9]が指摘している。それによれば、日本からネパールに古着が救援物資として送られた際、古着に税金がかかり資金不足で古着を受け取ることができず、援助が行き渡らなかったと述べられていた。送り手に関しては 1992 年の新聞記事[10]の中で高すぎる送料が原因で一般市民が古着援助を行えないと書かれている。

では古着援助は、その指摘に対しどのような改善努力を行ってきたのだろうか。次節では、新聞記事のデータベース検索と、インターネット上に公開されている古着援助団体に関する情報[11]をもとに、この問いに対する仮説を提示する。

2.3　使用価値から交換価値へ

古着援助が被援助国経済に悪影響を及ぼしていることや、かさ張る古着を送ることに伴う費用への批判は、古着の「着る」という使用価値を活かし援助物資にすることで生じる問題

5　朝日新聞・毎日新聞・読売新聞・日本経済新聞のデータベースで「古着　支援」「古着　援助」というワードで検索を行った。
6　CiNii で「古着援助」と検索したが論文はヒットしなかった。「古着　支援」では論文・記事合わせて 5 件、「古着　援助」では 1 件論文がヒットするが、いずれも本研究で対象とするものではなかったため日本での古着援助に関する文献はないと判断し、新聞で調査を行った。（最終検索日 2017 年 12 月 15 日）。
7　（『朝日新聞』1984 年 10 月 31 日「救援物資、送る善意にも必要な気配り」）。
8　『日経ビジネスオンライン』2012 年 5 月 16 日「古着の援助はもう沢山」（2017 年 10 月 1 日閲覧）。
9　『朝日新聞』1984 年 10 月 31 日「救援物資、送る善意にも必要な気配り」
10　脚註 6 参照。
11　主に古着援助団体の HP に記録されている情報のことを指す。

と言える。この問題をどう乗り越えたかは古着援助のやり方の変化から推測できる。[12]

1968 年から 1995 年までは、主要新聞のデータベースで「古着　支援」「古着　援助」で検索すると、古着を送った先の情報や、送る際の苦労などに関する記事が中心であるが、1995 年頃からは寄付された古着を販売し、その収益で支援をする古着援助についての記事が出てくる。実際に、現在活動している 10 の古着援助団体[13]のうち、7 団体が現金化を通じた形態の古着援助を行っており、そのいずれもが 1995 年以降に設立されている。

これらのことから、使用価値ではなく、現金化できるという交換価値に目を向けた形をとることで、被援助国経済への悪影響や余計にかかるコストといった古着援助への批判を乗り越えようとしていると推測される。

一方で、古着を現金化して行う援助によって起こると予測される問題もある。資金援助を行うことで起こる問題である。従来のように支援物資が古着である場合は、被援助国で古着はそのまま利用されるはずである。しかし、支援物資が古着から現金になることで、使い道が特定できず、不正に利用される可能性[14]が生じると予測される。

2.4　調査対象の選定理由と研究方法

本研究では、古着援助は被援助国の衣類産業への悪影響や、援助にかかるコストに対する批判を受けて形態を変えたという仮説のもと、「現金化という新しい形態の古着援助は過去の批判を克服しているのか」という問いに取り組む。その上で、「新しい形態の古着援助は、新たな問題を抱えていないのか」を考える。

本研究では事例研究を行い、ある団体の活動とその介在者を詳細に追い、現状を明らかにすることで上記 2 つの問いに答える。

本研究では、神奈川県を中心に活動を行う認定 NPO 法人の WE21 ジャパンを調査対象とした。WE21 ジャパンは 1998 年に設立された NPO で、リユース・リサイクル[15]、民際協力[16]、共育[17]、政策提言[18]を柱に活動している。この団体は神奈川県を中心に活動区域を 38 の地域[19]に分け、それぞれの地域が 1 ～ 3 店舗の WE ショップを運営している。WE ショップは 55 店舗あり、ここで不要品の提供を受け付け、それを販売した収益を NGO へ寄付・助成し、国際協力活動を支援している。[20]支援するプロジェクトや支援先は、各ショップが各自で決定して

12 脚注 8 で述べたように CiNii で文献を検索したが、日本の古着援助について書かれた文献は限られており、批判への対応が述べられたものは存在しなかった（最終検索日 2017 年 12 月 15 日）。
13 インターネットで「古着援助」「古着 援助」「古着 支援」と検索し、ヒットした団体の HP を調査した（最終検索日 2017 年 12 月 15 日）。
14 現金はあらゆる財、サービスに交換可能であるため。（高橋 2005）
15 衣類・雑貨のリユースや、不用品の販売イベント、リメイク品販売などの活動を行なっている。
16 顔が見える関係で良い関係を構築し広めていくことで、平和な世界を作るというもの（WE21 ジャパン森田氏へのインタビューから 2017 年 1 月 31 日実施）。
17 共育には WE 講座があり、支援先の人々や NGO スタッフを招いて、現地について考える講座･報告会･写真展を開催し、環境･貧困･平和について考える場を作っている。
18 3R を推進する活動や、NPO 税の税制を軽減させるための活動を行っている。
19 38 地域のうち 2 地域が東京都内、残りの 36 地域は神奈川県内にある。
20 古着援助のプロセスについては図 1 を参照。

おり、様々な地域の多様なプロジェクト[21]を支援している。

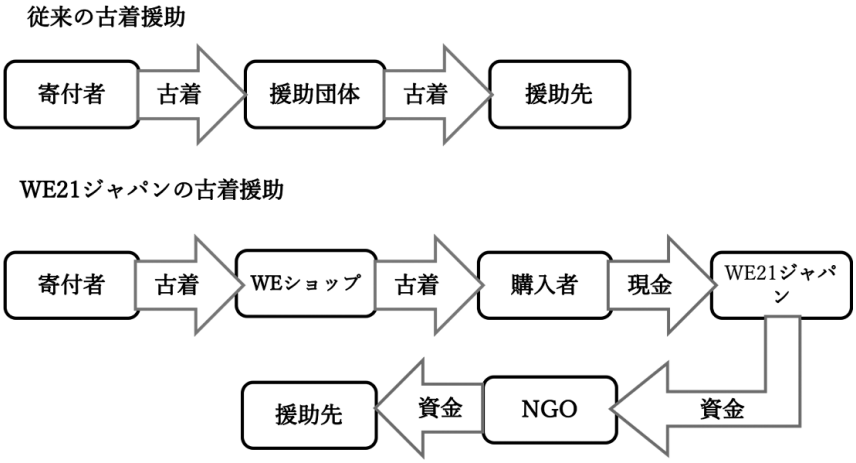


図 1：従来の古着援助と WE21 ジャパンの古着援助のプロセス

（出典：著者作成）

以上のことから、現金化を通じた形態に転換した初期[22]から活動し、大規模に活動を展開[23]する WE21 ジャパンは、新しい形態の古着援助活動を順調に行えている団体であり、新しい形態の古着援助が抱える問題の可能性を示唆できると考えた。

調査方法はインタビュー調査と参与観察である。まず、インタビュー調査で現金化を通じた古着援助を行うようになった経緯を明らかにした。次に、WE21 ジャパンでの古着援助の現状を詳しく知るために参与観察を行い、古着援助の流れと関わる人を詳細に追った。

参与観察は、WE21 ジャパンの中でトップクラスの売り上げ[24]と来客数[25]を誇る WE ショップかなざわ店[26]で行った。筆者は、2017 年 2 月から 8 月まで 8 回の参与観察[27]を行った。具体的な活動としては、ショップ内で寄付品の受付、古着の仕分け・品出し、会計、

図 2：かなざわ店外観

出典：筆者撮影

21 フィリピンの NGO であるシュントック財団が行っている、フィリピンの鉱山開発地域での植林運動など。
22 新しい形態への転換は 1995 年頃であると考えられ、WE21 ジャパンは 1998 年から活動を行っていることから、転換初期から活動しているといえる。
23 55 店舗展開している古着援助団体は他になく、最大規模であると考えられるため。
24「かなざわは小さいけど売り上げはトップ」との発言から。（かなざわ店運営委員へのインタビューより）。
25 2016 年 4 月から 2017 年 3 月末までの WE ショップ 55 店舗全体の年間来客数の 40% をかなざわが占めている。
26 神奈川県横浜市金沢区にある。以下かなざわ店と表記する。
27 研究の目的を明らかにした上で、無給ボランティアとして活動に参加した。

バックヤードの整理などを行いながらスタッフや購入者・寄付者に話を聞いた。

第 3 章　WE21 ジャパンの古着援助

3.1　批判の克服

まず初めに、WE21 ジャパン運営委員へのインタビュー調査を行った。WE21 ジャパンが設立された 1998 年は、古着援助が新しい形態に転換し始めた時期である。そんな中、なぜ現金化を通じた形態の古着援助を行うことにしたのだろうか。WE21 ジャパンの運営委員は以下のように述べた。

「当初は、向こう[28]の女性を自立させるための支援だったの。だから、洋服を持って行ったら自立支援にならない。女性たちの手仕事や、それから働いて自分で稼いで生活を自立させることが必要だから、モノを送っておわりにはできない。だから、長期的な面でその人に職業を与えられたら一番いいっていう話になって、服を送るのではなく、お金で支援しようっていう理由になったの。また、古着を現地に送るのは、洋服は重くて高い送料がかかる。だから古着を送るにしても、送料も援助してもらわないと送ることができないから、ショップで売って支援しているの」[29]。

このことから、新しい形態に転換した理由として、高額な送料への懸念があったと考えられる。また、自立支援を目的としていることも挙げられる。運営委員の発言からも分かるように、WE21 ジャパンは現金化を通じた古着援助を行うことで、短期的なモノの支援ではなく、古着を販売した収益で長期的なプロジェクトを助成する形の援助を行い、自立支援など被援助国の実状を考慮した活動を支援しようとしていると考えられる。

3.2　新たな問題

本節からは、かなざわ店での参与観察を通じ、新しい古着援助においての各プロセスと関わる人々の行動を追う中で、古着援助が新たに抱える問題について考察する。

3.2.1　手軽な持ち込み先

かなざわ店での古着援助は店に提供品[30]が持ち込まれることから始まる。同店では 1 日に平均 6 ～ 7 件の提供品が持ち込まれ[31]、スタッフはそれら提供品の中身を確認せず全て無料で受け取るため、中には明らかに使えないものが含まれていることもある。全て受け取る理由と

28 アジアの女性への支援を主に行っている。
29 WE21 ジャパン運営委員会でのインタビューより（2017 年 1 月 26 日実施）。
30 提供品は主に古着、そのほかに食器や雑貨が持ち込まれる。
31 かなざわ店スタッフへのインタビューより（2017 年 4 月 8 日実施）。

しては、1円でも多く売り上げを上げることでより多くの支援を行いたいという気持ちがあると考えられる。スタッフは古着以外の雑貨を店に出すことについて、「このようなものを出してしまうと、お店の質が下がるような気がして出したくない。でも、売り上げが大切なのは事実だから、10円でも値段をつけてお店に出して売ることが大切」[32]と話していた。

また、かなざわ店で働くスタッフのほとんどは無給スタッフ[33]であり、店舗の幹部である運営委員のみが有給スタッフとして働いている。そのため人件費への支出が少なく、売り上げのほとんどを支援に充てることができている。この雇用制度にも支援を第一に考える姿勢が表れていると考えられる。一方で、明らかに援助に活用できないものが持ち込まれた際には、「本来の趣旨でない、こういうものが増えてきちゃって（中略）モノばっかり増えちゃうと困る」と、戸惑った様子を見せることもあった。

筆者が参与観察を行った日にも、提供品の持ち込みがあり、提供者と接する機会があった。筆者が応対した20人程度の提供者のほとんどは、店に入るなり「もういらないから」と袋いっぱいに入った提供品を置いていくなど、提供品を持ち込むためだけに店を訪れていた。さらに、筆者が行った計8回の参与観察の間、提供者から「困っている人を助けたい」という言葉を聞くことは一度もなかった[34]。毎日持ち込まれる提供品についてスタッフに質問すると好意的な反応ではなく、「提供品の仕分けが大変」「提供品が多すぎる」という声が聞かれた。

提供者は「自分の古着で誰かを救いたい」という気持ちではなく、不要になった古着を手軽に引き取ってもらえる場所としてかなざわ店を利用している。それを受け取るスタッフは、多すぎる提供品の仕分けが大変だと言いつつも、売り上げを大事にしているためすべての提供品を受け取っていることが参与観察から見て取れた。

3.2.2　多すぎる在庫と重労働

こうして受け取られた膨大な量の提供品は、スタッフの手によって仕分けされていく。提供品の中には店頭に出せない状態のものも混ざっており、衣類や一部のガラスは、専門業者[35]に引き取ってもらい再利用することができるが、それ以外のものは自治体の決まりに則って有料で廃棄する必要があり、店が費用を負担しなくてはならない。

提供された物品はスタッフの手作業で、まず古着・バッグ・雑貨などに分けられ、古着は着用に適した季節に合わせて箱分けされる[36]。箱分けが完了すると、季節外れのものとそうでないものを分け、季節外れのものを倉庫へ、季節に合ったものを店へと運んでくる。こうして商品を入れ替えることで季節にあった商品を店頭に並べることができるのである。また、

32 2017年5月30日参与観察より。
33 給与などは発生せず、交通費のみが支払われる（WE21ジャパン本部森田氏へのインタビューから2017年1月31日実施）。
34 参与観察の中で、提供者に古着を提供する動機を尋ねたが、その大半は「いらなくなったから」と話し、他は何も言わずに提供品を置いていった。提供者から「支援先のために」といった言葉を聞くことはなかった。
35 繊維会社のナカノ。詳細は後述する。
36 9月上旬・下旬といったように分けられる。

膨大な量の提供品はWE21ジャパン本部が所有している倉庫だけでは保管が追いつかず、かなざわ店は独自に倉庫を借り、計2つの倉庫で保管している。

店では各月ごとの提供品[37]を品出ししている。商品は1週間経っても売れない場合には半額、さらに1週間経っても売れ残っている場合は、故繊維[38]としてナカノによってリユース・リサイクルされる。WE21ジャパンでは、年に約230トン、約80万枚の古着を受け付け、そのうち42%は店舗で販売、残りの52%はナカノによって無料でリユース・リサイクルされる。[39]このように、受け付けた古着の94%[40]はWE21ジャパンによって活用されている。

スタッフの勤務時間の大半を占めるのがこれら提供品の仕分けと商品の入れ替えである。提供品の仕分けや商品の入れ替えを行う時には、重い荷物を持ち上げたりしなければならず体力的にも辛い仕事である。かなざわ店では、これらの作業に加え接客、店内の清掃などを平均2～3人で回している。スタッフの平均年齢は60歳であり、体力が持たないため長時間働くことができなかったり、家事の都合で連続して勤務できなかったりする者もいるため、常に人手不足が問題となっている。筆者が参与観察を行った際も「若い人が来てくれると頼もしくていい。私達だけじゃ無理があるもの」[41]との声が聞かれ、日々の勤務を負担に感じているスタッフもいるようにうかがえた。

3.2.3　安く、品揃えの良い店

本論文で取り上げているかなざわ店は商店街にあり、狭い店内いっぱいに商品が並べられ、バックヤードには提供品が天井近くまで積み上がっている。かなざわ店の客層[42]は、主婦や高齢者が多くを占める。そのため、提供される古着の中には、ブランド品で値段も質も高いものが混ざっていることがある。店ではそれらも安く販売しているため、安くて品揃えがよい店として評判がよく、売上も高いとスタッフは話していた。[43]

一方で、店の本来の目的が理解されていないという困難も見て取れた。筆者が参与観察を行い、客と接する中で支援先や収益金について質問されることや、話題に上ることはほぼなかった。また、店内には支援先の国、支援額などが書かれた模造紙が掲示されているが、それらは目立たない場所[44]に貼られており、情報量も少ないため、告知をするには不十分なように感じられた。これについてスタッフは、「お客さんの中でこのお店の趣旨を理解している人は少なく、支援をしたくて買い物に来ている人はほぼいないのよ」[45]と話していた。続けて、

37 仕分けの際に、各月ごとに提供品を仕分けしている。
38 繊維製品の廃棄品のことを指す。ナカノでは、故繊維をリサイクルし手袋を製造したりぼろ布として工場などで再利用されたりしている。
39 WE21ジャパンホームページから。
40 残りの6%は廃棄される。
41 2017年5月30日参与観察より。
42 提供者・購入者の両方を指す。
43 2017年5月30日参与観察より。
44 レジの横の壁に貼ってあるが、店が片付いていない時には模造紙の上に商品がかかっていることもある。
45 2017年4月8日参与観察より。

筆者がなぜ国際協力を行う店としての告知を大々的に行わないのか質問すると、「そこまで手が回らず、余裕がない」との返事が返ってきた。このことから、客はかなざわ店を社会貢献のための店という認識よりも、安く品揃えのよい店くらいにしか見ておらず、本来の目的が客にはあまり理解されていないようであった。

図 3：店内掲示物

出典：筆者撮影

3.2.4　感謝される財源

このような流れで出た収益は、NGO が行っている活動の支援金として活用される。支援を決定する前には必ず、支援先の国・地域についての概要や、支援金の使い道などについて詳しい講義を行う「WE 講座」が開かれる。加えて、支援先の NGO がスタディツアーを開く場合もあり、WE のスタッフはそれらを利用して実際に支援先に足を運ぶこともできる。

WE 講座は、スタッフが古着援助活動を行う意義を見出す機会としての役目も果たしているようだった。筆者が WE 講座を受けた際、周りにいたスタッフに話を聞くと「どこもかしこも聞くと大変そうで、援助しなきゃと思う」と述べており、援助を行う必要性を感じている様子がうかがえた。

また、WE 講座の中では、支援先の NGO が繰り返し「資金が足りていない中[46]、WE さんからの支援金は本当にありがたい」と話し、スタッフに感謝を述べていた。このことから、NGO にとって WE21 ジャパンからの支援は重要な財源になっていることが見て取れた。

加えて、WE 講座の支援金の使い道についての細かい報告や、現地へのスタディツアーといった取り組みは、現地に不適切な影響を与えていないかモニタリングする役目を果たしているといえる。このモニタリングで現地の状況を把握、NGO の活動を管理することで、資金の不正利用や、被援助国経済への負の影響を防ぐことができていると考えられる。

46 日本の NGO の課題点として資金不足が挙げられている（兵藤、勝間 2009）。

第 4 章　新しい形態の古着援助

4.1　結論

以上調査結果から本研究の結論を導いた。

1 点目の問いについては、過去の批判を克服できていたと考えられる。インタビュー調査から WE21 ジャパンは高額の送料を懸念し、現金を通じた古着援助を行っていることがわかった。これにより、高額の送料への批判は克服できていると考えられる。

被援助国の経済への悪影響については、克服しようとしている姿勢がみられた。WE21 ジャパンでは WE 講座で支援先についての勉強会や、支援金の使途の報告会、スタディツアーなどが行われている。この機会を利用し、WE21 ジャパンと支援先の NGO が提携することで、現地の様子や影響をモニタリングでき、経済への悪影響をはじめ被援助国への配慮がなされているといえる。

2 点目の問いについては、2 点明らかになった。1 つ目に、資金の不正利用が起きているかどうかはわからなかった。しかし、WE 講座で信頼できる支援先を選択し、資金の使途についての報告会を行うことで、資金の不正利用に歯止めをかけていたといえる。

2 つ目に、店の本来の目的が理解されず新たな問題を抱えていたことが明らかになった。提供者は不要なモノを処分する場として、購入者は安く品揃えの良い店としてかなざわ店を利用するようになっていた。これにより、スタッフの重労働や、大量の在庫にかかる保管代、援助に活用できない提供品の廃棄代負担などの問題が新たにみられた。

4.2　考察

最後に、古着援助の展望について述べる。本研究では、現金化を通じた古着援助が順調に行われている団体としてかなざわ店を取り上げた。順調と考えられる一方、提供者と購入者に国際協力に関わる意識はなく、それによる問題を抱えていた。そんな彼らの行動を、国際協力活動として成り立たせていたのがスタッフである。同店では、重労働を無給のボランティアスタッフに頼る形で行うことで、収益のほとんどを支援金として活用することができていた。しかし彼らは、高齢で体力が十分でないことや、人手不足から日々の業務を負担に感じている様子も伝わってきた。高齢のスタッフが無償で重労働を抱える古着援助には、限界があるといえる。

これらのことから、古着援助を持続させるためには無給のボランティアスタッフに頼りきる姿勢を変える必要があるのではないだろうか。賃金を払い、アルバイトを雇うなどすることで、スタッフへの重労働を軽減できると考えられる。

4.3　本論文の限界と意義

本研究では、服を服のまま送る援助に対して寄せられた批判に対応し、新しく変化したと考えられる古着援助に注目して研究を行った。しかし、現在でも従来の古着援助活動が行わ

れていることは確かであり、これについての研究が不十分であることは否定できない。また、本研究では一つの団体に注目して調査を行ったため、この調査結果が一般化できるわけではない。だが、古着援助の仕組みは、団体の規模にかかわらず同じであると考えられるため、現金化を通じた古着援助が抱える問題の可能性を提起した点に本研究の意義があると考える。

参考文献

Andrew Brooks and David Simon『Unravelling the Relationships between Used-Clothing Imports and the Decline of African Clothing Industries』,Development and Change, Volume 43, Issue 6, 2012,1265–1290.

Constanza Bianchi, Grete Birtwistle『Sell, Give away, or donate: An exploratory study fashion clothing disposal behavior in two countries』The International review of retail, distribution and consumer research, 20(3), 2010,pp.353-368.

Jennifer Bauk Baker『An investigation of the motivations for second-hand clothingdonation and purchase』The University of North Carolina at Greensboro,2011.

(社)日本繊維機械学会　繊維リサイクル技術研究会、『循環型社会と繊維～衣料品リサイクルの現在、過去、未来～』、2012。

高橋基樹『ファンジビリティと開発援助:貧困国家に対する一般財政支援の課題』、国民経済雑誌、191(6)、2005、pp.67-86。

林隆紀『衣服に関するリサイクル意識と行動』社会学部論集 第 46 号 、2008。

兵藤智佳、勝間靖『国際保健をめぐる政策決定プロセスにおける 日本の NGO の役割と課題』財団法人日本国際交流センター、2009。

福西隆弘『国際競争に直面するケニア衣料産業—その影響と企業の対応』「アフリカに吹く中国の風、アジアの旋風－途上国間競争にさらされる地域産業－」日本貿易機構アジア経済研究所、pp.57-80、2007。

参考資料

朝日新聞「救援物資、送る善意にも必要な気配り」、1984 年 10 月 31 日朝刊
http://database.asahi.com/library2/main/top.php（2017 年 8 月 31 日閲覧）。

朝日新聞「途上国へ寄金、高すぎる送料(声)」、1992 年 1 月 21 日朝刊
http://database.asahi.com/library2/main/top.php（2017 年 8 月 31 日閲覧）。

朝日新聞「ヒマラヤで活発な奉仕（深海流)」、1984 年 10 月 1 日夕刊
http://database.asahi.com/library2/main/top.php（2017 年 8 月 31 日閲覧）。

朝日新聞グローブ 「ファストファッションとは」
http://globe.asahi.com/feature/090622/memo/01.html（2017 年 8 月 12 日閲覧）。

WE21 ジャパンホームページ　http://www.we21japan.org/activities/index.html （2017 年 8 月 5 日閲覧）。

日経ビジネスオンライン「古着の援助はもう沢山」、2012 年 5 月 16 日
http://business.nikkeibp.co.jp/article/report/20120514/232001/ （2017/8/11 閲覧）。

ユニクロ「全商品リサイクル活動」
http://www.uniqlo.com/jp/sustainability/refugees/recycle/ （2017 年 8 月 12 日閲覧）。

WE21 ジャパンかなざわ「第 17 回通常総会議案書」(2017 年 5 月 25 日)。

奨励賞

ミャンマーの民主化と難民の将来

－本国帰還をめぐる支援団体の動きに着目して－

松本ゼミ
杉江千紘　小嶋鈴乃　則安知佐　柳谷愛

第１章　民主化は「帰国可能」を意味しない

ミャンマーにおける少数民族の武装勢力と軍事政権の対立は 1948 年から続いてきた。状況を変える転機となったのは、2010 年のミャンマーの総選挙である。政権が文民にうつることが決まり、翌年発足した新政権は少数民族武装勢力と和平合意を交わした。本稿は、少数民族武装組織と軍事政権の戦いにまきこまれ、迫害され国外へ避難した「ミャンマー難民」に着目する。彼らもまた、民主化の影響を受けているのである。彼らはミャンマー国内での長期にわたる戦いにより「帰国不可能」だった。しかし民主化によって戦いが終わり「帰国不可能」ではなくなってきている。

民主化を受けて、例えば国連難民高等弁務官事務所（以下、UNHCR）は、タイ・ミャンマー両政府主導のもと、ミャンマー難民の本国帰還を進めている（UNHCR 2017）。民主化への舵を切ったものの、ミャンマー国内では人権や自由の侵害は続いていると言われている。そのような状況におかれた難民たちの将来はどうなってゆくのであろうか。

先行研究では、タイ・ミャンマー両政府や国連機関が難民帰還を積極的に進める背景に着目して難民の将来が語られてきた（Kim 2016）。一方で、そのようなマクロな捉え方だけでは、ミャンマー難民の今後を十分に理解することはできない。過去 30 年間にわたって、ミャンマー難民と直接向き合って支援してきたのは、UNHCR のような国連機関だけでなく、国際 NGO や、少数民族の組織も同じである。

本稿では、ミャンマー難民の主な避難先であるタイで活動する支援団体のいわばミクロな視点に着目し、彼らが「帰国可能」になった難民の将来をどう考えているのかを明らかにすることで、マクロな流れからは見えてこないミャンマー難民の将来に迫り、難民の帰還が可能になったとき、支援がどうあるべきなのかを考察する。

第２章　タイにおけるミャンマー難民が歩んできた道

1.「ミャンマー難民」とは

本節では、タイの「ミャンマー難民」はどのように発生したのか、そもそも「ミャンマー難民」とは誰を指すかを述べる。

ミャンマーは、1948 年にイギリスから独立した（その頃の国名はビルマ）。当時、ミャンマー

政府は人口の約7割を占めるビルマ族[1]を優遇し、少数民族に同等の権利を認めなかった。そのため、少数民族による反政府運動が高まり、ミャンマー国内は不安定な政治状況が続いた（根本 2014）。1949年には、ミャンマー最大の少数民族武装組織であるカレン民族同盟（以下、KNU）を中心に少数民族が武装蜂起した。ミャンマー政府がこれ抑圧しようと掃討作戦を実施したことで、迫害から逃れるためにタイに越境する人が増加した。

このような背景から、本稿では、ミャンマー政府による少数民族への武力攻撃が激しくなり、ミャンマーからタイに避難する人が増加した1970年代半ば以降に国外に避難した人を「ミャンマー難民」と呼ぶ。

2. 二国間関係に翻弄された難民

ミャンマー難民に対するタイ政府の対応は、時期により著しい違いがある（久保 2009）。ここでは先行研究にしたがって、その対応を3つの時期に分け、各時期におけるタイ政府の対応の特徴を述べる。

2.1 「放任」—1970年代から1988年

1970年代から1988年まで、タイ政府は流入する難民を積極的に支援はしなかったものの、追い返すこともせず放任していた（久保 2014）。当時のタイは資本主義を採用し、周辺国のミャンマーやベトナム、カンボジアの社会主義の影響が国内に入ってくることを警戒していた。そのため、ミャンマー難民が隣国との国境地帯にいることは、タイ政府にとってミャンマーの社会主義の流入を防ぐというメリットがあった。ミャンマーの社会主義と対立する少数民族武装勢力を含む難民が国境地域で防波堤の役割を果たしたのである（ibid.）。

2.2 「管理」—1988年から2002年

1988年、ミャンマー国内では民主化運動が高まり、ミャンマー軍による弾圧が強くなった。激化する攻撃は、しだいにタイ国内のミャンマー難民にまで及ぶようになる（久保 2014）。これを受けてタイ政府は難民問題を国内の安全保障上の問題として認識するようになる。それまでの放任主義を転換し、今日の難民キャンプを作り国際NGOの支援を呼びかけた。1998年にはUNHCRに協力を要請して難民の管理に乗り出す。

2.3 「送還」—2002年頃から2009年頃

ミャンマー政府の越境攻撃によって悪化していた二国間関係はタイのタクシン政権の誕生により改善に向けて動き出す。経済政策を重視するタクシン首相は、ミャンマーとの合同開発事業を行うなど二国間関係の改善に努めた。

1　ミャンマーには135の民族が存在するといわれているが、ビルマ族はその中でも最大の民族である。

この開発事業の阻害要因となったのが、増加する難民である。ミャンマー国内の民主化運動の弾圧、少数民族支配地域への攻撃、経済の低迷などにより、国境を越えてタイにやってくる難民は増え続けていた。2002 年頃からタイ政府はミャンマー難民の強制送還を進めた。しかし、この強制送還の計画は国際社会から非難を受けたことなどにより立ち消えとなった。

以上のように、ミャンマー難民の存在が政治的なメリットになるとして放任された時期もあれば、ときにタイ国内の安全保障を揺るがす存在として管理され、ミャンマーとの開発事業の阻害要因として帰国を迫られてきた。タイ政府がその時の状況に応じてミャンマー難民を扱うことができた要因は、タイが難民条約に批准していないことにある。

3. 法的義務のないタイ

ミャンマー難民は、タイでは「難民」と呼ばれていない。タイ政府は難民の人権と安全を保障する「難民条約」に批准しておらず、難民に関する国内法もない。その代わりに、難民は「暴動、戦闘、戦争により危険から避難し、タイ王国に入国した者」という移民法上の定義に基づき「避難民」と呼ばれる（Vitit 1982）。このようにタイ政府は自国の法律に基づいて独自に難民を扱うことができ、難民条約に従って難民の人権や安全を尊重する義務を負わずに済む。

ただし、現実にはミャンマーから大量に流入してくる難民を放置することはできないため、難民保護政策をとっている。本稿で使う「ミャンマー難民」と彼らが住む「難民キャンプ」は、特に断りがない限り、タイ政府が「避難民」とその「一時避難所」と呼んでいるもの（久保 2009）と同義である。

次節では、ミャンマーの民主化の始まり以降、すなわち 2010 年以降の、ミャンマーをめぐる国際政治の変化と、ミャンマー難民に関する政策の転換について述べ、難民帰還事業が始まる背景を整理する。

4. 民主化と高まる帰還の可能性

本稿では、先ほど記した通りミャンマーの民主化を 2010 年とする。20 年ぶりに行われた 2010 年の総選挙では、民政移管が決定し、翌年にはそれまで軍事政権の最高決定機関であった国家平和発展評議会（SPDC）が解散した。このことで、ミャンマーでは民政移管が行われた。

さらに 2015 年の総選挙では、民主化運動の指導者であるアウンサンスーチー氏率いる国民民主同盟（以下、NLD）が圧勝し、翌年 3 月末にはティン・チョウ氏が半世紀ぶりに軍人出身者以外の大統領として選出され、NLD 主導の新政権が発足した（永井 2016）。同年には、ミャンマー政府と KNU を含む 8 つの少数民族武装組織がミャンマー全土での停戦協定に署名した（根本 2015）。

このような民主化の流れにより、タイ・ミャンマー両政府はミャンマー難民の帰還に関す

る議論を始めた（UNHCR 2017）。ミャンマーの民主化による政治改革と武力紛争の減少により、難民が帰還することができるようになったと考えたためである。

次章では、先行研究をもとに筆者らが支援団体に着目する理由を示した上で、本稿の問いを示す。

第３章　支援団体は帰還を促進するのか

1.　支援団体に着目する理由

Kim（2016）[2]によると、タイ・ミャンマー両政府はミャンマー難民の帰還を望んでいる。難民が帰還するとそれぞれに利点があるからだ。タイ政府は難民を帰還させることで、キャンプの管理費などの出費を削減することができる。ミャンマー政府にとっても、難民が問題なく帰還できれば、国内の安定を国際社会に示す格好の機会になる。このように、難民の帰還はタイ・ミャンマー両政府にとって政治的・経済的な利益がある。そのため、両政府は、政府間合意に基づく帰還事業を 2016 年に開始するなど、難民の帰還を促進している。

帰還を促進しているのはタイ・ミャンマー政府だけではない。Kim（2016：292）が指摘しているように、ミャンマー難民を資金面で支援してきた国家レベルの組織（funders）の関心は、「迅速な帰還の安定化」にある。「難民と日常的に関わることの少ない」国家レベルの組織は、民主化によってミャンマーが「帰国可能」な国になったと捉えている（ibid.）。そのため、タイにいるミャンマー難民への資金援助は減少傾向にある[3]（Kim 2016、久保 2014）。

帰還事業が進む中、難民の代表組織であるカレン難民委員会（以下、KRC）は現時点での帰還に対して懸念を表明している。その理由としては、帰還後の仕事、医療、教育などの保障が十分でないことがある。同じように、帰還に対して必ずしも肯定的でないのが、難民を日常的に支援してきた支援団体である。Kim（2016：293）は、「国際 NGO や人権団体の多くは帰還に反対している」と述べ、その理由として国際 NGO は、「難民の話を聞き、帰りたくない難民が少なくないと把握している」ことを挙げている。

しかし筆者らの知る限り、民主化の流れと難民の帰還について「難民と日常的に接している」支援団体の視点から論じた研究はない[4]。つまり、タイ・ミャンマー両政府や国連機関、資金面でミャンマー難民をサポートしてきた国家レベルの組織（Kim 2016、久保 2014）に着目したマクロな視座での分析が行われる一方で、難民と日常的に関わるミクロな支援者の視点は見逃されてきた[5]。そこで本稿では「タイのミャンマー難民の支援に関わる各団体はどのよ

2　ウィスコンシン大学の博士論文である。進行中の帰還に関して、比較的に新しい情報を提供した学術論文であるため、本稿では多く引用した。

3　例えば、1995 年から難民支援のための資金を提供してきた欧州連合（EU）は、2011 年にキャンプ難民への資源を削減し、職業訓練を通して難民を自立させる支援方針を打ち出している。“EU wants Burmese Refugees to stand on Own Feet”. Irrawaddy. 14 March 2011.〈http://www2.irrawaddy.com/article.php?art_id=20928〉（accessed2017/9/23）

4　CiNii で「タイ　難民」で検索すると 76 件、「ミャンマー　難民」、「ビルマ　難民」で検索すると合計 90 件ヒットする。一部雑誌などで、難民キャンプで活動する団体の活動内容が紹介されていることはあるものの、ミャンマー難民について支援者側の視点からの論じた学術論文はなかった（最終検索日 2017/9/23）。

5　Kim（2016）は、国際社会と NGO などの支援団体の違いについては言及しているものの、ミャンマーの民主化が進み、帰還が促進される中で難民に関わる支援団体が帰還をどのように捉え、活動しているのかは明らかにしていない。

うに難民の帰還を捉えているのか、そしてそれは難民にとってどのような意味を持つのか」という問いに取り組む。ミャンマー難民に対し長期的に支援を行ってきたNGOなどの現場で働く団体の視点から、難民帰還時代における支援の在り方を考察する。

2. 研究方法とフィールドワークの概要

図 2. タイ・ミャンマー国境の難民キャンプ

（出典：久保（2014）より筆者ら作成）

研究方法は主にインタビュー調査と、団体が刊行している活動報告等の一次資料を用いた文献調査である。

筆者らは2017年8月5日から12日にかけてフィールドワークを行った[6]。調査地はタイ

6 フィールドワークは筆者らが所属するゼミナールの活動の一環である。フィールドワークには教員1名と学生18名が参加した。

のメーソット[7]、ミャンマーのミャワディである。団体の活動内容は様々であるが、その中で6つの団体を訪問先として選定した。UNHCR、The Border Consortium（以下、TBC）、シャンティ国際ボランティア会（以下、SVA）、KRC、KNU、およびメータオクリニック（以下、MTC）である。それぞれの団体の活動内容は以下の表の通りである。

表 1. インタビュー対象団体の活動内容

団体	ミャンマー難民に関わる活動内容
UNHCR	国連機関。タイ政府に依頼され、1998 年から難民登録を開始した。2005 年—2014 年は第三国定住、2016 年には自主帰還事業を始めた。詳しい活動内容は第 3 章で述べる。
TBC	国際 NGO。1984 年より難民に食糧や住居の提供を行っている。
SVA	国際 NGO。難民の教育支援を行っている。2000 年からタイの難民キャンプ内の図書館の運営を行う。
KRC	1989 年に設立された難民出身者によって構成される委員会である。主に難民と支援団体をつなぐ役割を担う。
KNU	1947 年に設立されたカレン族の民族武装組織。2012 年にミャンマー政府との停戦協定を結んだ。
MTC	1989 年にメーソットに設立された「国境の難民診療所」と言われる病院。ミャンマー難民・移民のために、手頃な診察料で必要な医療を提供している。

（出典：筆者らが各団体のホームページをもとに作成）

KNU と MTC はキャンプ内に事務所がなく、キャンプの難民を直接支援しているわけではない。しかし、KNU は難民の発生に直接かかわった団体であり、難民の帰還に関わる重要なアクターである。また、MTC はしばしば「国境の難民診療所」と呼ばれる（宗 2010）。1989 年の設立以来、タイ国内に住む移民、難民を対象に医療を提供してきた[8]。難民を支援する一団体として、帰還をどのように捉えているのかを調査するために選定した。

7　タイのタック県の郡の一つ。ミャンマーとの国境沿いに位置する。
8　MTC、「メータオクリニックについて」〈http://japanmaetao.org/jam〉（最終閲覧日 2017/9/30）

図 3.　メラキャンプの様子
（出典：2017 年 8 月 11 日 筆者ら撮影）

第 4 章　「帰国可能」後の難民支援

1.　キャンプの閉鎖に向けて

現場で働く団体は難民帰還の動きをどのように捉えているのか。以下は、調査から明らかになったミクロな支援者の視点から見える難民の将来の選択肢について述べる。

1.1　自主的帰還

2016 年 10 月に 1 回目の「自主的帰還」によって難民 71 人をミャンマーに帰還させた[9] UNHCR は「ミャンマーからタイに来た難民が元いた場所に帰還することは自然なことだ」[10]と述べた。UNHCR は難民にミャンマーに帰還することのリスクを説明した上でカウンセリングを行い、難民の帰還の意思を確かめ、自主的帰還事業を行っている。UNHCR は「自主的帰還事業が成功すれば、2、3 年後には難民キャンプに滞在する約 10 万人の難民全員を帰還させることが可能になる」と述べた[11]。それを可能にするために第 2 回、第 3 回の自主的帰還事業も計画されており、日本財団や KNU が協力している。

政府や UNHCR が自主的帰還を促進している一方、難民組織の KRC と同じようにこの事業に懸念を示すのが、国際 NGO の TBC だ。

9　UNHCR スタッフへのインタビューで配布された資料 "STRATEGIC ROADMAP FOR VOLUNTARY REPATRIATION Refugees from Myanmar in Thailand 2015-2017" より
10 UNHCR スタッフへのインタビューより
11 脚注 10 と同じ。

「UNHCR（自主的帰還）のプロセスにおいて、難民は個人情報をミャンマー政府に渡さなければならない。しかし、彼らはミャンマー政府の迫害から逃げてきた人々であり、個人情報をミャンマー政府に渡したくない。難民は、UNHCR の手を借りずに自分たちで帰った方がもっと安全だ」[12]。

ミャンマーの軍事政権から迫害され、タイに避難してきた人々が、ミャンマー政府が主導する事業に不安を覚えるのは想像に難くない。

1.2　自発的帰還

自主的帰還事業を通じて帰還することを危険だと考え、独自の情報源を活用してミャンマーに戻る難民もいる。これを「自発的帰還」といい、既に 1 万人以上の難民がこの方法で帰還している[13]。このようなアプローチが生まれた要因の 1 つはキャンプ内での携帯電話とインターネットの普及だと考えられる。

「数年前まで、難民はインターネットも携帯も持っておらずコミュニケーションも取れなかったが、今ではそれらがすべてある。2003 年か 2004 年くらいからインターネットを使い始め、ネットや携帯を手に入れ、コミュニケーションも取ることも、ニュースを読むこともできるようになった」[14]。

難民は、ミャンマーに住む家族と携帯電話を用いて連絡を取り、国境近くまで出てきて彼らと会うことが可能になった[15]。だが、このようにキャンプ外の人々から得た情報を頼りに難民が本国へ戻ることについて、KRC は次のように述べた。

「もし自身の力で帰りたい難民がいれば、帰ることができる。しかし我々にとって望ましくないことだ。なぜなら難民がもし何も言わずに帰還したら、我々はそのことを把握できず、彼らがミャンマーに無事たどり着いたかもわからない」[16]。

政府や UNHCR を介さず、さらにキャンプの管理者にも知らされない帰還は、手続きを踏む必要がない一方、難民が安全に帰還したかどうかも確認できない。KRC は、難民が間違った情報をもとにミャンマーが平和になったと思い込み、紛争が続く地域に帰って、再び避難のためにキャンプに戻らなければならないという「二次難民」となることを防ぐため、帰還

12 TBC スタッフへのインタビューより。括弧内は筆者らによる。
13 脚注 9 と同じ。
14 KRC メンバーへのインタビューより
15 KNU メンバーへのインタビューより。実際にキャンプ内で暮らす兄弟とタイ側で会ったことが複数回あるという。
16 脚注 14 と同じ。

を望む難民に正しい情報を提供することが重要だと述べた。国際 NGO の TBC もまた、ミャンマーで暮らしている人と協力し、ミャンマーの地域復興や、キャンプ内での職業訓練を通じた自立支援を行うことで難民の帰還後の生活を整え、難民が二次難民にならないよう活動している（TBC 2017）。

ここまで、ミャンマーへの帰還を望む難民には政府と UNHCR が行う自主的帰還と、国際 NGO の職業訓練や KRC の情報提供を受けて難民が自力で帰国する自発的帰還という選択肢があることを述べた。しかし、全ての難民がミャンマーに帰還したいとは限らない。

1.3　タイに滞在

UNHCR が 2013 年から 2014 年にかけてタイ最大のメラキャンプで行った調査によると、タイでの滞在を望む難民は 90％に達している[17]。ミャンマー国内の安全への懸念や、タイの方が教育や医療が整っているという考えがあるからである[18]。

タイで医療活動を行う MTC は「ミャンマー国内の医療環境はまだ整ってはいない」[19]と述べた。さらに難民には「難民キャンプの方が教育水準が高い」という認識がある[20]。タイでの滞在を希望する難民を支え得る活動を行っているのが国際 NGO の SVA と MTC である。

図書館事業を行う SVA は、キャンプの閉鎖後もタイに残った難民が図書館事業を続けられるよう、難民に図書館経営のノウハウを伝えている。また、ミャンマーからの移民や難民の診療を行う MTC は、キャンプが閉鎖された後も安く医療を受けられる場としてタイに残る難民を支えることができると考えられる。

2.　支援団体の資金難

支援団体が提供する難民の選択肢は団体の理念や、難民にとっての最適性だけで決まるとは限らない。なぜならば支援団体は外的影響を受けるからである。そのなかで最も大きいのが資金の影響である。

例えば国際 NGO の TBC は資金難を抱えている。ミャンマーが民主化した 2011 年以降、多額の公的な援助資金がミャンマーに流れており、TBC はキャンプ内での食糧支援よりも帰還事業に支援の中心を置かざるを得なくなっている（TBC 2017）。

資金難に直面しているのは SVA や MTC も同様である。タイのミャンマー難民キャンプで支援活動をする国際 NGO は約 20 団体あったが、資金不足のため相次いで支援活動を終了した[21]。

17 フィールドワークにおいて入手した SVA の資料より。これは 2013-2014 年の調査であるため NLD 政権の誕生などの影響で、現在は変化している可能性がある。
18 脚注 15 と同じ。
19 MTC スタッフへのインタビューより
20 TBC のスタッフによれば、教育を受けるためにミャンマー側からキャンプに来る人もいる。
21 難民支援の NGO の連携組織である CCSDPT に登録した NGO 団体は、2014 年は 19 団体であったが 2017 年には 14 団体にまで減少している。
Partners's Resources〈 http://www.theborderconsortium.org/resources/partners'-resources/〉（accessed2017/9/21）

「どのNGOも何とか支援活動を継続したいと考えていますが、難民の帰還が先か、NGOの体力が尽きるのが先か、厳しい局面を迎えています」[22]。

ミャンマーの民主化と帰還促進の流れは帰還以外の事業を行う支援団体の活動を制限し、難民の生活に大きな影響を及ぼしている。

第5章　すべてのミャンマー難民のために

1.　結論：帰還に留まらない選択肢

今日、ミャンマーの民主化によって、難民は「帰国可能」になったと言われているが、ミャンマー国内の安全や人権の保障が十分でないことも指摘されてきた。本稿では、難民と現場で向き合ってきた団体に着目し、「タイのミャンマー難民の支援に関わる各団体はどのように難民の帰還を捉えているのか、そしてそれは難民にとってどのような意味を持つのか」という問いに取り組んだ。結論は以下の通りである。

現場で働く団体の帰還への捉え方は団体によって異なる。1つはUNHCRやKNUのように、難民の帰還は積極的に進めるべきだと捉えるものである。それに対し、国際NGOのTBCや、難民自身が運営するKRCは短期間で進められる難民の帰還に懸念を示す。そしてそれらの団体は、帰還先のインフラストラクチャーや生活環境が十分に整えられた後に、帰還するべきだと捉えている。3つ目は、SVAやMTCのような、帰還は全ての難民の選択肢になり得るものではないという考え方であり、それらの団体はタイに留まる難民を支えることのできる活動を行っていた。

帰還の捉え方が様々であるということは、難民にとって将来の選択肢を広げるという重要な意味を持つ。短期間での帰還を促進するUNHCRは今すぐに帰りたい難民を手助けしている。TBCやKRCは帰還を望むが準備に時間をかける難民のサポートを行っている。一方、SVAやMTCは、タイに残る難民に対応することのできる支援を行っている。複数の選択肢が提供されることによってはじめて難民は自分自身の希望する将来に合わせた支援を選択できるのである。

2.　考察：難民帰還時代の支援の在り方

しかし今後、難民に与えられる選択肢が帰還に偏ってしまうことが懸念される。ミャンマーの民主化に伴い、タイの難民キャンプを資金面で支援してきたドナーが難民は帰国可能になったと考え、タイで暮らす難民のサポートではなくミャンマーに帰還する難民を支援するようになったからである。

22 SVA、「今、ミャンマー（ビルマ）難民が直面していること」〈https://sva.or.jp/wp/?p=18988〉（最終閲覧日 2017/9/30）

民主化は帰還を望む難民にとっての好機となった一方で、帰還を望まない難民もいる。「自主的帰還」というアプローチだけで30年以上も続いてきたミャンマー難民の問題を完全に解決することはできない。難民の多様な選択肢を守るためには、帰還に偏らない支援の在り方が考えられるべきである。

3. 本稿の限界

本稿が取り上げたのは、タイのミャンマー難民を支援してきた団体や組織の中のほんの一部に過ぎない。本稿の結論が、ミャンマー難民を支援する団体全ての考えやアプローチを網羅しているわけではない。しかし、先行研究では政府や国際機関などマクロな視点からしか民主化後のミャンマー難民の支援を論じていなかったのに対して、本稿では難民と直接向き合ってきた支援団体のミクロな視点を含めて考察した。民主化後、難民への支援が帰還の促進に偏ることで、帰還を望まない難民が援助の枠から外れてしまう可能性がある。そのようなミャンマー難民の置かれている状況を現場レベルの問題点から捉え直し、難民帰還時代の支援の在り方を提起したという点で意義があったと考えられる。今後は難民キャンプで活動を行う他の支援団体からも話を聞き、より包括的に今後のミャンマー難民の支援を考える必要がある。

参考文献

【日本語文献】
緒方貞子（2006）『紛争と難民　緒方貞子の回想』集英社 .
シャンティ国際ボランティア会（2011）『シャンティ国際ボランティア会　図書館は、国境をこえる 国際協力 NGO30 年の軌跡』教育史料出版会 .
宋芳綺（2010）『タイ・ビルマ 国境の難民診療所―女医シンシア・マウンの物語』新泉社 .
久保忠行（2009）「タイの難民政策――ビルマ（ミャンマー）難民への対応から」『タイ研究 第 9 号』pp.79-97、日本タイ学会 .
久保忠行（2010）「依存から自律へ－難民の自助的活動に関する人類学的考察―」『Kyoto Working Papers on Area Studies（人間圏の探求シリーズ）第 91 号』pp.1-20、京都大学 .
久保忠行（2014）「支援のフィールドにおける人類学―カレンニー難民の移動と定住」『 国立民族学博物館研究報告 38 巻 3 号』pp.337-375.
久保忠行（2014）『難民の人類学』清水弘文堂書房 .
小池克憲（2014）「タイにおける難民保護」『移民・強制移動研究のフロンティア = New Frontiers in Refugee and Forced Migration Studies』pp.173-179、現代人文社 .
根本敬（2014）『物語　ビルマの歴史－王朝時代から現代まで－』中公新書 .
根本敬（2015）『アウンサンスーチーのビルマ』岩波現代全書 .
根本敬（2016）『「アウンサンスーチー政権」のミャンマー』明石書店 .
松岡佳奈子（2011）「タイ・メラキャンプにおけるビルマ出身難民の現状と第三国定住制度に関する認識調査（特集 第三国定住）」『難民研究ジャーナル 1 号 =Refugee Studies Journal 1』pp.77-88、難民研究フォーラム .
米川正子（2017）『あやつられる難民』ちくま新書 .

【日本語ホームページ】
外務省「ミャンマー連邦共和国基礎データ」〈http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/myanmar/data.html〉（最終閲覧日 2017/9/23）
公益社団法人シャンティ国際ボランティア会〈http://sva.or.jp/〉（最終閲覧日 2017/9/17）
在タイ日本大使館ウェブサイト〈http://www.th.emb-japan.go.jp/jp/jis/2013/1329.htm〉（最終閲覧日 2017/9/23）

【英語文献】
Kim Johnson（2016）"Imagined Futures: Education and Nation-building in Karen-dominated Refugee Camps along the Thailand-Burma", University of Wisconsin Madison
TBC（2017）Strategic-Plan-2017-2019-En.pdf

【英語ホームページ】
KNU ホームページ〈http://www.karennationalunion.net/〉（accessed2017/9/23）
KRCEE ホームページ〈http://childsdream.org/projects/karen-refugee-committee-education-entity-krcee/〉（accessed2017/9/23）

奨励賞

戦前日本の中等教育の大衆化

ー桃園尋常高等小学校を事例にー

松本ゼミ
青 木 宏 太

目次

第１章世界における中等教育の大衆化
1．問題意識と問い
2．調査対象の選定理由と研究方法

第２章　戦前日本における中等教育とは
1．旧制中学校の概要
2．高等小学校
2.1　発足期
2.2　確立と展開の時期
2.3　変容と可能性の時期
3．先行研究の批判的考察

第３章　桃園尋常高等小学校
1．「特権的な」学校
2．小学校に併設されること
3．併置制から単置制へ、そして新制中学校へ

第４章　結論

参考文献

第１章　世界における中等教育の大衆化

1．問題意識と問い

本論文では東京都中野区にある桃園小学校に着目して、明治後期から昭和初期にかけて、中等教育の大衆化の過程において、併置制高等小学校がどのような役割を果たしたのかを明らかにする。

筆者が中等教育の大衆化に関心を抱いたのは、2016 年の夏にインドネシアのジョグジャカルタ州のセロパミオロという農村部を訪れたことがきっかけである。ジョグジャカルタ州はインドネシアのジャワ島中部に位置し、ボロブドゥール遺跡などの歴史的遺産が存在しており、州都のジョグジャカルタ市は国内で有数の観光都市である。筆者は市内から車で 1 時間程離れた農村に訪れた際、「この村（約 14,500 人）の 87% もの人は高校を卒業できていない、また大学卒業者は約 1% だ」という話を聞いた。また、その村の子供達は筆者に対し、スポーツ選手や看護師という将来の夢を語ってくれた。しかし現実は、ほとんどの子供が大工や農家などの限られた職にしか就けないそうだ。家庭の経済的な理由や地理的な条件にかかわらず、ほとんどの子供が中学校、高校に通うことが当たり前になった現代の日本で生まれ育った筆者にとっては、インドネシアの農村と日本における教育機会の差が衝撃的だった。

今でこそ、中等教育純就学率が男子 99%、女子 100% という、世界的に見ても非常に高い就学率を誇っている日本であるが、大正時代の日本では中学校への進学率は 15% 程度であり、裕福な家庭環境の子供などの一部の限られた子供しか中学校へは進学できなかった。そこで筆者は明治後期から昭和初期における日本ではどのように中等教育が大衆化していったのかというプロセスを明らかにすることで、現在開発途上国が中等教育を普及させる上で抱える問題に対して有用な学びを導けるのではないかと考えた。

2. 調査対象の選定理由と調査方法

東京都の中野を調査対象とした理由は、筆者が住んでいて、当時の様子を描いた一次資料を入手しやすいため、丁寧な調査が可能であるという理由以外にもう一つ理由がある。それは、1872 年の学制公布の 3 年後に開校し、創立 142 年を誇る桃園小学校には、明治後期から昭和初期にかけて、家庭の経済的な理由もしくは、学力不足という理由で中等学校には進学できなかった子供が小学校の尋常科[1]を卒業した後に進学することができる高等科[2]が併置されていたからである。1886 年時点で、東多摩郡[3]において高等科が設置されている学校はこの桃園小学校のみであった。

本論文の研究方法は主に明治以降の近代史料研究と先行研究レビューである。桃園小学校の沿革史や卒業生による講話が記されている創立記念誌 6 冊（50、60、80、90、100、110 周年）、当時の学校状況を記した文書（『明治 43 年　桃園小学校教育状況』）、中野町誌や中野区史などの一次史料の分析を行った。また、先行研究レビューに関しては、高等小学校についての初めての研究とされる 1926 年に発行された『高等小学校の研究』（野口）と、高等小学校について通史的に整理された『高等小学校制度史研究』（三羽）を主に扱った。

1　現在の小学校に相当する。詳しくは第２章で述べる。
2　現在の中学 1、2 年生に当たる子供が中等教育を受けるために設置された。詳しくは第２章で述べる。
3　現在の東京都の中野区、杉並区に相当する範囲。

第２章　戦前日本における中等教育とは

1．旧制中学校の概要

現在は「小学校→中学校→高等学校→大学」という単線的な学校体系が完成しているが、この単線的な学校体系が完成したのは戦後である。戦前においては、1872 年の学制の公布から度重なる教育法の改正に伴って、主に中等教育の立ち位置、役割が変化してきた。この節では、明治初期から昭和初期における中等教育の立ち位置、役割の変化について、文部科学省の『学制百年史』[4]を元に時系列で述べる。

1872 年の学制公布以前は、江戸時代から存在した寺子屋や私塾が存在していたものの、そのような教育機関、すなわち学校が初等、中等、高等という三段階編成をとっていなかったため、何を中等教育機関だとするかは明確にできなかった。しかし学制により「学校ハ三等ニ区別ス大学中学小学ナリ」と規定されたため、大学と小学の間の学校として中学という存在が認識された。また、同年の９月８日に公布された「中学教則略」において、「上級第一級卒業スルモ亦通シテ前六級ノ業ヲ温シ試験ヲ経テ大学ニ進ム」と示されているように、中学より大学へ直ちに進むものであって、小学、中学、大学の関係が定められた。しかし、当時は小学校の設置を通した初等教育の普及が優先的に行われていたため、中学校の存在は一般庶民の間ではあまり認識されていなかった。1879 年の教育令において、中学校は「高等ナル普通学科ヲ授クル所トス」とだけしか規定されていないことからも、この時点では中学校の役割が明らかになっていないことがわかる。

1881 年の「中学校教則大綱」と 1884 年の「中学校通則」によって、中学校の目的、性格を明らかにするとともに、中学校制度運営に必要な教育課程や学校管理などの事項を明確にし、制度化した。1881 年の「中学校教則大綱」では、中学校の目的を①中人[5]以上の業務に就くために適切な教育を施すものとして、中流以上の子弟のための教育を行う機関、②高等の学校に入るために必須な学科を授ける所とした。

1886 年に公布された「中学校令」では、中学校の編成を尋常、高等の２種類に分け、そのうち高等中学校は文部大臣の管理に属し全国に５校設置するものであって、尋常中学校は各府県において便宜これを設置できるものとした。さしあたり全国で５校の高等中学校と各府県１校の尋常中学校を配置する企画であった。このことからも明治初期から中期にかけての中学校の役割は、一般大衆に向けた教育機関ではなく、役人や知識人などの一部のエリート養成のための教育機関だったということがわかる。

1894 年に公布された「高等学校令」では、従来中学校の上段階を占めていた高等中学校を尋常中学校とは分離することとした。それにより、尋常中学校を卒業した生徒のための高

4　文部科学省ホームページ　学制百年史（http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm　2017 年 11 月 17 日閲覧）
5　身分や地位、財産が中程度の人。中産の人。中流の生活をしている人（日本国語大辞典）。

等学校[6]を設置し、これにより小学校から大学に至る学校組織は 4 段階の構成となった。また、1899 年に新たに定められた「中学校令」では、尋常中学校の名称を中学校と改め、中学校の目的を「男子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為スヲ以テ目的トス」と規定し、従来の目的も改めた。中学校の設置に関しては、府県に対して「一箇以上ノ中学校ヲ設置スヘシ」として中学校設置を義務付け、さらに文部大臣が必要と認める場合、「府県ニ中学校ノ増設ヲ命スルコトヲ得」として、中学校設置に対する積極的姿勢を明らかにした。それと同時に、中等教育段階を①男子の高等普通教育（中学校）、②女子の高等普通教育（高等女学校）、③実業教育（実業学校）の 3 系統として編成することとした。

1919 年の中学校令改正において、中学校は男子に必要な高等普通教育を行うという従来の規定の他に「特ニ国民道徳ノ養成ニカムヘキモノトス」という条項を付け加えた。また、中学校設置に関しても、市町村学校組合を加えて設置の主体を地域社会にまで拡張した。度重なる中学校教育の内容改善の効果もあり、大正後半期以降、旧制中学校の生徒数が顕著に増加し、学校数も増加したことが図 1 からわかる。

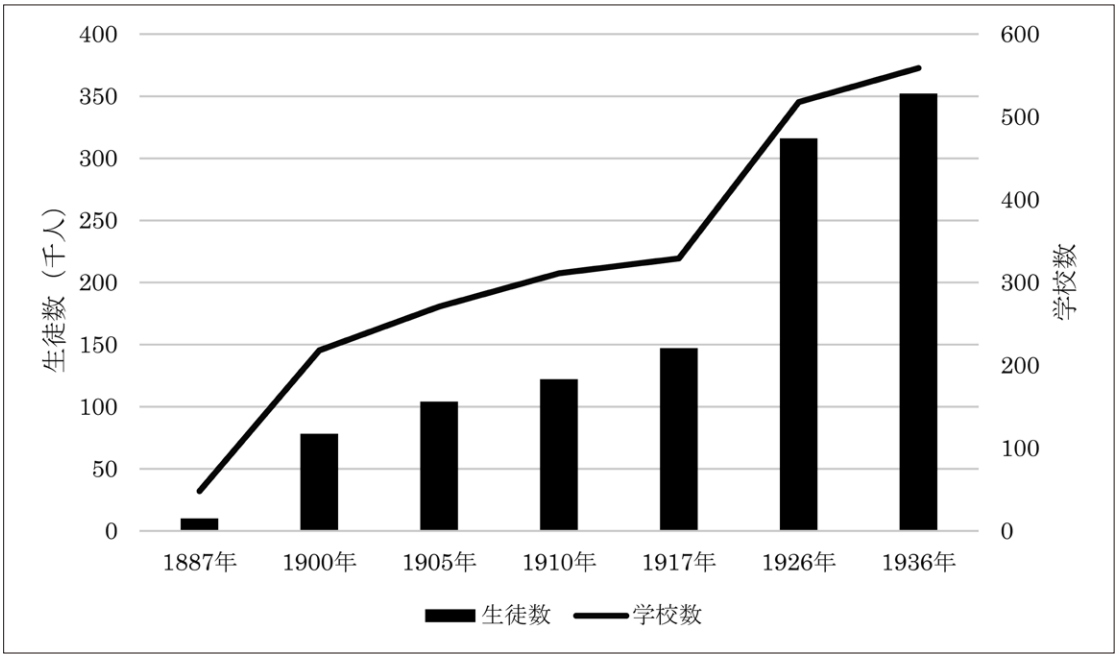


図 1　明治中期から昭和初期における旧制中学校の生徒数と学校数の推移

出所）文部科学省『学制百年史』より筆者作成

2. 高等小学校

2.1　発足期

第 2 章 1 節で述べたような旧制中学校などの中等教育機関があった一方、尋常小学校を卒

6　現在の高等学校に相当する。

業した後の進学先として高等小学校という教育機関が存在した。高等小学校とは 1886 年の小学校令によって成立した学校であり、そこでの教育は尋常小学校における教育をさらに進め、国民として必要な初等教育を完成させることを目的とした。それは 1941 年の国民学校の発足まで存続し、基本的にはその性格を変更することなく、国民学校の高等科へと名称を変えた。高等小学校設立当初は、尋常小学校と同じく 4 年制学校であったが、1907 年の義務教育期間延長によって、尋常小学校が 6 年制となってからは、高等小学校は主に 2 年制となった。大正後半期では尋常小学校 6 年の課程を終えた者の半数以上の者が高等小学校に進学していたことから、高等小学校は当時の国民教育制度の中で重要な位置を占めていたと言える。本節では、その高等小学校の時代ごとの役割の変化について、三羽（1993）『高等小学校制度史研究』と野口（1926）『高等小学校の研究』をもとに述べる。

三羽は明治前半から明治中期までを高等小学校の第 1 の時期と言っている。1886 年の第一次小学校令により、小学校は尋常小学校（4 年間）と高等小学校（4 年間）に分かれたが、このうち尋常小学校の 4 年間のみが義務教育課程となった。それにより、高等科まで進学できる者と進学できない者が出てきた。その理由として考えられるのが、高等小学校の設置形態と授業料に関する尋常小学校との違いである。まず、設置形態に関しては高等小学校の設置は一郡一、二校とされ、各府県知事に設置するか否かは任せられていた。そのため高等小学校の設置の実態は各府県によってかなり異なっていた。1887 年（小学校設置がほぼ完成した年）の全国の公立高等小学校数は 1349 校であり、当時の全国の郡と区の合計は 842 であり、一郡区あたりの公立高等小学校は 1.6 校である。次に高等小学校の授業料に関して、高等小学校の運営費は、尋常小学校のように町村費主体ではなく、授業料収入を主体としていた。そのため、学区を広くし、学校規模を大きくすることにより、教員確保も進み、優良な条件を整えられていた。高等小学校の授業料については、各府県によって異なるため、一概には言えないが、尋常小学校の 2 倍から数倍の授業料だったといわれている。この設置形態と授業料の違いにより、高等小学校は尋常小学校に比べて、一部の限られた子供にしか開かれていない学校であったことが考えられる。

2.2　確立と展開の時期

三羽は明治後期から大正期を高等小学校の第 2 の時期としている。1890 年の「第二次小学校令」により、尋常小学校に高等小学校が併設された学校、いわゆる併置制高等小学校が正式に認められたことで、高等小学校は急速に普及していった。1893 年度の高等小学校 2723 校のうち、併置制のものが 1604 校と 58.9% であり、5 年後の 1898 年度では全体 4847 校のうち、併置制が 3372 校にもなっており、69.6% の高等小学校が併置制高等小学校であった。高等小学校への進学率で見ると、1898 年当時、前年度の尋常小学校卒業者に占める高等小学校課程への進学者の割合は 65.2% であった。この進学率は、10 年前と比べて文

字通り桁違いに上昇している。1900 年の第三次小学校令では「小学校ハ之ヲ分テ尋常小学校及高等小学校トス　尋常小学校ノ教科ト高等小学校ノ教科トヲ一校ニ併置スルモノヲ尋常高等小学校トス」と定められ、これ以降、小学校の種類は尋常小学校、尋常高等小学校（尋常小学校＋高等小学校）、高等小学校の 3 種類となった。高等小学校教育は、まさにこの併置制という形によって全国に急速に普及したと言える。

2.3　変容と可能性の時期

三羽は大正末期から昭和初期における高等小学校を第 3 期としている。1919 年度、尋常小学校卒業者の高等小学校への進学率は 50% 以上ということから、1907 年に義務教育 6 年制が完成した後も、高等小学校が尋常小学校卒業後の進路先としての重要な教育機関であったことがわかる。また、1920 年代初めには高等小学校入学者のうち卒業する者の割合が 70% を超えている。ところが、1926 年 4 月の小学校令、同施行規則中改正（以下 1926 年改正とする）により、高等小学校の性格は大きく変化していった。1926 年改正の内容は大きく分けて 3 点ある。第 1 に、高等小学校で農業や商業などの実業科目を必修科目としたこと。第 2 に、教員数増加を規定すること。第 3 に、教科目担任制の一部導入を奨励したこと。この 1926 年改正は政府の意向だけを汲み取ったわけではなく、帝国教育会のような有識者団体や教員団体の大会、東京市高等小学校長会などの幅広い教育関係者の意見を反映したのが、この 1926 年改正の内容とされている。当時の教育関係者の中では、高等小学校を中等教育の前期部分に近いものとしようとする動きが多く見られた。そのため、旧制中学校には見られない必修化された実業科目や、教科目担任制の導入を促した。1930 年代の単置制高等小学校は併置制高等小学校と比べて、専科教員をある程度確保していたこと、教員の最終学歴・資格が高いこと、教科目担任制を実施している学校が多いとされている。そのような昭和初期における単置制高等小学校では、地域とのつながりや旧制中学校で見られた特徴を持つようになってきた。地域とのつながりとは、伝統的な旧制中学校とは異なり、地域社会に直接結びついて設置される学校であるという意味である。つまり、地域ごとに高等小学校への需要が高まれば、その地域ごとに高等小学校を設置できるということである。旧制中学校で見られた特徴とは、外国語（主に英語）が高い割合で教授されていること、教員の学歴が高いこと、教科目担任制が実施されていることの 3 点である。

戦後日本では、6・3・3 制の成立によって、新たな中等教育機関として新制中学校が誕生するが、その新制中学校の最も重要な成立母体となったのが、高等小学校であると考えられる。主な理由は、新制中学校も高等小学校と同じく、地域社会とのつながりを持った学校であり、実業科目を必修としたためだ。また、海後宗臣編『教育改革』では、「既設の中学校、高等女学校、実業学校を主として改変したものではなく、国民学校高等科（高等小学校）と青年学校を合わせた大衆学校を改造して、これをもって新制中学校としたと見るべきである」とも

述べられている。これらのことより、昭和初期における高等小学校は、戦後成立する新制中学校のもとになったことが考えられる。

3. 先行研究の批判的考察

昭和初期、尋常小学校の卒業者のうち高等小学校に進学する生徒の割合は約 60% にまで達している。その高等小学校にも単置制高等小学校と併置制高等小学校の 2 種類が存在していたことは既に述べているが、1927 年当時、単置制高等小学校が 145 校だったのに対し、併置制高等小学校は 1 万 8025 校存在していた。高等小学校を通史的に扱った三羽の『高等小学校制度史研究』においても、単置制高等小学校については、神戸市などの特定の地域に着目し、ミクロな視点で高等小学校がその地域においてどのような役割を果たしたのか論じられているが、圧倒的に学校数が多かった併置制高等小学校についてはマクロな視点でのみ論じられており、特定の地域で果たした役割については論じられていない。また、1926 年改正に影響を与えた帝国教育会の野口援太郎氏の『高等小学校の研究』では、当時の単置制高等小学校を「民衆の中等学校」として改革することを主張する一方、「高等小学校の多くは尋常小学校に併置せられて居るが、それは所謂併置で、宿借りの如き状態である。その教員（併置制高等小学校の教員）は皆尋常小学校の教員と共通である所から、既に青年期に達した児童に対しても猶小学校流な教育方法を取って居るので、その教育の効果が十分に挙がってこないのも、亦当然のことであった」と述べている。しかし、学校数的に圧倒的に多かった併置制高等小学校が特定の地域において果たした役割についてミクロな視点で考察することは、戦前日本における中等教育の大衆化の過程を考える上で、欠かせないことだと筆者は考えた。そこで、第 3 章では、明治初期から現在まで東京都中野区に存在している桃園小学校（旧・桃園尋常高等小学校）の変遷に着目し、中野における中等教育の大衆化の過程において、併置制高等小学校である桃園小学校がどのような役割を果たしたのかを明らかにする。

第 3 章　桃園尋常高等小学校

1.「特権的な」学校

明治後期から大正中期にかけて、桃園小学校の高等科がどのような役割を担っていたのかを述べる。桃園小学校には 1884 年に高等科が設置された。1886 年の東多摩郡における尋常科、高等科の設置状況は、尋常科・高等科の併置は桃園小学校のみであり、残りの小学校は尋常科のみ設置されている。また、1886 年 6 月、東京府知事から各郡区長にあてた学事改正の書類によれば、高等科設置校についての基本方針として、「6 郡では 4 宿などの繁盛な土地に限る」としているところから、当時の東多摩郡で中野村[7]は重要な位置を占めていたことがわかる。しかし、1882 年から 1886 年における卒業生の数は尋常科が 208 名に対して、

7　自治制が変わる 1897 年までは中野村。それ以降は、中野町。

高等科は 4 名であったことや図 2 から、明治後期における高等科は尋常科と比べて、普及していなかったことが考えられる。

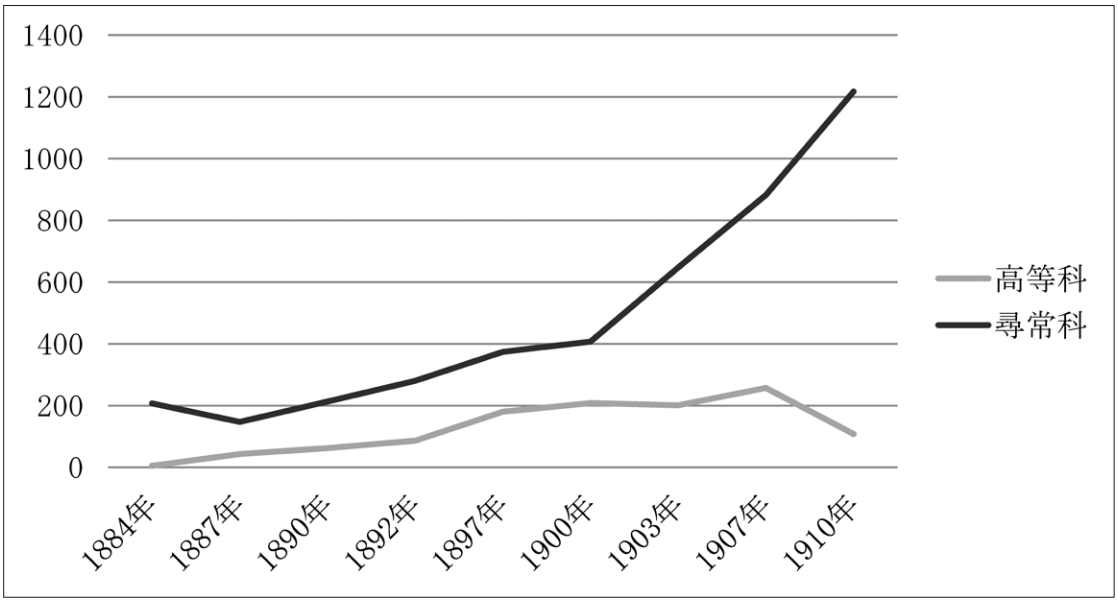


図 2　桃園小学校の尋常科と高等科の生徒数推移

出所）桃園小学校創立 100 周年記念誌と中野町誌を元に筆者作成

1907 年に高等科の生徒数が減少しているのは、1907 年に義務教育年限の延長により義務教育 6 年制が確立され、高等科が 4 年制から 2 年制に変更されたためである。

また、1897 年卒の柳澤林之助氏は「当時（筆者注：1897 年頃）は、男女混合制にて尋常科は 1 級 1 室を以て足り、高等科は 2 級（筆者注：2 学年）を 1 室に収容して 1 人の先生教壇に在り交互に之が教授の任に当れるの形態は今日（筆者注：1924 年頃）顧て当に当年の珍とするに足るなり」[8]と言ったり、1915 年卒の山口宗三郎氏は「当時はもう 6・2 制で高等科と言えば、今の大学位の価値がありました。高等科は 1、2 年が一緒の教室で同じことを勉強するので、私が入った時はいきなり高等 2 年の勉強をさせられたんですよ。それでもう 1 年いてもつまらないから 1 年だけでやめちゃいました」[9]と言っていることから、明治後期から大正初期における桃園小学校の高等科は一般庶民に普及していたとは言えず、先行研究で示されていた通り、経済的に裕福な家庭の子供のような一部の限られた子供しか通うことのできないある意味で特権的な学校であったと考えられる。

8 『桃園 50 周年記念誌』の回想録より
9 『桃園創立 80 周年記念誌　1955』の座談会の記録より

2.2　小学校に併設されていること

次に大正後期から昭和初期における桃園尋常高等小学校の役割について述べる。大正中期までは、前節で述べたように一部の子供しか通うことができなかった教育機関であった。しかし、1926 年改正により高等小学校の大幅な内容改善が行われ、実務教育の思想が入ったことで、桃園尋常高等小学校でも、昭和初期になると、徐々に高等科の生徒数が増加していった。そして、この時期に多くの人たちに高等小学校が尋常小学校を卒業した後の進学先として見られるようになっていった。

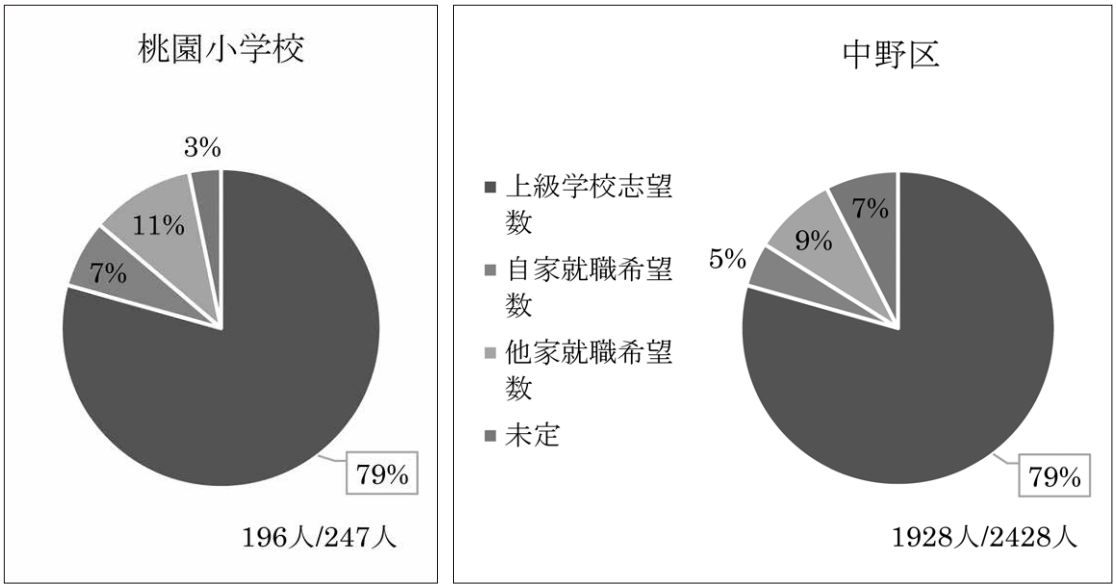


図 3　尋常科 6 年生の卒業後の進路希望調査（1933 年 11 月）

出所）『桃園小学校 60 周年記念誌』を元に筆者作成

図 3 は、1933 年の桃園小学校と中野区に当時存在した尋常小学校全校[10]の尋常科 6 年生の卒業後の進路希望調査の結果である。桃園小学校も、中野区の小学校全体で見ても、約 80% の子供が尋常科を卒業した後は上級学校を志望していることがわかる。このことから、昭和初期（1926 ～ 1930 年代後半）の中野では尋常科卒業後の教育への需要が高まってきていたと考えられる。

10 桃園尋常高等小学校、桃園第二尋常小学校、桃園第三尋常小学校、桃園第四尋常高等小学校、桃園第五尋常小学校、谷戸尋常高等小学校、本郷尋常小学校、雑色尋常小学校、東中野尋常小学校の計 9 校（尋常科のみ 7 校、高等科併置 2 校）が存在した。

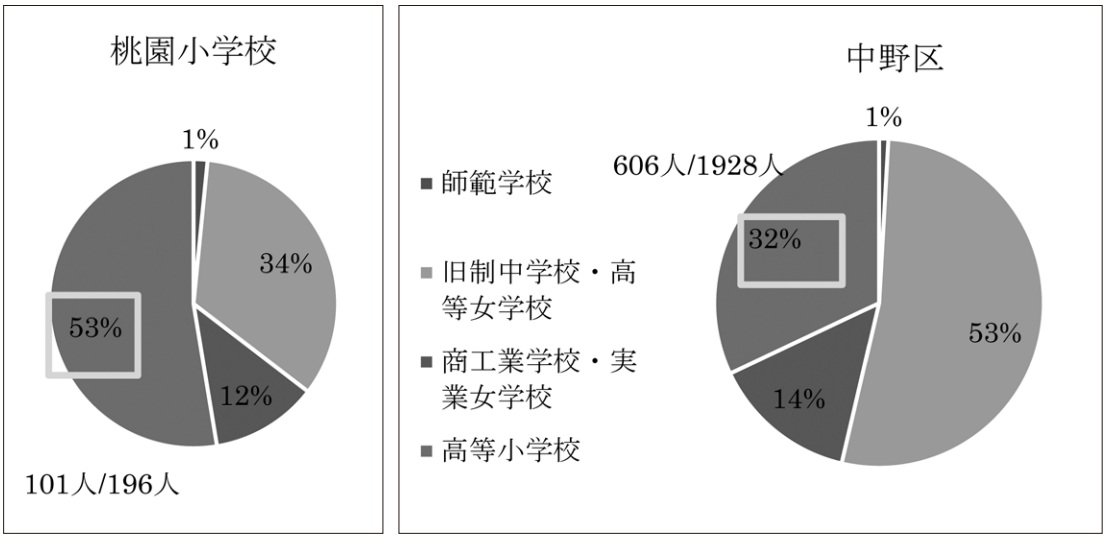


図 4　上級学校[11]の内訳（1933 年 11 月）

出所）『桃園小学校 60 周年記念誌』を元に筆者作成

図 4 では、図 3 の上級学校の内訳を示している。上級学校に進学したいと希望した桃園小学校の尋常科 6 年生 196 人中 101 人（全体の 53%）が従来、尋常科卒業後の主な進学先とされていた旧制中学校や高等女学校などの中等教育機関ではなく、高等小学校を希望している。その一方で、中野区の小学校全体では上級学校を希望していた 1928 人中 606 人（全体の 32%）が高等小学校を希望しており、1928 人中 1021 人が中等教育機関である旧制中学校や高等女学校を希望している。この 2 つのことから、昭和初期において、桃園小学校には高等科が併設されているため、尋常科のみの他の小学校よりも高等科、すなわち高等小学校が、尋常科卒業後の上級学校として浸透していたことが考えられる。

明治後期から大正中期における桃園小学校の高等科は、一部の限られた子供しか通うことのできない特権的な学校であったのにもかかわらず、大正後期から昭和初期にかけて、徐々に一般大衆に尋常科卒業後の上級学校として浸透していった理由は 2 点ある。第一に、教育に対する行政の理解があったことが考えられる。これは、1926 年度の中野町の行政予算の半分が教育費に当てられていた[12]ことから、教育に対する行政の理解が一定あったことがわかる。第二に考えられるのは、教育に対する保護者の理解である。1910 年にはすでに行われていたとされる桃園小学校の教育懇話会[13]では、毎年、生徒の保護者を学校に呼び、主に生活面での指導法について学校の先生と話し合う機会を設けていた。また、1912 年に創設された桃園尋常高等小学校教育会は、小学校児童用品の共同購入とその支給を会の目的とし、実質は学校

11 その学校よりもさらに高度な学問を学べる教育機関のことを指す。
12 平成 28 年度の中野区の行政予算のうち、子供教育費が占める割合は 22% である。
13『明治 34 年　桃園小学校教育状況』より

の後援会として桃園小学校の経済と便利に貢献したとされる。これらの行政と保護者の教育に対する理解があったからこそ、大正後期から昭和初期にかけて、桃園小学校の高等科は徐々に上級学校として一般大衆に受け入れられていったのだと考えられる。

2.3　併置制から単置制へ、そして新制中学校へ

桃園小学校第 13 代校長の細谷章氏の手記『桃園回顧録』によると、「1926 年、改築決定し、校舎の設計にとりかかった。ところが、此の改築の途中、中野区では区内の高等科を一校にまとめる高等小学校の建設を計画し、千代田町に中野高等小学校（現・中野区立第二中学校の位置）の建築、桃園と谷戸にある高等科を全部ここにまとめるため校舎の設計・建築にとりかかったのであります」とあるように、当時の中野区では、区内にある二つの併置制の高等科を一つの単置制高等小学校にまとめることが決められた。この背景には、高等小学校の生徒数の増加がある。桃園小学校創立 100 周年記念誌には「1926 年 4 月 22 日の小学校令施行規則の改正により『高等小学校の改善』があり、この教育方針が支持されたことによって、高等小学校に実務教育の思想が入り、ここを 1 つのまとまった学校の形として編成することが各地において見られることとなり、高等小学校 2 年間の学習を積むことはすべての青年にとって必須であると考えられるようになった。1936 年にかけて高等小学校の生徒数は著しく増加、それにつれて高等小学校の数も増加したのである（1935 年、小学校卒業者の約 75% が高等科に進学）」とあるように、高等小学校の生徒数が増加したことにより、併置制高等小学校から単置制高等小学校へと変化したと考えられる。先行研究によると 1926 年改正後、全国的には単置制高等小学校は増加していないが、東京、大阪、神戸という大都市部では、増えていった。1930 年代の単置制高等小学校の実態として、併置制高等小学校と比べて、専科教員をある程度確保していたこと、教員の最終学歴・資格が高いこと、教科目担任制を実施している学校が多いことが明らかになっている（三羽　1993）。当時の中野区の行政も、高等小学校教育をより発展させるために、2 つの併置制高等小学校を 1 つにまとめ、単置制高等小学校を設立したと考えられる。中野においてもこの「高等小学校→国民学校高等科→新制中学校」という学校体系上の移行は見られる。「1947 年 4 月 1 日、独立校 8、分校 1、委託校 2、合計 11 校の区立新制中学校が設置された。第五中学校は高等科単置のため城西国民学校が廃止転換昇格したものであり、第六中学校は同じ理由で中野国民学校が昇格したものである。これら昇格に伴ひ、在校児童は中学校準義務生に編入された」[14]とある。つまり、長期的な視点で見ると、「桃園小学校高等科（併置制高等小学校）→中野高等小学校（単置制高等小学校）→城西国民学校高等科→区立第五中学校（新制中学校）」という戦後日本において義務教育化された新制中学校が成立するまでの過程の中で、併置制高等小学校は重要な位置付けであったと考えられる。

14『中野区史　別冊　中野区の新しい歩み』中学校　区立中学校の創立と区内中学校の概況（153 頁）

第４章　結論

本論文では、「明治後期から昭和初期にかけて、中野における中等教育の大衆化の過程において、併置制高等小学校がどのような役割を果たしたのか」という問いに取り組んできた。多数の一次史料の分析から以下の３点が明らかになった。

第一に、明治後期から大正中期における併置制高等小学校は、経済的に裕福な家庭の子供や学力が著しく高い子供などの限られた子供しか通うことのできない特権的な学校という役割だったことである。

第二に、大正中期から昭和初期における併置制高等小学校は、尋常小学校卒業後の上級学校としての役割を果たしていたことだ。第３章２節でも述べたように、1933 年度の桃園小学校６年生の進路希望調査からも、伝統的な中等教育機関である旧制中学校や高等小学校よりも併設されている高等小学校への希望者の方が多いことがわかる。

第三に、単置制高等小学校の成立母体としての役割である。戦後の中野区では、義務教育化された新制中学校が誕生し、中野区のほとんどの子供が新制中学校に通っていた。その新制中学校の１つである区立第五中学校の成立母体になっているのが、単置制高等小学校であるが、その単置制高等小学校の母体は桃園小学校と谷戸小学校の２校の併置制高等小学校であったことがわかっている。そのことから、戦後誕生した新制中学校の源流は併置制高等小学校まで遡ることができると言える。戦後の中野区において、家庭の経済的理由や学力にかかわらず、ほとんどの子供が通うことのできた新制中学校のベースが併置制高等小学校にあったと考えられる。

【参考文献一覧】

田中卓也，皿田琢司，佐藤環，菱田隆昭．日本の中等教育過程と教育法に関する基礎的研究（第３報）- 大正期における中等教育の大衆化と実業教育 -，常磐大学人間科学学部紀要『人間科学』．2007，vol.1，no.2，p.23-34.
文部省．学制百年史．帝国地方行政学会，1981.
黒田一雄，横関祐見子．国際教育開発論 - 理論と実践 -．有斐閣，2005，p.103-119.
所澤潤, 木村元. ”日本の近代小学校と中等学校進学 - 東京市公立進学有名小学校の変化の事例に即して -”，東京大学教育学部紀要第 27 巻．1987，p.332-351.
三羽光彦．高等小学校制度史研究．法律文化社，1993.
野口援太郎．高等小学校の研究．日本図書センター，1926.

【中野区】
桃園尋常高等小学校後援会．桃園小学校創立記念誌 50，60，80，90，100，110 周年
野方小学校創立記念誌 100 周年
関利雄，鎌田雄．中野区の歴史　中野の教育．1979，p.141-156
東京都中野区役所．中野区史　別冊　中野区のあらたな歩み　第八章教育及び宗教．1951，東京都中野区役所，p.137-174.
東京都中野区．中野区史　昭和編二．1972.
東京都中野区．中野町誌

最優秀賞

中国貴州省・石門坎の観光資源化プロセス

ー価値を見出す多様なアクターの考察ー

曽先生・松本先生
汪 牧 耘

1　研究背景――20 世紀の石門坎のラフスケッチ

本研究で取り上げる石門坎は、中国貴州省の石門郷に位置しており、20 世紀前半における欧米からのキリスト教の宣教師による社会的変容で注目が集まった場所である。

20 世紀初め、サムエル・ポラード（Samuel Pollard, 1864-1915）という英国籍の宣教師は石門坎を訪れ、漢族の教師や地元住民の協力を得て布教活動と学校教育を行った。当時の石門坎のミャオ族千人以上がキリスト教に入信し、積極的に教育を受けた。その後、宣教師らが設立した小・中学校の卒業生から教師や地方行政官になった人が多くいたことで、石門坎は「西南中国における文化水準の最も高い地域」［王　1983：249］とも呼ばれるようになった。

図 1.　1906 年のサムエル・ポラード（後列・右端）と石門坎のミャオ族
（出典：楊志武氏の資料より）

有名になった石門坎は当時の中国で実権を握っていた国民党の警戒を招き、国民として統合する対象とされた。1940 年前後、自然災害や国内外の戦乱によって、石門坎周辺の山岳地域で山賊が出没した。教会や学校は略奪され、外国人の宣教師は身を守るために帰国しはじめた［沈　2007］。

中華人民共和国の建国直後、国家の安定と団結をめざす民族・宗教政策によって、石門坎への支援が行なわれた。しかし、1950年代後半以降、政治路線をめぐる対立から展開された階級闘争によって中国全土が社会的な動乱に巻き込まれた。階級闘争にともなう反帝国主義の風潮により、西洋と関わるものすべてが攻撃の的になった。石門坎では、宣教師らが設立した教会や小・中学校の校舎、宣教師の墓が相次いで壊され、学校の卒業生やキリスト教徒も批判の対象となり、投獄されたり、逃亡や自殺などに追い込まれたりすることが多くあった［马 2016］。

改革開放以降、中央政府は階級闘争の是非を見直し、冤罪で汚名を着せられた人びとの名誉を回復し始めた。社会的な動乱が鎮まってきた一方で、石門坎における生活や教育条件の改善は長い間見られなかった。

2　問い―観光開発の動きへの疑問

2015年、共産党貴州省委員会の書記が石門郷を視察した。その翌年、石門郷は貴州省の省政府に極度な貧困地域と指定され、貧困撲滅の政策[1]の対象になった。それを契機に、石門郷において多くのインフラ整備や産業振興プログラムが本格的に行なわれ、観光開発も貧困撲滅政策の一環として進められている。20世紀前半のキリスト教と教育成果に関する過去の出来事で有名になった石門坎は、今回の観光開発の中心地になっており、20世紀前半に作られた校舎や寮などの遺跡は重要な観光資源と見られている［史ら　2016］。

改革開放以降の中国においては、石門坎の例のように、地域振興策の1つとして、地域の歴史や文化を観光のために活用し、経済的な利益をもたらそうとする開発計画は少なくない。しかし、政府が石門坎を観光開発の対象にすることには疑問を感じる。なぜなら、石門坎では、キリスト教の影響力の拡大や20世紀の社会運動でキリスト教徒や知識人を弾圧したことによる政府への非難を防ぐため、石門郷政府は改革開放以降も、石門坎における民間人の調査・取材やキリスト教に関する活動をしばしば制限していたからである。そのような政治的なセンシティビティを抱える石門坎は、なぜ今になって政府主導の観光開発の対象になったのか。本研究はこの問いに取り組む。

3　仮説―「脱宗教化」

石門坎の歴史に関する研究は多くある。例えば、［东 2002、沈 2007、马 2016］である。しかし、石門坎の観光開発はかなり新しい出来事であるため、新聞記事にしか書かれていなかった。一方で、中国における一地域を事例として取り上げ、その地の文化的要素がどのよ

1　2016年9月、貴州省政府は、貧困発生率、貧困人口数、都心への距離などの指標をもとに、省内の20の郷・鎮を極度な貧困地域と指定した。個別の調査データが公表されなかったが、石門郷はそのなかでもっとも貧しい郷とされた。指定された貧困地域を中心に、その状況を合わせて貧困問題を解決するという“精準扶貧”政策は行なわれてきた。
貴州省人民政府「贵州：省级干部“挂帅”决战极贫乡镇」http://www.gzgov.gov.cn/xwdt/mtkgz/201709/t20170927_1031996.html 最終閲覧日 2017年12月13日

うに観光に結びつく有用な資源になるのかを論じた研究はすでにある。そうした中国の観光資源化については主に 2 つの点から議論がなされてきた。

まずは、観光開発は多くのアクターと関わっているが［孫　2016］、中国の場合は政府が主導的であることが指摘されている［陶　2010］。2 点目は、経済的・政治的要因による歴史と文化の再編が多くあるという指摘である［周　2004］。特にある文化における宗教的要素は、政府主導の観光開発によって取り除かれる傾向があると指摘されている［片岡　2016］。以上のことから、先に筆者が挙げた問いに対して次のような仮説を導くことができる。すなわち、経済発展のため、政府がキリスト教という 20 世紀初めの石門坎の歴史を「脱宗教化」することで、政治的にセンシティブな石門坎を政府主導で観光資源化することができるようになったのではないかというものである。本研究はこの仮説の検証を念頭に置きながら進めていく。

4　研究目的―資源化のプロセスに着目する

石門坎の観光資源化を扱う本研究を進めるうえで、資源論や文化資源学によって提示された 2 つの視点を重視している。1 つ目は動態的捉え方である。経済学者のジンマーマンによれば、資源はあるものでなく、人の働きかけによってなるものである［ジンマーマン　1983］。その資源化プロセスを対象にすること、また、「あるもの」に対する捉え方の変化を考察することが重要となる［木下　2002］。2 つ目は、資源になるプロセスに関わるアクターに注目し、それぞれの働きかけを具体的に描くことである［森山　2007］。以上の指摘から、本研究は、改革開放以降の約 40 年間にわたって石門坎の歴史や文化に対する様々なアクターの働きかけを描くことによって、石門坎における観光資源化のプロセスを明らかにすることを目的とする。

5　フィールドワーク

筆者は、① 2016 年 8 月 8 日から 8 月 24 日までと、② 2017 年 2 月 12 日から 3 月 9 日までの 2 回にわたってフィールドワークを実施し、民間および政府のインタビュー協力者計 28 名に聞き取り調査を行った。調査の中心地は石門坎（石門郷政府の所在地の栄和村）である。[2]

また、インタビュー協力者の居住地は石門坎に限らないため、貴州省のほかの地域（貴陽市内、威寧県石門郷年豊村、赫章県輔処郷・葛布村）や雲南省（昆明市、安寧市）も訪れた。インタビューは中国語または地方の方言で行なった。

6　調査結果―観光開発に至るまでの 40 年間

6.1　改革開放初期の石門坎

石門坎の資源化の始まりは 1980 年前後、すなわち、中国の社会的動乱が鎮まって、文化

2　栄和村の面積は約 7.16 km^2 であり、総人口は 2272 人である。少数民族の割合は約 49％を占める。

の復興や信仰の自由が再び認められるようになった改革開放以降だと考えられる。文献調査とフィールドワークの結果に基づき、当時の状況は次のように描くことができる。

1977 から 1990 年の約 13 年の間、石門坎におけるミャオ族出身の大学・専門学校の合格者は皆無であり、教育の水準は 100 年前と雲泥の差であることがわかった［威宁彝族回族苗族自治县志编纂委员会 1994:108］。また、政府は改めて信仰の自由を唱えるようになったが、石門坎の地元住民はかつて弾圧を受けたため、キリスト教を復興することに慎重な姿勢を見せた[3]。それに、石門坎の生活は極めて貧困であり、整備された道路も交通機関もほとんどなかった［马 2016］。そのため、ほかの地域との往来は非常に難しかった。

6.2　民間の動き

6.2.1　知識人の影響

そのような石門坎に最初にやってきたのは、その地の歴史に惹かれて、1980 年代の初めに来訪した知識人であった。後に「貴州教育史研究の第一人者」と呼ばれる譚佛佑や貴州省宗教局のキリスト教部門で勤めていた張坦はその例である。改革開放後初めて石門坎を表題にした本が張坦によって発行されたことを機に、石門坎をめぐる議論や関心が呼び起こされ、石門坎を訪問し調査する知識人が増えてきた。

書物の出版と流通は、外部の人びとが石門坎を知る機会になっただけではない。石門坎民族中学校の創始者の朱煥章の娘である朱玉芳へのインタビューによって、張坦の本の出版は、彼女にとって自らの過去を再評価するきっかけになったことがわかった。

朱玉芳によると、父親が粛清運動の圧力に耐えきれなくなって自殺したこと、また、自分たちが彼の子供として、文化大革命などの社会運動によって散々打撃を受けてきたことを考えると、自ら書くことはつらいと感じていた。しかし、張坦の本を読んで、朱玉芳の考えは変わった。

「1993 年、張坦先生が『“狭き門”前の石門坎』を出版しました。その本の中で、張坦先生は私の父親をその時代の西南中国における『ミャオ族の教育家』と高く評価してくれました。我々はそれを見てから、『書けるのだ、書こう！』と決意しました。ほかの人ですら父親のことを書きました。ならば、我々に書けない理由はないです」[4]。

父親の伝記を書くことを決めてから、資料を収集するために朱玉芳が夫と一緒に石門坎やその周辺の地域を訪ねた。人びとの反応は熱心で、「朱校長のことならば私がよく知っていますよ」と色々教えてくれたという。2007 年、朱玉芳夫妻は入手した資料と聞き取りの結果に

3　60 代の地元住民 Z 氏へのインタビューより、2016 年 8 月 20 日、Z 氏の自宅にて
4　朱玉芳へのインタビューより、2017 年 3 月 11 日、朱玉芳の自宅にて

基づき、朱煥章の伝記を書き上げて出版した。[5]

1990 年代に入ると、OXFAM をはじめとする石門坎の地域復興に関心を持つ NGO や石門坎の歴史の宣伝に力を入れる社会活動家など様々な民間のアクターが現れてきた。彼らによるそれぞれの働きかけは石門坎の地域の発展や知名度の向上に大きな影響を与えてきた。次に、様々な出来事の中でも、政府を巻き込んでいく転換点になる 2005 年のことを中心に紹介する。

6.2.2 「校友会」

2005 年は、20 世紀初めに宣教師の主導の下で作られた石門坎光華小学校と石門坎教会の創立 100 周年の記念の年である。本節ではまず学校の慶祝活動の経緯について述べる。

石門坎の小・中学校の校長や教師といった教育関係者は、2005 年という特別な年に学校の慶祝活動を行うことが必要だと考え、2000 年から慶祝活動の開催を政府に申請していた。政府の態度が不明確なままだったが、2005 年になって政府はイベントを開催しないと決定した［王　2007］。

一方で、政府の支持がなくても、さらに政府に反対されても、石門坎の教育に貢献した人びとのために学校の創立を祝うべきだという民間人の熱意があった。昆明の卒業生の提案で、石門坎の周辺地域に散在している校友、または校友以外の石門坎に関心を持つ人びとは光華小学校の創立 100 周年を祝うために石門坎に集まり、「校友会」を開催した。[6]

2005 年当時、石門坎民族中学校の校長を務めていたＣ氏は、校友会の開催に協力するのは自分の責任だと考えた。過去 1 世紀の間に、石門坎の発展に貢献してくれた人びとに敬意を示すため、行政側の圧力があるからといって校友会を中止するわけにはいかない。むしろ、それでも校友会を開催する決意をすることで、自分は存在している価値があると思ったという。[7]

Ｃ氏の話によると、校友会に集まってきた卒業生などの関係者は、石門坎への思い入れの非常に深い人びとである。Ｃ氏は、卒業生の石門坎への愛情に感動し、自分自身も石門坎が独特な過去を持つ大切なところだと思うようになった。さらに、そのような真摯な人びとのために何かをやってあげたいという気持ちが浮かんできた。

「印象的なのは、その時（2005 年）の石門坎って、2 つの『旅館』しかなかったですね。旅館とはいえ、トイレが付いていません。皆さんがトイレに行きたいならトウモロコシの畑に行くのですよ。一人の記者がその『旅館』に一晩泊まったら、ノミに刺されて大変に

5　朱玉芳《云南苗族文化丛书 光华之子：我的父亲朱焕章》云南民族出版社 2007 年
6　校友会には、昆明、昭通、怒江、彝良といった石門坎の周辺地域に散在する石門坎小･中学校の卒業生、石門坎に関心を持つジャーナリストや知識人、イギリスからきた宣教師の子孫を含む。2005 年 11 月 15 日という学校の創立の日に開かれた最初の校友会の来場者は約 60 人だった。
记念石门坎光华小学校百年华诞的活动会报 http://www.shimenkan.org/book/f/a/　2017 年 5 月 26 日閲覧
7　Ｃ氏へのインタビューより、2017 年 2 月 26 日、石門縁旅館にて

なりました。皆さんがわざわざ来たのに、特に年配者の場合は、旅館が泊りにくくて帰ってしまったのです。なので、2006 年頃に、私が部屋を建て直す時には二階建てにしました。つまり、皆さんが泊まってもらえるところを作りたかったんです」。[8]（括弧内は筆者注）

その後、彼は自宅を旅館として経営しはじめた。宿泊の場合は特別に、石門坎を研究する者を対象とする宿泊料金の割引がある。多くの研究者が泊まったことで、旅館は「研究者の寮」とも呼ばれていた。C 氏は、旅館の経営によって同じように 20 世紀前半の石門坎の教育成果に感銘を受けた人びととの交流を楽しんでいる。様々な人が石門坎で出会うという縁を大切にするという意味で、旅館を「石門縁」と名付けた。「石門縁旅館」は、石門坎に関心を持って遠くからやってきた人びとが泊まって、ゆっくり話し合える重要かつ唯一の場とも言える。

6.2.3　キリスト教徒の活躍

図 2.　石門坎教会 100 年記念のために集まったミャオ族信徒

［陈 2012:89］（撮影：2005 年 11 月 12 日）

校友会の開催とともに、光華小学校と同年に設立された石門坎教会でも設立 100 周年の記念活動が行われた。石門坎周辺の多くの教会から千人以上のミャオ族の信徒が集まってきたという[9]（図 2）。

2000 年代後半から、石門坎周辺のほかに、他の地域から石門坎に足を運ぶキリスト教徒も増えている。フィールドワーク中も、北京、浙江や雲南などといった中国の他の省からきたキリスト教徒に多く出会った。他地域のキリスト教徒によって行われた支援活動には、教育や貧困の問題に関心を持つ知識人や NGO とは異なり、信徒の礼拝の環境を改善するための支

8　C 氏へのインタビューより、2017 年 2 月 22 日、石門縁旅館にて
9　石門坎教会の責任者、W 氏へのインタビューより、2017 年 2 月 22 日、石門坎教会にて

援も含まれていた。2004 年にマカオの信徒の寄付によって新しく建てられた石門坎教会はその一例である。

キリスト教徒からみると、石門坎が奇跡的な発展を遂げた場所になったのは、キリスト教徒の信仰心が篤かったからである。さらに言えば、石門坎自体は、キリスト教の信仰による社会救済の証でもある[10]。石門坎で支援を行なっているキリスト教徒は、1 世紀前のポラードをキリスト教徒の模範とし、石門坎をキリスト教の無我や博愛の成果を見学する場として捉えている。支援を通して、石門坎の人びとの生活改善だけでなく、キリスト教の教えを自ら実践し、教えの意義をより深く理解することも望んでいるという[11]。

6.3　政府の動き

6.3.1　貧困撲滅政策

大勢の民間人の集まりが現れてきたことで、それまでほとんど石門坎のイベンドに参与しなかった政府も動き出した。2006 年、政府は学校の創立慶祝会を改めて開催し、光華小学校とその周囲の建築物を貴州省の文化財に指定した。石門坎の歴史に関する書籍も政府によって発行されるようになった。一方で、現地の NGO を撤退させ、行政の力を強めようとする動きも見られる。

政府による施策は色々あったが、冒頭で述べた 2016 年からの貧困撲滅政策は、改革開放後の石門坎にとって最大の出来事と言われ、観光開発のきっかけともなっている。

2015 年、貴州省の共産党書記の陳氏は石門郷を視察し、2016 年、石門郷は省内の最貧困地域の 1 つと指定された。それから、貧困撲滅政策が実施され、大規模なインフラ整備が石門坎で行なわれている。半年でインフラ整備よる町の変化が著しい（図 3）。

図 3.　2016年8月（左）と2017年2月（右）の石門坎商店街入り口（筆者撮影）

10 石門坎教会の礼拝における教会責任者や他地域から来訪のキリスト教徒のスピーチによる。
11 キリスト教徒の活動家 A 氏へのインタビューより、2017 年 3 月 8 日、A 氏のオフィスにて

6.3.2　観光開発

2017 年 2 月、陳氏は石門坎を再訪し、石門坎の観光開発の本格化を指示した。また、貧困撲滅政策の成果を「党史博物館」という形で観光エリアにおいて展示することを求めている。その指示を受けた石門郷政府は、観光コンサルタント会社を石門坎に呼び、観光開発を急速に取り組むようになった。一方で、地元住民は観光開発が始まることをほとんど知らず、その議論に参与することもできなかった。

表 1.　観光開発についての提案・意見（筆者作成）

観光業者 [12]	遺跡のまま	キリスト教の聖地	ミャオ族の民族文化
県・郷政府 [13]	貧困撲滅の成果の展示	政治的にセンシティブな問題の回避	中華民族の一員であるミャオ族の主体性を強調する

今回の石門坎の観光デザインを担当したのは、上海の観光コンサルタント会社（以下はQ社と呼ぶ）である。石門坎をどのような観光地にするのかについて、Q社によって複数の提案がなされたが、政府との議論を積み重ねた結果、ミャオ族の民族文化を中心とする案が選ばれ、さらに「ミャオ文明」というタイトルを付けられている。Q社へのインタビューによると、「ミャオ文明」はミャオ族の伝統文化だけでなく、石門坎のミャオ族の特徴的な教育による「文明化」の歴史も含まれていることも意味している。

Q社による観光設計図によると、石門坎の校舎の遺跡以外は、22 箇所の新しい景観が計画されている。エリアごとのデザインのほとんどはミャオ族の文化要素を入れながら行なわれている（図 4）。

石門坎における 20 世紀前半の教育成果やミャオ族の文化が宣伝の中心になる一方で、キリスト教という宗教的文化要素が薄められている。また、既述したような、「党史博物館」という陳敏爾書記の提言が加わり、石門坎は行政主導の観光開発によって、貧困撲滅の成果を展示する場になる見通しである。

一方で、観光開発がどれほど細かく計画されたとしても、実施する段階においては、参画する企業や団体が計画段階と異なるため、設計と実際の出来上がりの差が出てくる。中国では、Q社をはじめとする多数の設計会社は上海や北京などの大都市に事務所を構えており、地域振興を目指す観光開発の対象地から遠く離れている場合が多い。そのため、観光コンサルタント会社は施工を監督することができない。施工の質や進捗を検定する仕事を現地の建設会社に任せることになる。したがって、設計図に示された理念が計画通りに具現化できず、大きなズレが生まれることが多い。観光地としての石門坎は一体どのような様子に生まれ変わっていくのであろうか。観光資源化は今も続いている。

12 Q 社の担当者 D 氏へのインタビューより、2017 年 2 月 22 日、石門坎の旅館にて
13 地元政府の職員、K 氏へのインタビューより、2017 年 2 月 16 日、石門郷政府にて

図 4.「九黎広場」の設計図

（出典：『貴州省畢節市威寧自治県石門郷石門坎景区修建性詳細規劃』より）

7　結論

本研究の問いは、キリスト教で警戒されてきた石門坎がなぜ政府主導の観光開発の対象になったのかである。先行研究からその理由は政府が石門坎の歴史を「脱宗教化」したからではないかと仮説を立てた。確かに、現在進行中の観光開発において、地元住民をはじめとするほかのアクターは従属的な立場に置かれ、石門坎の歴史的・文化的価値は行政主導で再解釈されている。政府にとって受入れやすくするため、キリスト教の要素を切り捨てるという動きが見られる。しかし、「脱宗教化」だけでは石門坎で観光開発が行なわれている理由を説明することができない。現在進行中の観光開発に至るまで、長いプロセスがあるからである（図5）。そもそも、政府が石門坎の文化的・歴史的価値に注目したからこそ、石門坎は開発対象に選ばれたのである。それを促したのは、民間の諸アクターの働きかけだった。

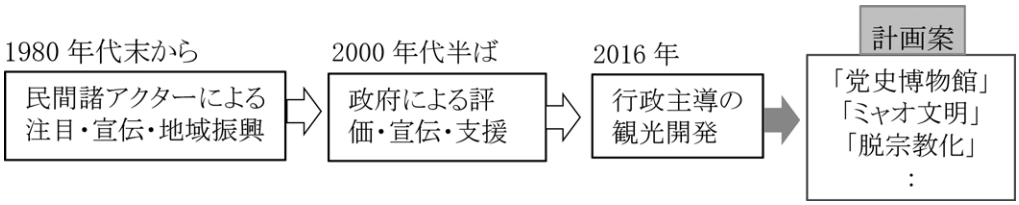


図 5. 石門坎の歴史・文化の資源化（筆者作成）

40 年間にわたって、学者、ミャオ族、NGO や政府などの異なる背景と興味関心を抱いている様々なアクターが、石門坎の歴史から価値を見出そうとした。それぞれの働きかけの積み重ねによって、石門坎の価値が発掘され知名度が高められたことで、政府もようやく石門

坎の文化的・歴史的価値を認めるようになり、貧困撲滅政策をきっかけに観光開発の本格化に至った。そうしたプロセスを経た上で、政府は石門坎の宗教的要素を取り除き、ミャオ文明や党による貧困削減の成果という新たな価値を付与したのである。したがって、「脱宗教化」は、あくまでこのプロセスの最後の段階で現れた 1 つの動きと考えるべきである。

8　考察

「あるもの」への価値判断が時期やアクターによって変わっていくことは、石門坎における民間の働きと政府の対応に表れている。資源化とは、我々が時代の需要や個人の考えに基づいて、ある形、語り、生活様式に価値を見出したり、意義を与えたりすることで、「あるもの」を今の我々にとって有用なものにすることとも考えられる。

一方で、石門坎の事例は、資源化のもう一側面を示した。それは、「あるもの」が一つの価値判断で資源化されるとともに、それに対するほかの捉え方が切り捨てられることである。すなわち、資源化による価値の画一化だ。そういう意味では、異なる働きかけによって、今はすでに成り立ったそれぞれの観光地は異なる形で我々の目の前に現れてくる。1 つの地域であれ、1 つの文化であれ、すでに資源化された「あるもの」には、実は今よりも多様な捉え方と働きかけの可能性が宿っているからである。

以上のことから、石門坎という中国の一地域社会の事例を通して、筆者は、「あるもの」に宿っている価値を発見するには、資源化の結果ばかりではなく、資源化される前または資源化されているプロセスにおいて、記録されない限り、時間によって消えてしまうそれぞれのアイディアや解釈に目を向けることに意味があると考える。

参考文献

＜英語＞

Zimmermann,E.1983.*World resources and industries:a functional appraisal of the availability of agricultural and industrial resources.*New York:Garland.

Pollard,S.and Dymond,F.1919.*The Story of Miao.*London:H.Hooks.

＜中国語＞

陈启基，张健(图)，杜应国(文)(2012)《中国石门坎：百年影像纪》云南民族出版社．

东人达（2002）＜论近现代黔滇川基督教运动仲的主体作用＞《毕节师范高等专科学校学报》第 2 期第 24 卷 12-18.

贵州省地方志编纂委员会（2005）《贵州省志・宗教志》贵州民族出版社．

马玉华（2016）《区域文化与社会变迁—威宁・石门坎・苗族》合肥工业大学出版社．

沈红（2007）《结构与主体：激荡的文化社区石门坎》社会科学文献出版社．

史开云，施毅，许学义，许定华（2016）＜石门人梦想触摸的旅游“高度”＞《毕节日报》5 月 5 日第 1 版．

石门乡党政综合办公室（2016）＜威宁彝族回族苗族自治县石门乡基本情况＞．

王建明（1983）＜现在西南苗族最高文化区—石门坎的介绍＞《民国年间苗族论文集》贵州生民族研究所

249-250.
王大卫（2007）《寻找那些灵魂》香港文汇出版社 .
威宁彝族回族苗族自治县志编纂委员会(编)(1994)《威宁彝族回族苗族自治县志》贵州人民出版社 .
威宁彝族回族苗族自治县志编纂委员会(编)(2014)《威宁彝族回族苗族自治县志》贵州人民出版社（電子版）.
《威宁苗族百年实录》编委会（2006）《威宁苗族坎百年实录》贵阳：贵州民族出版社 .
杨汉先（1979）＜基督教在滇、黔、川交境一带苗族地区史略＞《民族研究参考资料（第十四集)》贵州省民族研究所 1-35.
张霜（2012）《民族学校教育中的文化适应研究—贵州石门坎苗族百年学校教育人类学个案考察》民族出版社 .
张坦（1992）《“窄门”前的石门坎－基督教文化与川滇黔边苗族社会》云南教育出版社 .
周星（2004）＜旅游产业给少数民族社会带来了什么＞《云南民族大学学报（哲学社会科学版)》第 5 期 66-70.
朱丽晓（2015）＜近 30 年中国的石门坎研究＞《中外文化与文论》第 1 期 194-204.
朱玉芳（2007）《云南苗族文化丛书 光华之子：我的父亲朱焕章》云南民族出版社.

＜日本語＞
片岡樹（2016）「文化の資源化と宗教－中国ラフ族の『葫蘆文化』－論をめぐって」塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス 中国南部地域の分析から』風響社 ,235-270。
木下直之（2002）「創刊の辞　人が資源を口にする時」『文化資源学』1,1-5。
木下直之（2004）「文化資源学の現状と課題」『文化経済学』4(2),5-13。
佐藤仁（2011）『「持たざる国」の資源論—持続可能な国土をめぐるもう一つの知—』東京大学出版会。
ジンマーマン（1985）（ハンカー編 , 石光享訳）『資源サイエンス—人間･自然･文化の複合—』三嶺書房。
曽士才（1988）「西南中国の少数民族社会におけるキリスト教の受容」(《文化・社会分科会》中国の＜現代化＞と文化の変容）（＜特集＞日中青年研究者シンポジウム(下)中国と日本 : 近現代 , そして 21 世紀への展望）『季刊中国研究』10,37-49。
曽士才（1989）「西南中国におけるキリスト教」『列島の文化史』6,159-176。
孫潔（2016）「棚田の文化資源化とその再資源化をめぐるポリティクス」塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス中国南部地域の分析から』風響社 ,323-351。
武内房司編（2014）『中国の民族文化資源—南部地域の分析から—』風響社。
陶冶（2010）「観光開発に見る『民族文化』の表象 : 中国貴州省雷山県の『苗年文化節』をめぐって」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』69,117-129。
松村嘉久（2000）「祖国中国をいかに見せるのか—観光、スペクタクル、中華民族主義—」『中国研究月報』54(1),1-26。
森重昌之（2012）「観光資源の分類の意義と資源化プロセスのマネジメントの重要性」『阪南論集 . 人文･自然科学編』47(2),113-124。
森山工（2007）「文化資源使用法—植民地マダガスカルにおける『文化』の『資源化』—」山下晋司編『資源人類学 02 資源化する文化』弘文堂 ,61-91。
山下晋司（2007）「序—資源化する文化」山下晋司編『資源人類学 02 資源化する文化』弘文堂 ,13-24。

奨励賞

台湾人若年層による日本のポップカルチャー受容に関する研究

－台湾人が抱く日本に対する「親しみ」の変遷－

鈴木靖先生
原口直希

キーワード　「親しみ」、「哈日族」、ポップカルチャー、文化産業、台湾

目　次

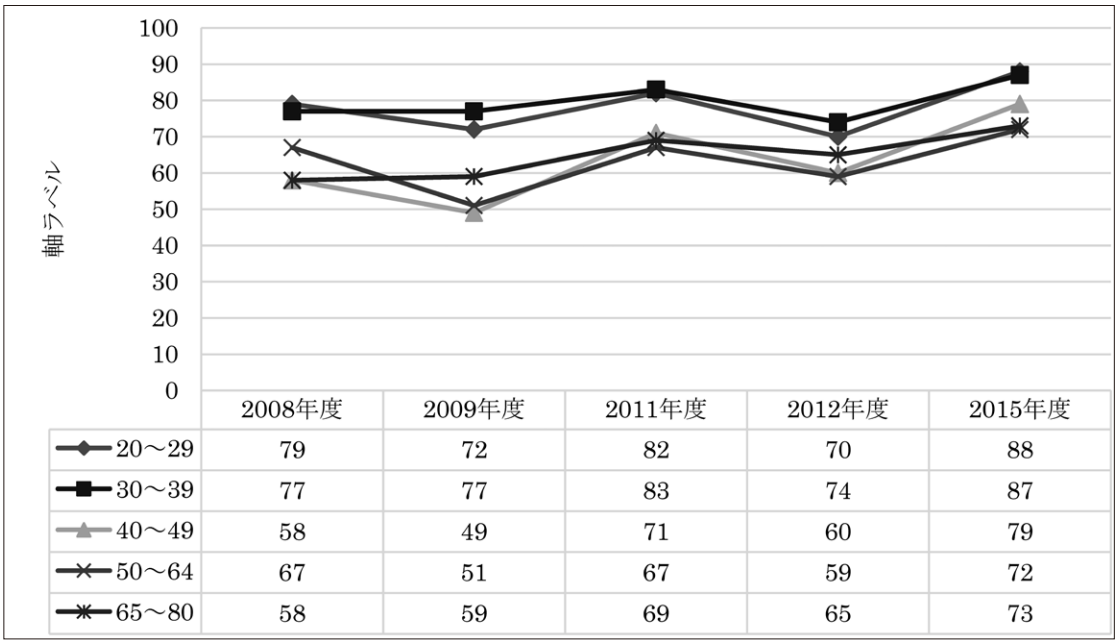
序　章
第１章　定量調査と定性調査
第２章　「哈日族」の登場と衰退
第３章　「哈日族」ブーム後のポップカルチャーと現代の若年層
終　章　結論と今後の課題

序　章

本研究は、日本のポップカルチャーが台湾人若年層の日本に対する「親しみ」、すなわち肯定的な対日意識に与える影響について、定量調査および定性調査を行うとともに、これらの調査を通じて明らかになった対日意識の質的な変化が、日台間のポップカルチャーを中心とした文化産業にどのような変化を起こしているかを、現地でのフィールドワークをもとに明らかにするものである。

本研究が対象とする台湾人若年層とは 1980 年代および 90 年代生まれを指し、調査に当たっては「親しみ」の訳語として“親近”を使用した。またポップカルチャーとは、台湾で ACDGN と総称される[1]アニメ、マンガ、テレビドラマ、ビデオゲーム、ライトノベルを指す。

1　酒井亨によれば、台湾では日本のアニメ、マンガ（コミック）、ゲームの人気はきわめて高く、「この三つの頭文字を取って『ACG』という略称がある」といい、さらに「これにライトノベル（ノベルの頭文字の N）を入れて『ACGN』、あるいはドラマの D を入れて『ACDGN』とすることもある」という。（酒井 2010、p.93）



	2008年度	2009年度	2011年度	2012年度	2015年度
20～29	79	72	82	70	88
30～39	77	77	83	74	87
40～49	58	49	71	60	79
50～64	67	51	67	59	72
65～80	58	59	69	65	73

【図 1】日本に親しみを感じるとした年齢層別比較（2008 ～ 2015 年度）

公益財団法人交流協会「第五回 台湾における対日世論調査（2015 年度）」をもとに筆者作成

なお本研究の考察の対象は、現在台湾に存在する政府が実効支配している台湾島、澎湖諸島、金門島、馬祖島および近隣離島群を地理的範囲とし、同地域で 1980 年代後半に始まった民主化以降を時間的範囲とする。

近年、日本に対して「親しみ」を感じる台湾人が増えているという。外務省の外郭団体である交流協会が行った「第五回 台湾における対日世論調査（2015 年度）」によれば、「日本に親しみを感じますか」という質問に対し、「親しみを感じる」あるいは「どちらかというと親しみを感じる」と回答した人は 80％に達し、前回 2012 年度の 65％を大幅に上回った。[2]

こうした傾向は日本を訪れる台湾人旅行者の増加にも見ることができる。日本政府観光局（JNTO）の「国籍 / 月別　訪日外客数（2003 年～ 2017 年）」[3]によれば、台湾からの訪日外客数は 2016 年には 4,167,512 人と、2003 年の 785,379 人の 5 倍以上に増加している。国別の順位でいえば、中国、韓国に次ぐ第 3 位であるが、訪日外客数をそれぞれの国の総人口との比で見た場合、中国が 0.46％、韓国が 9.9％であるのに対し、台湾は 17.7％と突出した比率となっている。

一方、台湾人の日本に対する「親しみ」には、一つの特徴が存在する。それは 20 ～ 29 歳と 30 ～ 39 歳という 1980 年代および 90 年代生まれの若年層にこうした意識を持つ者が多

2 「第五回 台湾における対日世論調査（2015 年度）」（公益財団法人交流協会、2016 年 3 月）https://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/04/7B4C76E0FC259BAF49257FF400394934?OpenDocument （2017 年 12 月 13 日 閲覧）

3 「国籍 / 月別訪日外客数（2003 年～ 2017 年）」（日本政府観光局（JNTO））https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/index.html （2017 年 12 月 13 日閲覧）

いという点である。

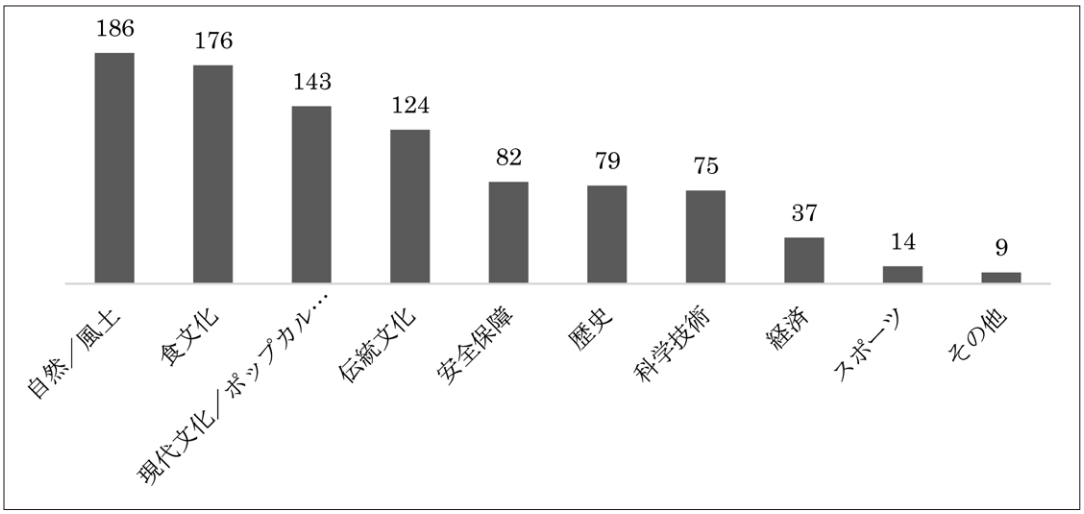
王育徳は台湾人が親日感情を持つ理由について、中華民国および中国国民党に対する「当てこすり」、と分析している。しかし国民党政府への反発が日本に対する「親しみ」に繋がるという分析は、1945 年以前に日本の教育を受けた日本語世代を念頭に置いたものであり、1980 年代および 90 年代生まれの台湾人に対しても有効であるのかは疑問符が付く。

一方、日本人が今日の台湾を訪問すると、街中に溢れる日本のポップカルチャーに圧倒される。筆者は 2015 年 9 月から 2016 年 6 月までの 10 ヶ月間、台湾の高雄市にある国立中山大学大学院社会学研究科に留学したが、その際にも日本のポップカルチャーがいかに台湾社会に広く浸透しているかを実感した。

JETRO は 2013 年に行った「若者世代の日本コンテンツに対する意識・消費実態調査（台湾）」の中で、台湾人の若者が「日本へ親しみを感じる点」について調査を行っているが、そこでも図 2 のように「現代文化／ポップカルチャー」が第 3 位となっている。

こうした点から考えれば、台湾の若年層の間に日本へと「親しみ」を感じる者が多い理由の一つは、このポップカルチャーにあることが予想される。そこで、本研究ではまず「日本のポップカルチャーは台湾人若年層の日本に対する『親しみ』の増加に寄与している」という仮説を立て、これを検証することにした。一方、この検証の過程で新たな発見があった。それは、90 年代に登場した「哈日族（ハーリーズー）」と呼ばれる当時の若年層と、現代の若年層との間では、日本に対する「親しみ」に質的な変化が生じていることである。

以下、本稿では第 1 章で日本のポップカルチャーが台湾人若年層に与える影響について定量、定性の 2 つの調査を行い、そこでの発見をもとに、第 2 章では「哈日族」世代から現代



【図 2】「日本へ親しみを感じる点」

JETRO「若者世代の日本コンテンツに対する意識・消費実態調査（台湾）」（2014 年）をもとに筆者作成

に至る台湾人若年層の対日意識の質的な変化について論じる。そして第３章ではこうした対日意識の質的な変化が日台間における文化産業をどのように変えているのかについて、現地でのフィールドワークで得た具体的な事例を紹介しながら考察する。

第１章　定量調査と定性調査

「日本のポップカルチャーは台湾人若年層の日本に対する『親しみ』の増加に寄与している」という仮説を検証するため、国立中山大学大学院社会学研究科に所属する大学院生の協力を得て、2016 年 11 月 20 日から３日間、1980 年代および 90 年代生まれを対象に、Web によるアンケート調査を行った。アンケートは全９問からなり、第９問以外は回答必須のシングルアンサー、サンプル数は 1,066 となっている。

アンケートの設問は以下のとおりである。

問一　あなたの生年月日は以下のどちらですか？（回答必須、SA[4]）
A　1980 年代　　B　1990 年代

問二　あなたの性別は以下のどちらですか？（回答必須、SA）
A　男性　　B　女性

問三　あなたの出身地は以下のうち、どれにあてはまりますか？（回答必須、SA）
A　北部（台北市・新北市・基隆市・桃園市・新竹市・新竹県・宜蘭県）
B　中部（苗栗県・台中市・彰化県・南投県・雲林県）
C　南部（嘉義市・嘉義県・台南市・高雄市・屏東県）
D　東部（花蓮県・台東県）
E　金馬地区（金門県・連江県）

問四　あなたは日本に対して親しみを感じていますか？（回答必須、SA）
A　親しみを感じる
B　どちらかというと親しみを感じる
C　わからない
D　どちらかというと親しみを感じない
E　親しみを感じない

問五　あなたは日本のポップカルチャーである ACDGN（アニメ・マンガ・テレビドラマ・

4　シングルアンサーの略称として SA と記載。

ビデオゲーム・ライトノベル）その他が好きですか？（回答必須、SA）

A　とても好き
B　まあまあ好き
C　どちらとも言えない
D　あまり好きではない
E　まったく好きではない

問六　以下のうち、あなたが最も好きな日本のポップカルチャー・コンテンツはどれですか？（回答必須、SA）

A　アニメ
B　マンガ
C　テレビドラマ
D　ビデオゲーム
E　ライトノベル
F　その他

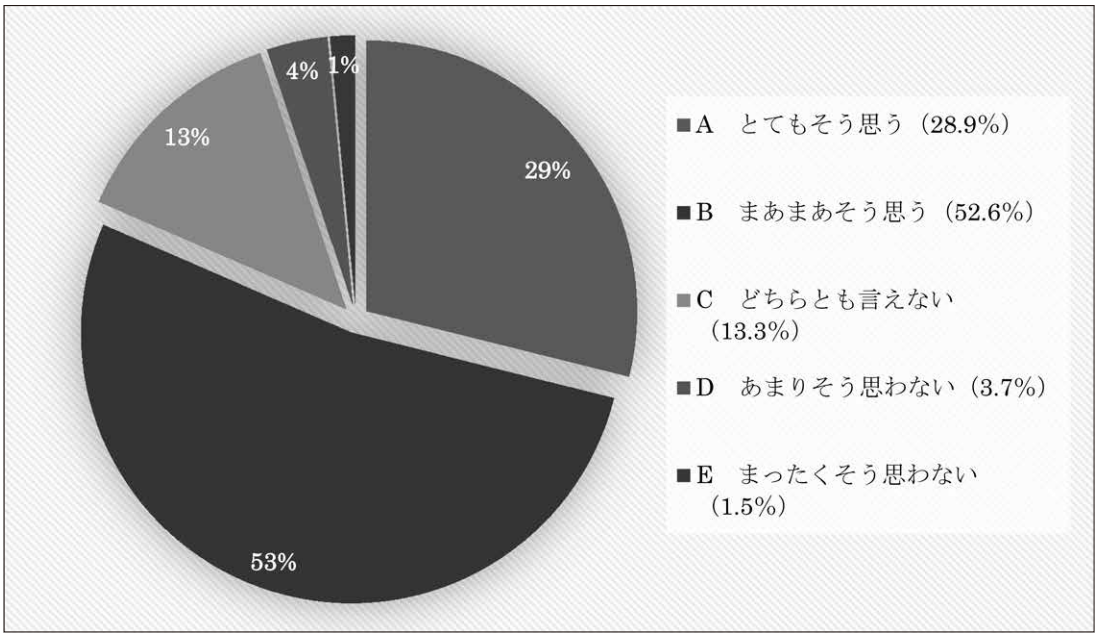
問七　あなたは日本へ旅行したいと考えますか？（回答必須、SA）

A　すごく行きたい
B　まあまあ行きたい
C　どちらでもない
D　あまり行きたくない
E　まったく行きたくない

問八　日本のポップカルチャーは、台湾人が抱く日本への親しみに寄与していると思いますか？（回答必須、SA）

A　すごくそう思う
B　まあまあそう思う
C　どちらとも言えない
D　あまりそう思わない
E　まったくそう思わない

問九　日本と聞いて思い浮かぶ単語があれば自由に記述して下さい。（なお、この問題は無回答でも構いません）



【図 3】「日本のポップカルチャーは、台湾人が抱く日本への親しみに寄与しているか？」

図 3 は問八の「日本のポップカルチャーは、台湾人が抱く日本への親しみに寄与していると思いますか？」という質問への回答を集計したものである。この質問に対して、A の「とてもそう思う」と答えた者が 308 名（28.9％）、B の「まあまあそう思う」と答えた者が 561 名（52.6％）、両者をあわせると回答者 1,066 名のうち 869 名（81.5％）が、肯定的な回答を行っている。

一方、回答者自身の日本のポップカルチャーへの関心を尋ねた問五でも、A の「とても好き」と B の「まあまあ好き」と回答した者の合計は 79％におよんだ。

さらに定量調査の結果を分析するため、2016 年 11 月末から 12 月初頭[5]にかけて、1980 年代および 90 年代生まれの台湾人留学生 4 名（男性 1 名、女性 3 名）と 1970 年代生まれの台湾人研究者 1 名（男性）に対し、日本語と中国語を用いて半構造化インタビューによる定性調査を行った。この調査でも「日本のポップカルチャーは、台湾人が抱く日本への親しみに寄与していると思いますか？」という質問に対して、回答者全員から肯定的な回答があった。しかし一方で意外だったのは、かつての「哈日族」世代に見られた日本への「憧れ」（原語では “ 憧憬 ”）という表現が一度も聞かれず、また肯定されることもなかった点である。「日本に対して親しみを感じるか」という質問には、全員が「強い親しみを感じる」と回答しているものの、その感情は “ 憧憬 ” ではなく、“ 不是外人的感覺 ” だというのである。これは翻訳の難しい表現だが、強いて訳せば「赤の他人とは思えない親しさを感じる」というほどの意味であ

5　インタビューは 11 月 22 日に 2 名、23 日に 1 名、28 日に 1 名、12 月 9 日に 1 名、計 5 名に行った。

る。この表現を筆者が“關係很密切（密接な関係にある）”と言い換えたところ、回答者全員から“不是外人的感覺”であり、密接な関係にあると言いたいわけではないと注意を受けた。

垂直的な上下関係を表す“憧憬”ではなく、また水平的に一般の親疎関係を表す“關係很密切”とも異なる“不是外人的感覺”という表現。筆者はこれが現代の台湾人若年層の対日意識を表すキーワードではないかと考える。

第 2 章　「哈日族」の登場と衰退

台湾における日本のポップカルチャー受容を考える場合、「哈日族（ハーリーズー）」に関する考察は欠かすことができない。彼らには様々な定義が存在するが、ここでは「1970 年代生まれで、90 年代に日本のポップカルチャー受容を通して社会現象となった若者たち」と定義しておく。当時は「日本大好き族」などと邦訳され、日本に対する強い「憧れ」を有し、日本のテレビドラマとハローキティを好み、同年代の台湾人若年層による日本のポップカルチャー受容を象徴する存在として知られた。

「哈日族」の登場には二つの要因がある。一つ目は経済的要因で、70 年代のベトナム戦争特需による好景気、および 85 年のプラザ合意に端を発するバブル景気は、都市部に暮らす新興中産階級に富の蓄積をもたらし、これを経済的基盤として生まれたのが「哈日族」であった。

二つ目は社会的要因である。台湾では 80 年代後半以降、急速に進んだ民主化により言論の自由が保障されるようになった。さらにメディアの規制緩和[6]により、日本のテレビ番組の放送[7]や日本映画の上映が自由になった。この時期は、日本経済が世界的な影響力を有し、ジャパンアズナンバーワンと称賛され、世界中が注目していた時期でもある。地理的にも近く、非白色人種で、アジア・太平洋戦争での敗戦後もめざましい復興を遂げ、欧米を凌駕する経済的繁栄を謳歌していた日本に対して、台湾人は強い「憧れ」を抱いたが、民主化の進展とメディアの規制緩和は、台湾人がこうした「憧れ」を自由に表現することを可能にしていた。

しかし「哈日族」ブームは 2000 年をピークに衰退し、2001 年にはターニング・ポイントを迎える。このブームの衰退にも経済、社会に関する二つの要因が存在する。経済的要因は、日本とほとんど同時期に起きたバブル経済の崩壊により、「哈日族」の主たる担い手である新興中産階級が経済的基盤を失ったこと。社会的要因は、2001 年以降、「哈日族」が好んだテレビドラマの分野で、韓国製や台湾のドラマの流行があったことである。

この時期を象徴するものに、台湾で制作されたテレビドラマ『流星花園（りゅうせいはなぞの）』がある。2001 年に放送されたこのテレビドラマは、日本のマンガ『花より男子』を、台湾の中華テレビ（中華電視公司、CTS）がドラマ化したもので、主演や監督など、基本的

6　新聞に関しては 1988 年に、ラジオとテレビに関しては 1993 年に、それぞれ規制が大きく緩和されている。
7　岩渕功一によれば「日本のテレビ番組の市場流入が一般に認知され、飛躍的に増えたのは 90 年代に入ってからのことで」、「その直接的な要因としては 1993 年末に台湾政府が日本語のメディア商品の放送を解禁したことが挙げられる」という（岩渕 2001、p.190）

にスタッフはすべて台湾人となっており、後に日本でも放送[8]されている。

この作品のヒットは、台湾において若者向けのアイドルドラマ（“偶像劇”）というジャンルを確立しただけでなく、日本のポップカルチャー受容の在り方にも新たな変化をもたらした。台湾人による主体的な取捨選択とローカライズである。この時期に始まる取捨選択とローカライズは、日本を「憧れ」の対象としていた「哈日族」世代からの大きな転換であり、台湾人による対日意識の相対化の始まりといえよう。

80 年代後半から急速に台湾へ入った日本のポップカルチャーは、90 年代に「哈日族」を生み出した。「哈日族」の抱く日本への強い「憧れ」や、ポップカルチャーの一方的な受容は、絶対的な対日意識を象徴するものであった。

ところが 2000 年代に入ると、前述の定性調査からも明らかなように、「憧れ」といった垂直的な感情は失われ、“不是外人的感覺”という表現に象徴される水平的な感情、対日意識の相対化が進み、台湾人による主体的な取捨選択とローカライズが始まったのである。

第 3 章　「哈日族」ブーム後のポップカルチャーと現代の若年層

2010 年代に入ると、本研究が対象とするポップカルチャー以外[9]にも、様々な文化産業分野において、台湾人がより主体的に関わる新たな事例が生まれている。この新たな変化を象徴するのが、2014 年に放送されたテレビドラマの『ショコラ（流氓蛋糕店）』である。

この作品は、日本のマンガを原作とする点は『流星花園』と同様だが、主演を日本の女優である長澤まさみが務め、監督も日本人の北村豊晴が務めている。その一方で、舞台となるロケ地はすべて台湾であり、制作も台湾テレビ（台湾電視公司、TTV）、さらに言語も全編中国語であり、長澤はこの作品のために台湾に 4 ヶ月間滞在し中国語を学んでいる。この作品は 2014 年には CS のホームドラマチャンネル、翌 2015 年には BS-TBS と日本国内でも放送され、さらに香港や中国をはじめとする東アジアの国や地域でも放送された。

2001 年の『流星花園』と 2014 年の『ショコラ』を比較すると、『ショコラ』の方は、日本と台湾がより水平的な関係で、共に制作に臨んでいる点が特徴的である。

こうした水平的な提携は他の分野にも広がりを見せている。近年の台湾では、日本のポップカルチャーの影響を受けたイラストレーターが急増しているが[10]、筆者が留学生活を行った高雄市でも、日本の影響を受けた台湾人イラストレーターを起用して独自の取り組みが行われている。

日本では「たかめ少女プロジェクト」と呼ばれるこの取り組みは、2014 年に若手台湾人イラストレーターを中心とする Simon Creative 社（希萌創意行銷股份有限公司）と、高雄市内を

8　BS- 日テレで 2004 年に放送され、2006 年には TBS により地上波でも放送されている。
9　例えば野口（2015）は、共有される文化として、日本の安室奈美恵と台湾の蔡依林、日本の GLAY や flumpool と台湾の Mayday（五月天）など日台のミュージシャンによる楽曲の共同制作を取り上げている。
10　90 年代の「哈日族」ブームを受けて、1999 年 4 月、角川書店は台湾に進出し現地法人の台湾角川を設立している。さらに 2008 年から「台湾角川ライトノベル大賞」を開始し、2011 年にはイラスト部門も新設された。こうした日本の文化産業分野における取り組みが、台湾のイラストレーターの急増に寄与している。

走る地下鉄を運営する高雄メトロ社（高雄捷運公司）により始められた。このプロジェクトの中心にいるのは、台湾南部の屏東県にある屏東科学技術大学のアニメマンガサークルである。

元々、屏東科技大のアニメマンガサークルに属していた 1 人の学生が、Simon というペンネームでイラストレーターとして活躍していた。このイラストレーターとその仲間たちが起ち上げた会社が上述の Simon Creative 社である。

「たかめ少女プロジェクト」は、経営難に陥った高雄地下鉄をポップカルチャーの力によって立て直そうとする取り組みで、2014 年に沿線の駁二芸術特区という大型の公園で開催されるアニメ・マンガフェスティバルにあわせて始まった。このプロジェクトの特徴は、日本のポップカルチャーの影響を強く受けたイラストにより、高雄地下鉄の運行にまつわる場所や道具を、日本の美少女キャラクター風に擬人化するところにある。またこうして作成されたキャラクターたちは、乗客のマナー向上の呼びかけなどに役立てられている。

図 4 は高雄市内の地下鉄の駅に貼られていた「たかめ少女プロジェクト」のポスターである。左は、主人公の小穹（シャオチョン）が、乗客に駅構内および車内での飲食、喫煙、チューインガムや檳榔の服用を禁じているもの。この小穹は高雄地下鉄の象徴である、美麗島駅のステンドグラスを擬人化したもので、髪飾りがステンドグラスで作られている。

【図 4】「たかめ少女プロジェクト」の小穹（左）と艾米莉亞（右）

2016 年 2 月 15 日、高雄市内鹽埕埔駅にて筆者撮影

右は、高雄地下鉄の車体を擬人化した艾米莉亞（エミリア）というキャラクターである。このキャラクターは高雄地下鉄で用いられている車両が、ドイツのシーメンス社製であることから、台湾人とドイツ人のハーフという設定になっており、また車体の擬人化であるため、背景には実際の車体も描かれている。

これらのポスターからもわかる通り、「たかめ少女プロジェクト」のキャラクターたちは日本のポップカルチャーの影響を強く受けている。また、Simon Creative 社の中国語の社名は「希萌創意行銷股份有限公司」だが、Simon の音訳である“希萌”の 2 文字目の「萌」は、日本のポップカルチャーから生まれた「萌え」という言葉を取り入れたものである。

プロジェクト開始から 2 年が経過した 2016 年、「たかめ少女プロジェクト」は、台湾でライトノベル作品へと発展する。この台湾でのライトノベル制作と並行して、日本でも台湾人作家によるライトノベル作品の連載[11]が始まり、2017 年 6 月には、日本のスクウェア・エニックス社の GA 文庫から書籍も出版されている。「たかめ少女プロジェクト」に見られるように、発端は台湾でありながら、日本でも同時進行の形で、一つの作品を共に作り上げるというのは、かつては見られなかった新たな文化産業の提携モデルとして注目されよう。

終　章　結論と今後の課題

本研究は冒頭で、「日本のポップカルチャーは台湾人若年層の日本に対する『親しみ』の増加に寄与している」と仮説を設定したが、これは当初の予想通り、定量調査および定性調査を通して肯定的に検証された。現在、台湾における日本のポップカルチャーはテレビドラマからアニメ、マンガへと分野を広げながら、日本への「親しみ」の増加に寄与している。

一方、日本のポップカルチャーは台湾人による主体的な取捨選択とローカライズを経て、日台の文化産業に新たな提携関係を生み出していることも明らかになった。現地での取捨選択とローカライズは、「哈日族」が生まれた 90 年代には見られない現象であり、当時は一方的な受容のみであった。しかし、「憧れ」という垂直的な感情から、“不是外人的感覺”という表現に象徴される水平的な感情へと対日意識の相対化が進んだことにより、水平的な関係での共同制作が行われるようになり、さらに現在では台湾人がアレンジした日本のポップカルチャー・コンテンツの逆輸入も行われるようになった。

文化産業における多様な主体間の提携関係が国境を超える事例は、近年数多く報告されており[12]、日本と台湾の文化産業における提携も今後ますます増加するであろう。

戦後 70 年が経過し、日本と台湾は旧宗主国と旧植民地という関係性を乗り越えようとしている。「憧れ」から“不是外人的感覺”という「親しみ」の質的な変化は、ポストコロニア

11 台湾出身の作家である三木なずなにより、2016 年 5 月、日本のスクウェア・エニックス社が運営する Web サイト『ガンガン ONLINE』で連載が開始された。ガンガン ONLINE HP　http://www.ganganonline.com/　（2017 年 12 月 6 日閲覧）

12 たとえば Yamamoto（2009）は、日中韓の国際分業により日本のアニメーション産業が成り立っている現状を明らかにし、趙（2015）は、上海における広告産業の集積が日本の東京と密接に結びついているさまを明らかにしている。

ルの時代の終焉を示すものであり、2017年現在、従来の植民地時代の記憶に代わり、新たな「親しみ」の源泉となっているものの一つがポップカルチャーなのである。

本研究は、過去30年間の台湾における日本のポップカルチャー受容に関する考察を通して、それが台湾人若年層の日本に対する「親しみ」、すなわち肯定的な対日意識に寄与するとともに、2000年代以降に起こったこの意識の質的な変化が、ポップカルチャーを中心とする文化産業における主体間に、新たな提携関係を生み出していることを明らかにした。今後、日本人と台湾人が、ポップカルチャーでの提携に代表される協働と成功の共有を通じて、末永く「親しみ」を深めていくことを希望し、本稿の結びとしたい。

付　記

本稿の内容は、筆者が2017年3月に法政大学大学院に提出した修士論文の内容を、加筆修正したものである。本学会発表を行うにあたり、法政大学国際文化学部の鈴木靖教授から丁寧なご指導を頂いた。また鈴木靖ゼミの学生、松本悟教授、同ゼミ生からは多くの示唆に富んだ意見を頂いた。そのほか高田裕子先生、周重雷先生にも大変お世話になった。この場を借りて心より御礼申し上げます。

参考文献（日本語）

赤松美和子・若松大祐編（2016）『台湾を知るための60章』、明石書店
亜洲奈みずほ（2012）『現代台湾を知るための60章【第2版】』、明石書店
アナリー・サクセニアン（2000）「シリコンバレーと台湾新竹コネクション－技術コミュニティと産業の高度化－」、青木昌彦・寺西重郎編『転換期の東アジアと日本企業』、pp311-354、東洋経済新報社
五十嵐暁郎編（1998）『変容するアジアと日本　アジア社会に浸透する日本のポピュラーカルチャー』、世織書房
石井健一編（2001）『東アジアの日本大衆文化』、蒼蒼社
伊藤潔（1993）『台湾－四百年の歴史と展望』、中公新書
依藤醇・小川文昭・三宅登之編（2002）『中日辞典　第2版』、小学館
岩渕功一（2001）『トランスナショナル・ジャパン－アジアをつなぐポピュラー文化』、岩波書店
岩渕功一編（2003）『グローバル・プリズム－〈アジアン・ドリーム〉としての日本のテレビドラマ』、平凡社
岩渕功一編（2004）『アジア理解講座3　越える文化、交錯する境界－トランス・アジアを翔るメディア文化』、山川出版社
岩渕功一編（2011）『叢書現代社会のフロンティア17　対話としてのテレビ文化－日･韓･中を架橋する』、ミネルヴァ書房
王育徳・宗像隆幸（1990）『新しい台湾－独立への歴史と未来図』、弘文堂
王育徳（2011）『「昭和」を生きた台湾青年』、草思社
河島伸子（2009）『コンテンツ産業論　文化創造の経済・法・マネジメント』、ミネルヴァ書房
川端基夫（1999）『アジア市場幻想論　市場のフィルター構造とは何か』、新評論
川端基夫（2006）『アジア市場のコンテキスト【東アジア編】－受容の仕組みと地域暗黙知』、新評論
喜安幸夫（1997）『台湾の歴史　古代から李登輝体制まで』、原書房

洪郁如（2013）「理解と和解の間－「親日台湾」と歴史記憶－」、一橋大学語学研究室『言語文化 50』、pp17-29、一橋大学
後藤和子（2013）『クリエイティブ産業の経済学－契約、著作権、税制のインセンティブ設計』、有斐閣
酒井亨（2001）『台湾入門』、日中出版
酒井亨（2004）『哈日族　なぜ日本が好きなのか』、集英社新書
酒井亨（2010）『「親日」台湾の幻想－現地で見聞きした真の日本観』、扶桑社
佐々木雅幸・川崎賢一・河島伸子（2009）『文化政策のフロンティア 1　グローバル化する文化政策』、勁草書房
志賀市子（2013）「台湾における Q 版神仙ブームとその背景－信仰文化の商品化と消費をめぐる一考察－」、『国際常民文化研究叢書 3 －東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史』、pp151-167、神奈川大学国際常民文化研究機構
杉浦章介（2009）『トランスナショナル化する世界－経済地理学の視点から』、慶應義塾大学出版会
千野拓政編（2012）『アジア遊学 149　東アジアのサブカルチャーと若者のこころ』、勉誠出版
戴国煇（1988）『台湾－人間・歴史・心性』、岩波新書
大アジア虚栄圏同盟編（1996）『アジアポップカルチャー　亜細亜通俗文化大全』、スリーエーネットワーク
趙政原（2015）「グローバル化にともなう中国広告産業集積地域の変容」、『経済地理学年報　第 61 巻（2015）』第 61 巻、pp181-201、経済地理学会
陳怡禎（2014）『台湾ジャニーズファン研究』、青弓社
沼崎一郎（2014）『台湾社会の形成と変容～二元・二層構造から多元・多層構造へ～』、東北大学出版会
野口真広（2015）「東アジア地域に見られる社会的価値観の共通性に関する考察－台湾と日本のデモとポップカルチャーを主な事例として－」、『次世代論集：早稲田大学地域・地域間研究機構「次世代フォーラム」研究成果報告論文集』、pp35-56、早稲田大学地域・地域間研究機構
野島剛（2016）『台湾とは何か』、ちくま新書
半澤誠司（2016）『コンテンツ産業とイノベーション　テレビ・アニメ・ゲーム産業の集積』、勁草書房
松下慶太（2008）「台湾における日本メディア文化の普及と「日本イメージ」の形成」、『目白大学人文学研究』第 4 号、pp121-134、目白大学
松原宏編（2014）『地域経済論入門』、古今書院
松原宏編（2017）『知識と文化の経済地理学』、古今書院
丸川哲史（2000）『台湾、ポストコロニアルの身体』、青土社
港千尋（2014）『革命のつくり方』、インスクリプト
森宣雄（2001）『台湾 / 日本－連鎖するコロニアリズム』、インパクト出版会
屋葺素子（2009）「台湾におけるカバー曲の変容」、谷川建司・王向華・呉咏梅編『越境するポピュラーカルチャー　リコウランからタッキーまで』、pp199-228、青弓社
李衣雲（2006）「台湾における日本恋愛ドラマと日本イメージの関係について」、『マス・コミュニケーション研究（69）』、pp108-125、日本マス・コミュニケーション学会
若林正丈・劉進慶・松永正義編（1990）『台湾百科・第二版』、大修館書店

参考文献（英語）

Power, D. and Scott, A.J.（2004）, *Cultural Industries and the Production of Culture*, London：Routledge.
Scott, A.J.（2005）, *On Hollywood：The Place, the Industry*, Princeton：Princeton Univ. Press.
Yamamoto, K.（2009）, *The agglomeration structure of the animation industry in East Asia: A case study of Tokyo, Seoul and Shanghai region*. Science Reports of Tohoku University 7th series (Geography)57, 43-61

参考文献（中国語）

黄秀政・呉文星・張勝彦（2011）『臺灣史』、五南出版
國立編訳館編（1997）『認識臺灣（歴史篇）』、國立編訳館　（蔡易達・永山英樹訳（2000）『台湾国民中学歴史教科書　台湾を知る』、雄山閣出版）
哈日杏子（1996）『早安日本』、尖端出版
哈日杏子（1998）『我得了哈日症』、時報出版
林能士編（2014）『普通高級中學　歴史１』、南一書局

奨励賞

夢中の力で困難を乗り越える
――異文化ストレスにおけるフロー理論応用の可能性

浅川先生・曽先生
劉 徳 嘯

イントロダクション

写真 1

写真 2

写真 1 と写真 2 は 2017 年 11 月 12 日(日)に，筆者が新宿西口のロータリー入口付近で観察していたホームレスの写真である。これらの写真は，赤いニット帽をかぶったホームレスが，壁を背にし，20 分以上も路上に座り込み，脇目も振らずに，一心に「数独」を解いている姿を写したものである。

表 1．ホームレス観察の基礎データ

観察日	2017.11.12(日)
観察時間帯	11:20 ～ 11:40
観察対象	ホームレス（1 名）
気温	12℃
騒音の平均値	90.5 デシベル
平均通行者数	13 人／ 1 分間
平均通行車両数	15 台／ 1 分間

観察時の気温，騒音，通行者数，通行車両数の基礎データ（表 1）から，パズルや勉強など，高度な集中力を必要とする活動に適した環境ではないことがわかる。さらに，ホームレスの経済状況から，観察対象者の身体的不調，精神状態の問題も推測できるであろう。本来，こういった不利な条件下では，特定の課題に対し，高い集中力の保持は困難なはずである。にもかかわらず，観察対象者が，環境と個人のマイナスファクターを意識せずに，目の前の活動（数独）に夢中になり，長時間その活動を行うことができたのは何故であろうか。実は，

以上の観察活動の中に現れたような，きわめて不利な状況の中でも，何かの活動に夢中になることで困難を克服するといった現象はしばしば報告されている。心理学ではそれをフロー体験と呼び，以下，本論ではこのフロー体験について論じていく。

フロー理論とは

フロー理論は，アメリカの心理学者ミハイ・チクセントミハイ（Mihaly Csikszentmihalyi）が提唱した理論である。フローとは，内発的に動機づけられた活動を行う際に誘発される，高い集中力，楽しさ，没入感覚を伴う意識の状態である。チクセントミハイは，早期のインタビュー調査で，参加者が前述のような状態を「流れ（flow）に運ばれた」という表現で説明したことから，この状態を「フロー」（flow）と命名した。

熱力学にエントロピーという物質や気体の乱雑さを表す概念がある。エントロピーの増加にともない，物質は秩序のある状態から無秩序（カオス）の状態へと変化する。一方で，エントロピーと反対の概念をネゲントロピーといい，ネゲントロピーが増加することで，物質は秩序化されていく。チクセントミハイはこの熱力学の概念を心理学に適用し，心理的エントロピーという概念を用いてフロー状態を説明している。要は，外界の情報が意識を脅かす場合，心理的エントロピーが増加するとともに，意識は混乱するという状態が起こる。反対に，心理的ネゲントロピーが増大すると，意識は秩序化され，個体は一種の「最適経験」つまり「フロー体験」を享受するのである。

文頭の観察対象者の例でいえば，本来，不利な諸要因がもたらす心理的エントロピーにより，意識は混乱状態に陥いるはずであるが，特定の活動（数独）に夢中になることで，人間のポジティブな機能が誘発され，それがネゲントロピーとして働き，意識に秩序を与え，個体が「最適状態」つまり「フロー状態」になったのであろう。その結果，観察対象者の意識上には環境や個人の不利な諸要素は浮かばず，活動に長時間集中できたと考えられる。

フロー体験の特徴

① その瞬間にしている活動への強い，焦点の絞られた集中
② 行為と意識の融合感覚
③ 内省的意識の喪失
④ 時間的経験のゆがみ
⑤ 失敗に対する心配からの解放
⑥ 行為自体が自己目的的

（チクセントミハイ・ナカムラ，2003，p. 3）

フロー体験の生起条件

① 活動が行為者に要求する能力（挑戦レベル）が活動を遂行する行為者自身の能力（能力レベル）に適合していること。

② 活動の目標が明確であること。

③ 活動に関するフィードバックが即時に得られること。

（Csikszentmihalyi，1990; Nakamura & Csikszentmihalyi，2002）

フロー体験の測定

フロー体験の測定は，主としてフロー体験測定用尺度に基づく質問紙法と経験抽出法の二種類によって行われている。前者は，The Flow Questionnaire（Csikszentmihalyi, 1975/2000），Flow State Scale（川端・張本，2000），Dispositional Flow Scale（Jackson et al., 1998）などのフロー体験測定用尺度を用いて，主に，フロー体験の特徴が記述された項目に対し，回答を求める方法で実施する。長所としては，大人数のデータを一度にとれること，機材がなくても容易に実施できること，数値データで信頼性・妥当性が検証できること，参加者の負担が軽いことなどが挙げられる。短所としては，回答が回想に基づくため，調査の精度に限界があることなどが指摘されている。一方，経験抽出法（Experience Sampling Method）は，ポケットベルなどを用いて 1 日に数回参加者にシグナルを送り，参加者はシグナルが鳴るたびに，誰と，どこで，何をしていたのか，楽しさ，幸福感，集中力など，その時の状況や心理状態を様々な場面で即座に回答するため，「操作的定義」によるフロー状態の測定精度に優れている。一方で，参加者への負担が大きいことや調査のコストの問題も指摘されている。

フロー体験のメカニズム，効果，応用

フロー体験のメカニズムに関しては，二つの側面があるといわれている。チクセントミハイは「フロー体験を構成する要素のうち，最も数多く挙げられるものの一つは，フローの継続中は生活の中での不快なことのすべてを忘れることができるということである」（チクセントミハイ，1990，p. 73）と指摘している。情報処理理論から説明すれば，人間の情報処理能力には限界があり，フロー体験時に脳は最大限に活動に集中しているため，ストレスなどのネガティブな感覚は意識上に浮上しにくいということである。一方で，アメリカ心理学会の会長を務めたセリグマンは，心理のポジティブな側面は人間の苦悩に対して有効であると指摘している（Seligman & Pawelski，2003）。つまり，フローを体験することで，ポジティブな感情が誘発され，人間の苦悩に対して，正の効果があるということである。

実際，欧米で行われた実証研究では，フロー体験と自尊感情（self-esteem），心理的レジリエンス，ソーシャルスキル，ウェルビーイング，満足感に正の相関があることが確認されて

いる。臨床研究でも，フロー体験が広場恐怖症に対し治療効果のあることが報告されている。

また，日本の大学生を対象に行われた経験抽出法による研究でも（Asakawa，2004），フロー状態では，不安，リラックス，アパシー状態に比べ，集中力，楽しさ，幸福感などといった心理的側面の得点が高いことが報告されている。欧米文化だけではなく，アジア文化でも，フロー理論の応用の可能性があるということである。

これまでのフロー理論の研究で蓄積されてきた知見は，心理的な問題に対する取り組みだけでなく，教育，製造業，販売業など，幅広く応用されている。

異文化ストレスを取り上げる重要性とその特異性

日本の少子化対策の策定と多文化社会の推進により，外国人の受け入れも拡大しつつある。特に，外国人留学生の場合，学業や就職の問題だけでなく，異文化適応の問題もストレスの要因となり，不登校，自傷行為，自殺，暴行に発展するケースも報告されている。これらの問題に対処すべく，近年，差別問題も含め，外国人の就労問題などが議論されつつあり，教育機関における受け入れ環境の整備や就職活動のサポート強化なども加速している。また個人のレベルでは，ホスト国側との異文化間接触によるストレスが異文化不適応に大きく影響を与えるため，異文化ストレスの要因や改善法などの研究も重要視されてきている。

異文化ストレスには，一般のストレスに比べると，特異性があるとされている。一般的には，家庭内，学校，職場などの日常生活における困難から生じるストレスは，多くの場合，ストレッサー（ストレスの原因）の除去，友人や家族との相談，臨床心理学的な援助などで軽減，解消されるが，異文化環境下で生活している個人の場合，言語の壁や文化の相違により孤立しやすく，また援助活動も少ないため，異文化ストレスの直接的な除去，本人自身の適応力およびストレスに対する抵抗力の向上と予防にその効果が期待される。

異文化ストレスにおけるフロー理論応用の可能性

前述のように，フロー体験は個人の生活の質を高め，適応力を促進し，ストレスに対する抵抗力を高め，健康な精神状態を維持・促進し，さらには精神疾患の治療などにも貢献していることから，異文化ストレスにも有効であると考えられる。また，フロー体験に関するアジア文化圏での実証研究の蓄積もあることから，フロー理論は中国人留学生を含むアジアの文化的背景を持つ留学生にも応用の可能性があると考えられる。なにより，個人の努力でフロー体験の頻度を増やし，人間の「強み」を生かすことで，他人に頼ることなく困難の予防や解決に自身で取り組むことができるという利点から考えれば，フロー体験には異文化ストレスに対するポジティブな効果が期待できるのではないだろうか。

修士研究について

研究目的

これまでの異文化ストレスに関する研究では，主に，留学生の生活上の困難などの環境要因やパーソナリティやストレス対処方略，自己効力感，文化受容態度などといった留学生自身の個人的要因が注目されてきた（許・松田，2016；朴，2012；柳・松田，2011）。一方，王ら（2009）が実施したインタビューによる 2 年間の追跡調査では，留学初期に生じた問題として，交流の欠如・寂しさによる孤独などが留学生にとっての大きなストレスであることが見出された。つまり，留学生にとっては孤独感がストレスのきわめて大きな要因なのである。そこで今回の研究では，孤独感と異文化ストレスとの関連を確認し，さらにフロー体験の頻度とポジティブな感情，孤独感，異文化ストレスとの関連を明らかにすることを目的とした。

【研究 1】

この研究は以下の仮説のもとに行う。

仮説①：中国人留学生の日常生活におけるフロー体験の頻度は孤独感の得点と負の相関がある。

仮説②：中国人留学生の日常生活におけるフロー体験の頻度は異文化ストレスの得点と負の相関がある。

仮説③：中国人留学生の孤独感の得点は異文化ストレスの得点と正の相関がある。

仮説④：中国人留学生の日常生活におけるフロー体験の頻度はポジティブな感情の得点と正の相関がある。

仮説⑤：中国人留学生のポジティブな感情の得点は，孤独感の得点と負の相関がある。

仮説⑥：中国人留学生のポジティブな感情の得点は，異文化ストレスの得点と負の相関がある。

※回帰分析による因果関係の分析法に関しては現在検討中である。

方法

調査対象者：在日中国人留学生 200 人

調査時期：2017 年 12 月から

調査内容：

① The Flow Questionnaire：フロー体験の特徴を記述した項目に対し，似たような体験の有無，体験時に取り組んでいた活動，体験の頻度（「1 年に数回」～「1 日数回」の 7 段階評価）について回答を求める。

② PANAS（Positive and Negative Affect Schedule）（邱・郑・王，2008）：現在のポジティブ感情およびネガティブな感情の程度について，「あてはまる」～「あてはまらない」の 5 段階評価で回答を求める。

③　短縮版 UCLA 孤独感尺度（ULS-8）（黎，2012）：孤独感を測定する 9 項目に対し，「まったくない」～「いつも」の 4 段階で評価を求める。

④　異文化ストレス尺度（李，2011）：異文化ストレスを測定する 29 項目に対して，「あてはまる」～「あてはまらない」の 5 段階で評価を求める。

【研究 2】

調査参加者：在日中国人留学生 20 名

調査時期：2017 年 12 月

調査内容と方法：各参加者に対し，約 1 時間の半構造化インタビューを実施する。調査内容としては，性別，年齢，来日年数などプロフィールに関する項目の記入を求め，留学の目的，来日後に遭遇した日常生活における困難と対処法について聞き取り調査を行う。聞き取り調査の内容は全て録音し，逐語文字化する。

分析方法：KJ 法による分析を行う（※検討中）。

終わりに

ここまで，フロー体験の特徴，効果，異文化ストレスの改善の可能性を示してきた。実際，フロー状態が体験できる活動は，ゲーム，スポーツ，学習活動，芸術鑑賞など，幅広く存在しており，こういった活動の中で体験するフロー状態は，体験者自身が困難を克服するのに役立つだけでなく，場合によっては，社会問題の解決にも効果があると考えられる。

写真 3

写真 4

毎年，大阪城ホールで開催される「1 万人の第九」というイベント（写真 3，4）がその一例である。このイベントは，主催者側が，国籍，職業，合唱経験を問わず，一般公募を行い，1 万人の合唱団を結成し，未経験者に対しレッスンを行い，本番では，1 万人のメンバーが協力してベートーヴェンの「第九」を演奏するというプロジェクトである。

このイベントの日本人参加者たちは，その後のインタビューで，人間の素晴らしさを感じ，会場にいる参加者がみんな兄弟のような感覚だったという感想を述べていた。また，外国人

参加者も「*音楽を通じてみんなが一つになれた*」とコメントしていた。

フロー理論を用いてこの現象を解釈すれば，ベートーヴェンの「第九」は，本来，能力レベルが低い合唱未経験者にとって挑戦レベルの高い課題であったが，事前にレッスンに参加し，ドイツ語の発音，歌唱法の練習をしているうちに，自身の能力レベルが上昇し，本番では，フロー状態に達していたと考えられる。また，一部の人ではなく，このイベントの参加者全員がフローを体験できたというのも特徴的であり，なにより，文化的背景の異なる参加者がこのイベントを通して「一つになれた」というのは，現代社会においてきわめて意義のあることではないだろうか。

現代社会では，グローバル化の推進により，物理的に世界は「一つになれる」一方で，偏見や差別，宗教問題などが過去よりも激化し，時にそれが地域間，民族間，宗教間の紛争や戦争に発展し，社会の崩壊につながる場合もある。

前述のように，チクセントミハイは精神的無秩序状態をもたらすものを心理的エントロピーと定義したが，偏見や差別，宗教問題などは社会にとってはまさに混乱状態を招くエントロピーの要因であろう。こういった社会的エントロピーを除去するためには，「1 万人の第九」のような活動を通して体験できる「万人共通のフロー体験」が必要であろう。

国際文化研究科の修士研究では，異文化ストレスのメインファクターとフロー体験およびそれによって誘発されるポジティブ感情との相関関係あるいは因果関係の実証研究を行い，異文化で生活している人々のために問題解決の糸口を見つけ出すことを目的としているが，異文化適応問題の背後には，個人の精神的問題だけでなく，心理尺度では測定できない社会問題が数多く存在している。

したがって，そういった意味で，困難を乗り越えるためには，個人レベルだけなく，社会レベルの問題解決の糸口になるような，「万人共通のフロー体験」の促進が重要であろう。国際文化研究科の一員として，これから，各文化の中に「万人共通のフロー体験」ができるような活動の存在があるかを意識しながら，心理学の視点だけでなく，より広い文脈の中で考察し，研究を進めていきたいと考えている。

参考文献

Asakawa, K., 2004, Flow experience and autotelic personality in Japanese college students：How do they experience Challenges in daily life? Journal of Happiness Studies, 5, 123-154.

Csikszentmihalyi, M., 1975/2000, Beyond boredom and anxiety. San Francisco：Jossey-Bass.

Csikszentmihalyi, M., 1990, Flow：The psychology of optimal experience. New York：HarperCollins.

チクセントミハイ，M., 1990，第 3 章　楽しさと生活の質　今村浩明(訳)　フロー体験－喜びの現象学　世界思想社　p. 73.

チクセントミハイ，M.・ナカムラ，J.，2003，第 1 章　フロー理論のこれまで　今村浩明･浅川希洋志(編)　フロー理論の展開　世界思想社　pp. 1-39.

邱林・郑雪・王雁飞 2008　积极情感消极情感量表（PANAS）的修订　应用心理学，14，3，249-254.

許倩・松田英子 2016　在日中国人留学生の異文化適応支援と問題――異文化ストレス，留学生のパーソナリティからの分析――，東洋大学大学院紀要，53：63-76.
Jackson, S. A., Kimiecik, J. C., Ford, S. K., & Marsh, H. W., 1998, Psychological correlates of flow in sport. Journal of Sport and Exercise Psychology, 20, 358-378.
川端雅人・張本文昭 2000 Flow State Scale（日本語版）の検討―その１－日本体育学会大会，51, 183.
Nakamura, J., & Csikszentmihalyi, M., 2002, The concept of flow. In C. R. Snyder, & S. J. Lopez（Eds.），Handbook of positive psychology. New York：Oxford University Press. Pp. 89-105.
王飛・横山恭子 2009　中国私費留学生のメンタルヘルス変化傾向と関連要因：2 年間のインタビュー追跡調査を通して.
朴賢娥 2012　在日アジア留学生の異文化ストレスに関連する心理学的要因の検討.
李智 2011　来华留学生异文化压力，心理弹性与心里健康的关系研究，杭州师范大学 硕士论文.
黎芝 2012　UCLA 孤独感量表中文简化版（ULS-8）的考评及应用研究，中南大学 硕士学论文.
Seligman, M. E. P., & Pawelski, J. O., 2003, Positive psychology：FAQs. Psychological Inquiry, 14(2), 159-163.
柳佳慶・松田英子 2011　在日中国人留学生のストレスと異文化適応に関する研究――文化受容態度と自己効力感からの分析――.

最優秀賞

多文化社会の中で生きる人々の暮らし

―タイとミャンマーの国境の町メーソットの事例より―

松本ゼミ
森金芽衣　島田真希　北山晟咲

このポスターは筆者らが 2017 年 8 月に 10 日間訪れた、メーソットという町における多文化共生について考えたことをまとめたものである。

メーソットとはタイ北西部のターク県に位置するミャンマーとの国境の町である。全人口の 75% をミャンマー移民が占めており（Clarke 2009,p.1070）、国籍だけでなく、宗教・民族・言語も異なる人々が暮らす多文化社会といえる。

先行研究では、文化と文化が接触するとき、そこには文化の差が見られると言われている。また、自文化を主張することで、その差は明確になり、異文化に対する排他的な考えが生まれることは少なくない（青木 2003）。このことから、筆者らは様々な文化が混在しているメーソットには、文化同士の対立があるのではないかと考えた。しかし現地のコーディネーターによるとそのような対立はない。メーソットとはどのような町なのか。また、そこに住む人々は異なる文化を持つ人々とどのように暮らしているのだろうか。私たちはメーソットで町の観察や住民 24 名へインタビュー調査を行い、メーソットにおける多文化共生について考えた。筆者らが多文化共生について考えさせられたのは以下の 3 つである。

1 つ目は越境方法である。世界各地で国境に柵や壁を作ることで移民や難民を追い返しているというニュースが記憶に新しい。一方でメーソットでは 3 つの越境方法を確認することができ、実際に筆者らも国境を渡った。第 1 に、パスポートを持つ人々が、1500 円程度を支払って、入国審査を受けて整備された橋を渡るもの。第 2 に、国境付近に住む人々が、身分証明書を見せ、90 円程度を支払って小舟で渡るもの。第 3 に、入国審査も支払いもせずに小舟で渡る方法である。筆者らはこの第 3 の越境方法をとり、小舟に乗って国境を越えたが、それを利用する現地の人々は主にミャンマー側のカジノに行くタイ人であった。このようにメーソットには 3 つの越境方法があり、人々が自由に移動していた。特に第 2 の越境方法からはミャンマー移民が自由に移動する様子がみられた。これらのことから、メーソットでは、人々が自由に移動し、移民を追い返すことなく、移民と共生している町にみえた。

2 つ目は言語である。町の至る所でミャンマー語を目にする、耳にする機会があった。また、ミャンマー語だけでなく、カレン語で書かれた看板や、ムスリムの人々がアラビア語で挨拶を交わす姿もあり、1 つの町の中で様々な言語が使われている様子がうかがえた。また、メーソットで生活するミャンマー移民は、20 年以上もメーソットで暮らしているにもかかわらず、

「仕事以外ではタイ語を話せない」と言う。これらのことからメーソットには、タイ語を話すことができなくても暮らしていける環境が存在しているのではないかと考えた。

３つ目はメーソットに暮らす人々の思いである。メーソットには、国境を越えてミャンマーからやってきた移民だけでなく、かつてタイの他の地域を巡りこの町に定住し始めた人々もいる。実際にインタビューを行ったムスリムや華人がそういった人々だ。彼らは、この１つの町に多様な宗教・民族があることを認識しており、中には「他の宗教や民族を背景に持つ人にも話しかけやすい」という声もあった。筆者らは、タイ北西部の代表的な民族であるカレン族の伝統的な祭りに参加した。そこにはタイの前国王の写真が飾られていたり、カレン語だけでなく、ミャンマー語が書かれていたりするなど、祭りという１つの空間からもメーソットにおける文化の多様性が見られた。このように、メーソットには異なる背景を持つ人々が暮らしているが、住民の中には「そういった多様性がこの町の良さである」と話す人が多かった。これらのことからメーソットに住む人々はそれぞれが持つ文化に帰属意識を持ちながらも、他の文化との違いを認め合い、この町で暮らしているのではないかと考える。

越境が簡単であったこと、町に多様な言語が溢れていたこと、そして実際に住む人々が町の多様性を認め合い暮らしていたこと、以上の３つの点から筆者らはメーソットにおける多文化共生について考えた。これらのことから、自文化を押し付けないこと、文化の違いを認めること、多様性を肯定的に捉えること、といったことが異なる背景を持つ人々が暮らすことのできる町、メーソットを作り上げていたのではないかと考える。

一方で、タイ政府はミャンマー移民の子どもたちの教育を認める代わりにタイ語の学習やタイ国歌の斉唱を求めている。また、移民規制に関する政策は強化が続けられており、2017年６月には新たな法律を制定し、非正規移民労働者を本国に追い返そうとした。このようなタイの政策によって、今後このメーソットにおける共生は揺るがされる可能性もある。

参考文献

Clarke Matthew ”Over the Border and under the Radar：Can Illegal Migrants Be Active Citizens?”, *Development in Practice,* Vol.19, No.8, 2009, pp.1064-1078
青木保『多文化世界』、岩波新書、2003年。

多文化社会の中で生きる人々の暮らし
—タイとミャンマーの国境の町
メーソットの事例より—

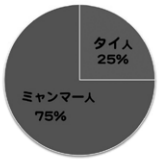
2017 年夏、松本ゼミ生 18 名は教員 1 名とともにタイのメーソットでフィールドワークを行った。わたしたちは、メーソットでの多文化共生に着目し、町の観察やメーソットの住民 24 名にインタビューを行った。

（グーグルマップをもとに作成）

発表メンバー
松本ゼミ 3 年：北山晟咲、島田真希、森金芽衣

メーソット（Mae Sot）
タイ北西部のターク県に位置する。面積は 1,986 平方キロメートル。ミャンマーとはモエイ川によって隔てられている国境の町。

メーソットってどんな町？



Clarke(2009)をもとに作成

➢ **宗教**
仏教、キリスト教、イスラム教　etc…

➢ **民族**
カレン族、ビルマ族、モン族　etc…

移民や、様々な宗教/民族を背景に持つ人々が共に暮らす多文化社会

文化と文化が接触するとき、そこには文化の差が見られるといわれている。自文化を主張することで、その差が明確になり、異文化に対する排他的な考えが生まれることは少なくない（青木 2003）。
メーソットには異なる文化が混在している。そのため、文化同士の対立があるのではないかと考えた。しかし、事前に現地コーディネーターの方に聞いたところ、メーソットには目立った対立はない。
そこでわたしたちはメーソットで町の観察やインタビューを行うことで、メーソットにおける多文化共生について考えた。

言語からみる多様性

町の観察からはメーソットの言語面における多様性が見られた。また、ミャンマー移民家族にインタビューを行い、メーソットで生活するミャンマー人の暮らしぶりにも触れた。そこではタイ語を話せなくても暮らしていける環境があることが分かった。

町を歩いていると、所々でミャンマー語を目にした。タイ語の表記がないところもあり、その付近ではミャンマー語しか聞こえてこなかった。
また、ミャンマー語だけでなくカレン語で書かれた看板があり、ムスリムの人々はアラビア語であいさつをしている様子もあった。

タイ語を使うのは仕事のときだけ
（メーソットに 20 年以上住む移民）

メーソットにいて使う言語は
ミャンマー語
（メーソットに 20 年以上住む移民）

インタビュー調査からは、日常生活においてミャンマー人たちがタイ語を必要としていないことが分かった。20 年以上もメーソットに住む移民が仕事以外でタイ語を話さないという証言もあり、タイ語を話せなくても暮らしていける環境がメーソットには存在していると考えられる。
このように、様々な言語を使用する人がおり、その様子が町の観察やインタビューから分かった。このことからメーソットでは言語の面において多様性があると感じた。

町の多様性を認め合う人々

メーソットにはわたしたち中華団体のほかに、例えばモスクやキリスト教会など、いろんな団体があり、団体同士は兄弟である
（華人グループの代表者）

メーソットは小さい町で、多くの宗教がある。イスラム教を押し付けるつもりはない。知識として知ってほしい
（モスクの代表者）

多くの民族や宗教が一緒に過ごせていることがメーソットの良いところ。ほかの宗教の人にも話しかけやすい
（タイ人・ムスリムのビラムさん）

仏教の人だけでなく、ムスリムのメンバーやキリスト教のメンバーも団体の中にいる
（華人グループの代表者）

8 月 5 日に訪問した仏教寺院では、「リスト・タイリング」というお祭りが行われていた。家族や友達などの幸せ・健康を願って、手首に紐を結ぶというカレン族の伝統的なお祭りであった。ミャンマー語とカレン語で書かれた掛物があるなど、タイ、ミャンマー、カレン、仏教が入り交じっていた。

住民の思うメーソットという町の良さとは？

話を聞いたムスリムや華人は川を渡ってメーソットに来たのではなく、タイのほかの都市を巡り、この町に定住していた。このように、メーソットには国境を越えてきた移民だけにとどまらず、様々なルーツを持つ人々が住んでいる。また、様々な宗教、民族を背景に持つ人々も存在する。「異なる国籍や文化背景を持つ人々がたくさん暮らしている。それがメーソットという町の良さ」と答えた人が何人もおり、彼らは自らの帰属意識を持ちながら、互いの違いを認め合い、メーソットの多様性を認識していた。そして、メーソットの良いところはそういったところである、と言っていた。

越境方法からみる共生

世界各地で国境に柵や壁を作ることで国境を封鎖し、移民や難民の入国を阻止しようとするニュースが記憶に新しい。
一方、メーソットでわたしたちは 3 つの越境の方法を確認した。そのうちの 2 つの方法で実際にミャンマー側に渡り、移動が自由であることを身をもって感じた。

朝日新聞デジタル(2017 年 2 月 23 日より)

①パスポートを持つ人

パスポートを持ち、
1500 円を支払う。
入国審査を受けて、
橋を渡る。

②国境付近に住む人

身分証明書を見せ、
90 円を支払う。
ボートに乗って渡る。

③タイ人

入国審査も
支払いもなし。
ボートに乗って渡る。

このように 3 つの越境方法があることから、メーソットでは人の移動が自由であると考えられる。また、国境に柵や壁はなく、移民が渡りやすい越境方法があったことが印象的である。多くの移民が利用するボートの船着き場はまるでバス停のように人々がボートを待っていた。このことからメーソットは人が自由に移動しており、移民を追い返すことなく、移民と共生している町にみえた。

メーソットにおける多文化共生

10 日間に渡るインタビューや観察を行った結果として、メーソットでは人々が移民に対しても異文化に対しても排他的ではなく、共にメーソットの町で暮らすことを肯定的に捉えている様子があったといえる。

これにより、メーソットでは多様な背景を持つ人々が共に暮らせるようになっていたと考える。自らの帰属意識を持ちながらも、互いの違いを認め合おうとしていた人々の思いと行動がメーソットという町を作り上げていた。

自文化を押し付けない

文化の違いを認める

多様性を肯定的に捉える

多文化共生の町メーソット

変化を伴う多文化共生

タイ政府は教育の現場において、ミャンマー移民の子どもたちの教育を認める代わりにタイ語の学習やタイ国歌の斉唱を求めている。また、移民に対する制度も更新し続けている。今年の6月には新たな法律を制定し、非正規の移民労働者を本国に追い返そうとするなど、移民の規制は強化されている。

このようにメーソットにおける多文化共生は、タイの政策による影響を受けやすいという事実があり、今後も常に変化が伴うといえる。

奨励賞

アクティビティ、空間、そして建築

～自然に人が集まる広場～

甲ゼミ
間所美晴　本多菜英　須賀彩香　桑原優　矢田一義

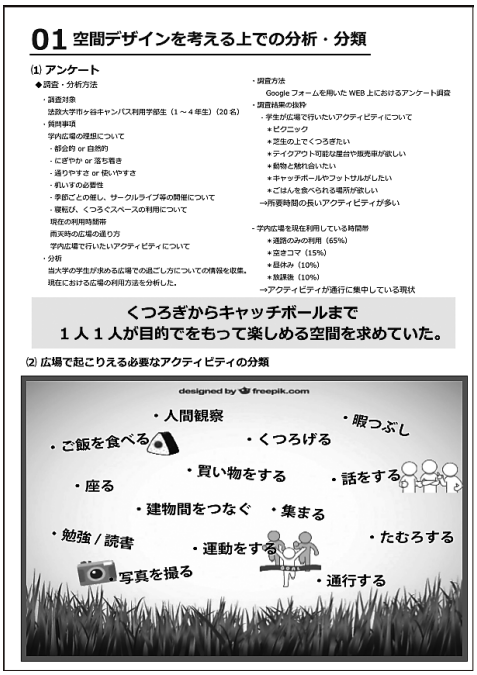
- はじめに -

現在の建築の多くは、建物や空間のデザインが先行し人々のアクティビティが後回しにされがちだが、本来、空間デザインは人々のアクティビティから発想し設計されるべきものである〔1〕。本研究は現在計画中の大学キャンパス中央広場［図⑥］に着目する。現時点の完成イメージ図を注意深く見ると、この中央広場はキャンパスの周囲の建物すべてからアクセス可能な位置にあるのにもかかわらず、そこに想定されているアクティビティは通行が中心となっているように思われる。私たちはそれを改善点と考え、大学キャンパスの中心にあって自然に人が集まり活気あるアクティビティが起こるような広場をめざしたデザイン案を提案する。

【ポスター①】

本研究を行った理由は私たちの SA での体験にある。SA 先の学校や町には広場があり、そこに寄って何かしようという意識が自然とおき、活気ある生活を送っていた。私たちの今の生活に目を向けると、ただ学校に行き授業を受けて帰るという淡々とした生活を送っているように感じる。そこで、キャンパス中央広場をリノベーションすることで法政大学での生活を活気あるものにするきっかけ作りができるのではないかと考えた。当ゼミでは、人々が行うアクティビティに着目しそこから空間のデザインを考えるという新しいプロセスを学んだ。今回はそのプロセスに沿って、人々が自然に集まるような活気あるキャンパス中央広場へリノベーションしていく。

【ポスター②】

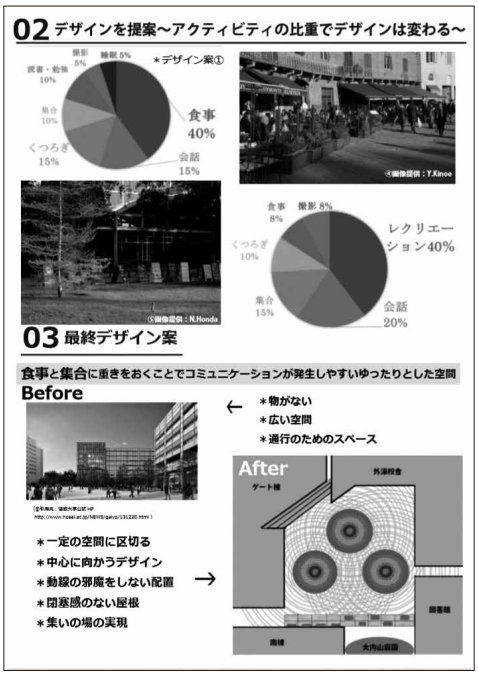


空間デザインを考える上での分析・分類について述べる。1つ目として学内広場の現状と学生の声を聴くことで視野を広げるため、市ヶ谷キャンパスの学生を対象としたWebアンケートを行い、アクティビティを考える参考とした。このアンケートから、学生たちはくつろぎからキャッチボールまで一人一人が様々な目的をもって楽しめる空間を求めていたことが分かった。また2つ目として、起こりえるアクティビティの分類を行った。広場でのアクティビティはポスターから様々であることが分かり、読書勉強からスポーツまで幅広く考えられた。

【ポスター③】

次に、国内外の良い広場を分析した。分析した広場は、カンポ広場、おもはらの森、UCデイビスの学内広場である。まず、カンポ広場についてである。この広場はイタリアのシエナにあり、世界的に良い広場として位置づけられている。また広場の向かいに象徴的な建物が位置づけられていることや、床のタイルが中央に向かって配置されていることによって一体感を生み出している。次におもはらの森である。この広場は、表参道原宿東急広場にある。椅子やテーブルとしても使える段差がすり鉢状に配置されていることや、樹木が多く配置されていることで人と人や、人と自然の関係をより親密にしていると同時に、調度いい距離感を生み出している〔2〕。次に、UC Davisの広場である。これはアメリカのカリフォルニア州に位置するUCDの学内の大きな芝生の広場で食事や昼寝や運動や暇つぶしなど様々な目的を持った人々が気楽に集まっている。

【ポスター④】



次に今までのアンケート、アクティビティ分類、いい広場分析の３つのプロセスを経た２つのデザインを提案する。まず食事に重きを置くことで、テラス席の広がった広場になる。一方でレクリエーションに重きを置くことでこのような芝生の広がった広場になる。このように、アクティビティの比重を変えることで大きくデザイン案は変わることが分かる。今までのプロセスを経て、最終デザイン案を提案する。ポスター③の Before 図では、ものがなく広い空間、そして通行のためのスペースとなっていることがよく分かる。そこで私たちが提案した最終デザイン案がポスター③の After 図である。このデザイン案では、アクティビティが自然に沸き起こるようなデザインを考えた。

【ポスター⑤】

次に模型に沿って説明していく。まず、ガラス屋根の通路についてである。実際の屋根の幅は、10メートルでゆとりのある設計なので食事をとるスペースを確保できる。また、普通の屋根ではなくガラスの屋根を採用したのは、開放感が得られ広場や庭園との境をなくすためである。次に円形椅子についてである。段差を上に作るのではなく、下に掘る構造にすることで、歩行者も椅子を利用している人も互いに視線が気にならず集いの場にも食事の場にもなりえる。実際の大きさは外周直径 20 メートルで、ゆったりと座れる大きさになっているが遠すぎることなく適度な距離が保たれるためそこに人の存在を確認でき安心感が得られる。次に、床のタイルを円形椅子から波紋上にデザインすることで、建物から自然と人が広場に集まるようにし、また動線を暗示している。

- 結び・今後の課題 -

アクティビティからデザインを考え、キャンパスに活気がでるような中央広場を考えた結果、食事と集いに重点をおいた空間を提案することで、授業外のアクティビティを充実させる広場を実現した。また、通行のためだけではない、共有空間が作ることができた。

このデザイン案をよりよくするための今後の課題として、食べ始めるところから食べ終わるまでの、「食事」の一貫した流れを実現するために、学食によるテイクアウトなどを行い、そこで発生するアクティビティの質を向上すること、などが考えられる。

参考文献

〔1〕ヤン・ゲール著、北原理雄訳（2014）『人間の街：公共空間のデザイン』鹿島出版会
〔2〕隈 研吾、陣内 秀信、鈴木 知之（2015）『広場』淡交社

参考サイト

イタリア旅行記（URL：http://hi-net.air-nifty.com/iyota/2014/08/post-8da7.html　2017 年 11 月 1 日閲覧）
淡路島国営明石海峡公園（URL：http://awaji-kaikyopark.jp/enjoymap/%e8%8a%9d%e7%94%9f%e5%ba%83%e5%a0%b4.html　2017 年 11 月 1 日閲覧）
法政大学公式 HP（URL：http://www.hosei.ac.jp/NEWS/gaiyo/131220.html　2017 年 11 月 3 日閲覧）

写真

本文掲載の写真については以下から引用させていただきました。
①画像提供：甲 洋介
②画像提供：本多 菜英
③画像提供：本多 菜英
④画像提供：甲 洋介
⑤画像提供：本多 菜英
⑥パース図面提供：法政大学公式 HP（http://www.hosei.ac.jp/NEWS/gaiyo/131220.html）計画時点の完成イメージ図
⑦～⑫画像提供：法政大学甲洋介研究室

奨励賞

伝統と革新が交差する場

－「祭り」の再興と経済化からみる神田祭－

佐々木一惠・月野ゼミ
伊藤啓太　阿部洋介　大友風香　小川礼乃　田上紗帆
塚本紗英　日小田優希　中野凪沙

長い歴史の中で、「祭り」の様相や機能は大きく変化してきた。昨今、東京にいれば日本各地の「祭り」の姿を季節や場所の垣根なしに見ることができる。本来各地方や共同体内で閉鎖的に行われていたものが、様々な場所に移植され、本来の意味や目的を喪失した状態で催されていることは少なくない。

かつて「祭り」とは、人々が全体との相互関係を確認し、共同体内で同志的意識を感じあうために必要不可欠なものであった（芦田 2001）。しかし、戦後の日本では社会の都市化が進行し共同体という概念そのものが薄れていった。人々が所属先を自ら選択し生活することが可能になった戦後日本社会では、祭りの本来の意味は失われていった（芦田 2001）。その結果「祭り」は急速に衰退した。しかし、現代において「祭り」は再び隆盛を見せている。「祭り」が閉鎖的なものから外部に開かれたものへと変貌し、その経済的価値が注目されるようになったのだ（芦田 2001）。また、現在の「祭り」の発展はその経済的価値が重視されるようになっただけでなく、人々が「祭り」に固有の宗教的価値を求めているからだとも考えられている（芦田 2001）。

本発表では、共同体の外部に開かれることによって「祭り」が経済的価値を帯び得るものとなることを「祭り」の経済化と定義し、その傾向が顕著だと思われる事例の一つである神田神社（東京都千代田区）の「神田祭」を取り上げる。その調査を通し、「祭り」の経済化の実態を明らかにすると共に、芦田（2001）が主張する現代的な宗教的価値の発見も試みる。

「神田祭」は幕府の支援を受け庶民たちから支持を受けた江戸時代に発展した。大正時代に入ると神社の神輿が渡御する「神輿渡御祭」へと変遷していき、各氏子町が町神輿を作り担ぐようになっていった。戦後には渡御祭から神幸祭への祭りの名称の変化があり、今日に至っている。

「神田祭」が経済化の事例の一つとしてあげられる理由の一つは外部（とりわけ企業）との交流が盛んなためである。2009 年、「神田祭」の目玉の一つである「附け祭り」にアニメ「ケロロ軍曹」の山車が登場した。それを皮切りに「ラブライブ！」「ソード・アート・オンライン」などのアニメと「神田祭」そのものもコラボレーションを行うようになった。祭りではアニメのキャラクターが印刷された絵馬など様々なグッズが販売され、その購買のためだけに祭りを訪れる人も現れるようになった。

【参考文献】

芦田徹朗　(2001)『祭りと宗教の現代社会学』　世界思想社
木下直之、福原敏男 (2009)『鬼がゆく　江戸の華　神田祭』　平凡社
神田神社 (2017)『神田祭　神田祭と神田明神を知るための本』
長沢利明 (2001)『江戸東京歳時記 / 歴史文化ライブラリー』吉川弘文分館
松平誠 (2008)『祭りのゆくえ～都市祝祭新論』中央公論新社

最優秀賞

百年の杜

－生き方が語るNGO －

松本ゼミ
後藤亮介

【作品紹介】

近年、学生にとって国際ボランティアがより身近になっている。大学が企画し単位として認定されるものや、長期休みを利用したNGO主催のインターンシップ等、本人の意欲次第で様々な機会が用意されている。中にはそうしたボランティアを経て、より国際協力に携わりたいという意識が高まり、大学卒業後、NGOへの就職を進路として考える者も増えてきている。だが、寄付金や助成金によって運営されるNGOについて、給与や安定性の面で漠然とした不安を抱く学生も多く、NGOへの就職を踏みとどまらせる要因のひとつとなっている。では実際にNGOに就職し生活している人は、人生において何を考え、どのような選択をしているのだろうか。元NGO職員の姿を映像で追った。

本作品で取り上げる人物は、神奈川県在住の松尾康範氏である。神奈川県で育ち、現在は横須賀市で居酒屋「百年の杜」を営んでいる。地産地消が店のコンセプトであり、三浦半島の生産者とコミュニケーションを取りながら店で扱う作物を栽培・取引する。地域の産業と連携した食の提供が売りだ。そんな居酒屋の店主となる以前の松尾氏は、学生時代のインターンシップを経て、国際協力NGOである日本国際ボランティアセンター（JVC）の職員として、タイ東北部で「むらとまちをつなぐ市場（いちば）」プロジェクトに従事していた経験を持つ。農民たちが作物の売買だけではなく、情報交換も行える場としての市場を村に作ることで、村の外部からの食材に頼らない地産地消の農業を支えた。松尾氏の食へのこだわりは、かつて自身が精を出したNGOでの国際ボランティアが大きく影響している。タイで自分たちが作った市場のように、居酒屋店主という生産者と消費者を繋ぐ立場になった松尾氏は、まず自分たちの食を考えることが、ひいては世界の食糧問題を解決するという信念を今も変わらず持ち続けている。また、日本の地域社会を中心に活動するようになった今も、タイの農家を日本の農村や食材流通現場に案内するなど、タイとの協力も忘れていない。こうした居酒屋を中心とした草の根での国際協力の姿に共感し、店にはNGO関係者や国内外からの客が集い、松尾さんの活動を「真の国際協力」の形であると評価している。

松尾氏の姿から、NGOとは職業ではなく生き方なのではないかと考える。NGO職員の時代も居酒屋店主の今も、食で地域と世界に貢献するという信念は変わっておらず、むしろ新たな人生の選択の際はNGOでの経験が軸となっていた。たしかにNGOで働くということは高

収入の仕事とは言えないが、自らの想いを実現する場、そして活動を通して自分自身を形成する場として機能している。世界で困っている人たちを助けるという印象が強い国際ボランティアの世界だが、就職を目指す学生たちは、あくまで自分がどう生きたいかを再確認することが重要である。

【発表を終えて】

本作品は、NPO 法人「市民がつくる TVF」が運営する映像コンテストである「東京ビデオフェスティバル 2018」（以下 TVF）への応募を目標に制作したものです。主人公である松尾康範氏は、居酒屋・NGO・農村・タイという数多くのフィールドで活動している方で、その活動を短い時間でまとめることは非常に困難でした。かつ、ただ単に人物紹介で終わらず、この作品を通して NGO 職員という生き方を伝えるためには、何を中心に描くべきなのかという悩みも大きかったです。そんな中、ゼミの時間内外で先生やゼミ生に作品を見てもらい、何度も意見をもらえたことが困難の壁を乗り越えられた 1 番の力だったと思います。企画・撮影・編集を 1 人で行った映像制作でしたが、周りの助けが無くては完成できなかったものだと思います。松本ゼミのみなさん、ありがとうございました。

この作品を作ったことで終わらずに、今後も松尾氏の尽力するアジアの農民交流等に、映像による広報活動という形で関わっていけたらと考えています。私自身も、今自分が出来る国際協力をこれから実践していこうと思います。

奨励賞

3.12 栄の灯火

島田ゼミ
鳥 越 浩 暉

長野県最北端に位置する栄村は、人口約 2300 人、山あいの豪雪地帯にある農林を産業とする自然豊かな村。東日本大震災から約 13 時間後、2011 年 3 月 12 日午前 3 時 59 分、マグニチュード 6.7、震度 6 強の衝撃が村を襲った。それだけではなく、同 5 時 42 分までのわずか 2 時間ほどで、震度 6 弱を観測する 2 回の強い余震に見舞われた。のちに長野県北部地震と呼ばれる大震災。

しかし、東日本大震災の影に隠れ、報道されない中、同村では 3 人が犠牲、計 3 回の強い揺れで住家 694 棟、非住家 1048 棟が損壊、雪崩や土砂崩れで 3 集落が孤立する等の被害と孤立状態が続いた。

3. 11 の影響でどうしても【復興が遅れてしまった栄村の現状を追うドキュメンタリー制作】について発表した。急遽集めた撮影メンバーとの温度差、追悼式や議員への撮影許可を得ることが大きな課題であった。

「なぜ、栄村を取材するのか」と自分にもう一度深く問いた。3. 11 についての制作のほうが人々の視線は集まる。だが、学生という小さな立場は視聴者数などの公益性を重視せずに、独自の視点で制作ができる。そして、深刻な高齢化問題も抱える栄村を、学生である我々が取り上げることが、若い世代への強い問題提起になると答えを出した。その想いがメンバーにも伝わり、私の想いを取材先へ積極的に伝えてくれた。その結果、ローカル放送局しか撮影許可が降りなかった追悼式や市議会委員への撮影許可を得た。

この作品は栄村震災復興記念館「絆」で上映される予定だ。

奨励賞

in and out

稲垣ゼミ
若宮樹

私は私の友人で法政大学国際文化学部４年の本多彩夏さんをモデルに、武術太極拳のプロモーション映像を制作した。

Concept

あなたは「武術太極拳」をご存知だろうか。

それは我々がよく目にする健康のためのエクササイズではなく、側宙やジャンプなどが含まれる極めてアクティブな競技（＝武道）である。私は友人であり、武術太極拳では国際的に活躍している本多選手の演じるダイナミックな動き、それにもかかわらず指先まで意識が通った細やかな身体表現であるという点を目の当たりにしてとても感銘を受けた。しかしながら、この素晴らしいスポーツはオリンピックの最終候補種目に選ばれながらも知名度はそれほど高くない。オリンピックでは知名度も重要な要素の一つとして考えられており、今後このスポーツがオリンピックの正式種目になるためには不可欠な要素である。私は今回、一つの試みとして武術太極拳の魅力を伝えるために、本多選手を被写体として映像作品を制作することにした。

作品を制作する上で「IN and OUT」（インプットとアウトプット）をテーマの軸とした。このテーマは「太極」をもとに着想を得たが、「太極」とは万物の根源であり、ここから陰陽の思想が生まれた。この二元的な概念は、互いに対立し、互いに依存し、互いに入れ替わるものと考えられ、物事の生成、発展、消滅、転化するプロセスに対するものである。また陰陽は「静と動」「虚と実」という概念でも表現される。また、「静」や「虚」は消極的でありながら有用でないものだとされるが、実は重要であるという。これを競技ベースで考えた際に、想起させるのが「練習と本番」や「負けと勝ち」などである。作品にはこの重要な二極対立を落とし込んでいく。

Comment

５分にも満たない短い時間のこの映像作品は、本多選手の持つ力強さと武術の魅力にフォーカスすることができたと感じている。最終的なプロモーションを行う場としては、SNS を選んでおり、観た瞬間に「カッコいい」という印象を与えることができるように映像、音楽の両方の側面から工夫した。短く分かりやすい映像として編集したが、作品の細部でメッセー

ジやアイディアを詰め込むことで観るたびに新しい発見があるような作りにした。この作品をSNSで見かけた際には、是非共有してほしい。

最優秀賞

表裏一体

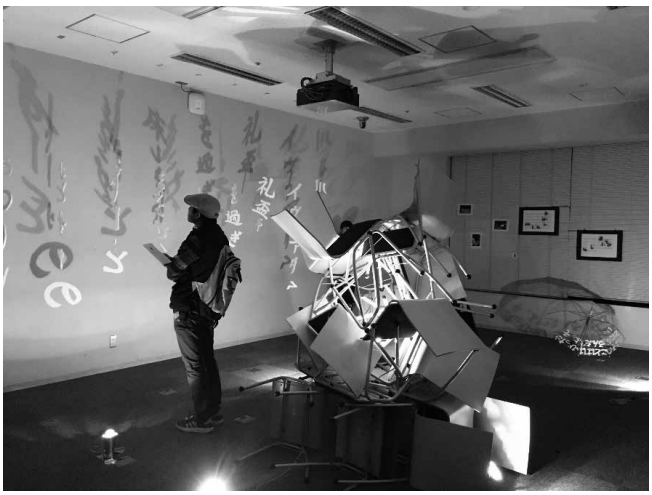
～精神病者の〈リアル〉～

森村・川村ゼミ
大瀧愛莉　高橋麻理子　佐野奈々美　桝林佳生子
石川紗綾　齊藤美紀　中澤美智　藤巻夏実　保土田千鶴

「精神病者」と聞いて、あなたはどのような人をイメージするだろうか？
心を病み、おかしくなってしまった人。電車の中で奇声をあげたり、ひとりで喋っていたりする人…。なかでも、私たち「健常者」が彼らに対して共通して感じているイメージがこのようなものではないだろうか —— 「私たちとは全く違う人たちだ」。

彼ら・彼女らは、自らの自由意志で狂気的な行動を起こしているのではない。抗うことのできない幻聴が聞こえたり、止まらない妄想や幻覚に悩まされたりしているのかもしれないのだ。彼ら・彼女らのなかには、自分の発している言葉とその言葉で言いたいことの意味とが合致せず、他者とうまくコミュニケーションがとれない人たちもいる。そうしたなかで生きることが、そして生きることしかできない世界が彼ら・彼女らにとっての「現実」である。そこでは、とても孤独な「戦い」を強いられているのである。

「人は皆、精神病である」—— フランスの精神分析家ジャック・ラカンの残した有名な言葉である。無意識に抑圧された心の闇は必ず回帰し、その人を支配し続けるとラカンは語る。彼の言葉の意味は、誰もがこころに闇を抱え、それを隠そうとするが、結局のところ、私たち人間はそこから逃れることはできないということだろう。そして、そのような「こころの闇」の部分を抱えることこそが「人間」だと彼は語っている。



精神病者たちは、私たちには容易に理解できない行動や言動から、しばしば私たちに不安や、あるときは恐怖を与える。そこから、私たちは、彼らを「異常」として遠ざけ、自分たちは「正常」だと思い込むことで、

彼ら・彼女らとの間に境界線を引こうとする。しかし、実際には、健常者であれ精神病者であれ、私たちは自分以外の〈リアル〉、つまり他者が見ている〈リアル〉を体験することはできない。それゆえ自分の〈リアル〉を「正常」だといえる根拠はどこにも無い。それでは、そもそも、私たちは何を根拠にして「正常」と「異常」とを分けているのであろうか。精神病者たちの〈リアル〉も、彼ら・彼女らにとっては、それがただ一つの〈現実〉であり、彼ら・彼女らにとっての「正常」かもしれないのである。むしろ、「自分はおかしくない」と思い込んでいる私たちの方が、彼ら・彼女らから見れば、「異常」かもしれないのだ。

森村・川村ゼミでは、2016年度から、ラカンの精神分析理論を用いて、人間の「こころ」について研究している。精神病者たちは、もとから精神を病んでいるわけではない。ある日突然、強烈な体験がきっかけで、それまでの彼ら・彼女らの世界が崩れ、病気になってしまったのだ。そうであるならば、私たちと彼ら・彼女らに起こってしまったことは全く関係のないことではない。むしろ、私たちも「こころ」に闇を抱えているかもしれないし、精神病になる可能性も十分にあると言えるのである。だからこそ、私たちは、精神病者を遠ざけるのではなく、少しでも理解しようとすることが重要になる。あなた自身も、自分の「こころの闇」に目を向けることをしてみたらどうだろうか。

荘子の『胡蝶の夢』――「私は蝶になった夢を見ているのか、それとも、私はあの蝶が見ている夢なのか。」にも見られるように、私たちは、幻想か〈現実〉かわからない不安定な〈リアル〉を生きているかもしれない。しかし、実のところそれらを、どちらが「正常」であり、どちらが「異常」であるかを区別する境界など、この世界には無いかもしれない。

《制作意図》

今回私たちは、抗うことができない幻聴や止まらない幻覚や妄想、自ら発した言葉と自らが意図しているものとが合致せず、他者とコミュニケーションがうまくはかれないなど、精神病者が日々苦しみ、戦っている〈現実（リアル）〉をテーマにインスタレーションを行った。本来の機能を失ったイスのオブジェ、シニフィアンとシニフィエがずれてしまった絵画、自分を攻撃する言葉だけが浮き出た文字などを作品として制作し、それらを展示することで、来場者の方々に精神病者の〈リアル〉の断片を体験していただき、それらの意味を考えていただく展示空間を作り出そうと試みた。

《展示作品》

●シニフィアン・カーテン

言葉と言葉の繋がりとは何であろうか。なぜ「私は朝ごはんを走る」は、間違っていて、「私

は朝ごはんを作る」は正しいのだろうか。

天井に吊るされた文字たちは、世界的に有名な小説家ジェイムズ・ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』の日本語訳から抜粋したものだ。ラカンによると、ジョイスは小説を書き、自らの「こころ」を表したことで精神病を発症しなかったという。何が良い作品で、何が悪い作品なのか。何が正常で何が異常なのか、この作品を観ながら考えていただくことを目的とした。

●イスのオブジェ

誰もが「イスとは何か」と聞かれれば、ほとんどの人が「座ることのできるもの」と答えるだろう。では、「座れないもの」はイスとはいえないのだろうか。例えば、イスの上にイスが積み重なっている、上下逆さまになっている、あるいは横たわっている…。これらのイスのあり方を不自然と思った人がいれば、その人たちは「イス＝座ることのできるもの」という共通認識を前提にしているのかもしれない。そしてこの前提にのっとっていない人たちが現れた時、私たちはその人たちを排除してしまうかもしれない。しかし、私たちはなぜ自分の認識と同じ認識を周りの人たちももっており、周りの人たちと私たちの認識がすべて共通認識であると言い切れるのだろうか。あなたにとって、あなたの隣にいる人にとって、このイスの山はどのように映るのだろう。

●傘

正解、世界、成果…精神病者は一つの単語から様々なものを連想する。一つ一つの単語はしっかりと理解しているにもかかわらず、彼ら・彼女らがつくり出す言葉群はどこかおかしな文章となってあらわれる。このように、関連性のない言葉が混ぜ合わされてしまう症状を「言葉のサラダ（Word Salad）」と呼ぶ。彼ら・彼女らは自分の思考を統合する（まとめあげる）ことができず、「あの家の犬は緑色だからフランスだ」、「私のメガネは口紅を塗りながらとてもおいしいです」のような支離滅裂な言葉群をつくってしまう。この作品はそのような、まるで連想ゲームや韻を踏んでいるようにみえる言葉の繋ぎ方を表現しようとした作品である。

●「物」のオブジェ―文字なのか、物体なのか―

私たちは、「ものと言葉は、どちらが先に出来たのか」という議論を時折耳にするが、そもそも「もの」と言葉の違いは何であろうか。これは「言葉の物質性」をあらわそうと試みた作品である。精神病者は時として、言葉を、わたしたちのような仕方では認知しない。言葉の意味と言葉のカタチとを別々に感じ取っているのだ。例えば、言葉に厚みや触り心地ができたとき、それは言葉と言えるのだろうか。それは「もの」になるのだろうか。「もの」とは何か。言葉とは何か。

●その他

絵画、貼り紙と写真、矢印アートなど。

《来場者の方たちの声》

・非常に興味深かったです。
・現代美術館のような雰囲気で見応えがありました。精神病者の人の見る世界なので想像できない現象かと思ったら意外と共感できてしまうところがあり、驚きました。
・自分が見ている世界が全てではなく、他人の視界も考えることで新しいものが見えてくると気が付きました。
・今まで電車や街中で出会った精神病者の人たちへの見え方や感じ方が変わった気がした。
・展示を観る中で、自身が当たり前と思っていたことの間違いに気づいたように思います。
・一歩入った瞬間から日常とかけ離れた世界を感じることが出来ました。

～ご来場いただいた皆様、ありがとうございました～

▲集合写真

〈参考資料一覧〉

▼DVD

・ドキュメンタリー『日本のアウトサイダーアート』Vol.8「非現実の王国」、Vol.9「孤独のカタチ」
・想田和弘監督『精神』

▼文献

・ヘンリー・ボンド『ラカンの殺人現場案内』太田出版、2012 年
・向井雅明『ラカン入門』ちくま学芸文庫、2016 年
・ジャック・ラカン『精神分析の四基本概念』岩波書店、2000 年

奨励賞

WILL

−意思と未来−

稲垣ゼミ
矢冨百夏　飯高光輝　一ノ瀬由梨　落合慶太
中村拓美　石本真子　阿部早也香　山口万柚子　今井奏
新崎椋司　福田愛　米川昌杏　若宮樹
濱口彩華　土方日向　栗原邑珠

稲垣ゼミでは、国際文化情報学会への参加に先駆けて 20 世紀初頭のイタリアの芸術前衛運動である「未来派」について研究をした。芸術運動としての未来派を批判的に検証し、未来派の現代的な意味や 21 世紀を創造する新しい未来派の姿とはどのようなものだろうか、ということについてゼミ内でディスカッションを重ねた。

実際の作品はインスタレーションの形式をとり、21 世紀に登場する新しい未来派は、美術作品を制作する美術家の集団ではなく「商品」をプロデュースする一般企業として描き出した。プレゼンテーション会場をシミュレートして新未来派が提唱する新商品のポスター、コマーシャル映像、商品マケットなどを配置した。

以下は未来派宣言になぞらえて提唱した「新未来派宣言」である。スピードを提唱する未来派に対し、21 世紀の「新未来派」はむしろスピードダウンを提唱している。

新未来派宣言

1909 年、イタリアの詩人フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティにより未来主義成立宣言が起草された。未来派とは近代社会のスピード感を称え、過去の芸術の破壊と機械による効率化された社会を讃えた前衛的芸術活動である。

この " 未来派 " は現代の大量消費社会を見事に表した芸術運動であったが、近年わたしたちは未来派の速さにすでに慣れきている。インターネットとスマートフォンの普及によりコミュニケーションはみてとれない速さとなり言葉が溢れかえっている。私たちは未来派が賞賛する速さに美しさを感じなくなることに加えてその速さを認識することさえなくなってきた。現代社会の高速化、効率化されたコミュニケーションはもはやありふれた平凡なものであり、そこに前衛的な芸術性はみられない。

そこで私たちはこのインターネットやスマートフォンを利用し高速化されたコミュニケー

ションの時代において " 新未来派宣言 " をする

WILL・意思と未来　この社会において必要とされるコミニュニケーションとはなんだろうか。いつ、誰とでもすぐにコミュニケーションできるにも関わらず、わたしたちの心に虚しさが残る。

私たちが仮定した未来、" 新未来 " において既にコミュニケーションは速さを十分とし誰とでもすぐに繋がることのできるコミュニケーションツールが開発なされ人々は不自由することはない。しかし人々はその自由なコミュニケーションにも満足することができず、関係性の希薄さや、対人コミュニケーションの少なさによる鬱憤とした空気が漂う社会が問題視されてきた。そこでとある企業が開発したのが、最新型コミュニケーションツールの数々である。それは " 新未来派 " の観念に基づき、コミュニケーションの速さを人間的なスピードまで落とし、その内容や方法を豊かにすることで人々の距離感を縮めることを実験的に可能にした。

早まりすぎたスピードを人間的な時間軸に落とす、新未来派の運動はまさに画期的で前衛的なものとして話題を呼び始めている。" 新未来派 " のコミュニケーションツールはとある企業の製品発表会という形態で展示をする。より新未来派の登場を鮮やかに想像できるよう、近い未来を想定し、よりリアリティを感じられるようその未来においての企業の製品発表会という形のインスタレーションを制作する。

具体的な製品内容としては、旧来の電話のように他人と生の声で繋がることができる新未来型コミュニケーションツール、知らない人同士が手紙を交換できる手紙の自動販売機などである。

これらのインスタレーションを用いて私たち稲垣ゼミは未来派とコミュニケーションについて考える機会をつくり、また新しい未来（WILL）への意思（WILL）を提唱したい。

インスタレーション風景

奨励賞

Million Dollar Baby of America

栩木ゼミ
佐藤健志朗　工藤誠己　小林凌典　川畑芽朗
住田美怜　中澤由貴　宮﨑信吾　大野義佳
吉田瑞季　伊弊末和磨　竹尾華　須田彩花
増村遥佳　門脇ゆうり　赤坂瑠也　金山紗己　長谷川まりな
柳田有希奈　笠原佑華　大越康貴　山﨑佳奈　渡井純希

2017年度のインスタレーション部門において、私たちは映画『ミリオンダラー・ベイビー』（*Million Dollar Baby*, 2004）を題材にして、ある場面を表現した。以下は、会場で来場者に聞いていただいたあらすじの内容（音声）である。

舞台は、アメリカ。2005年にアカデミー賞で作品賞を受賞した映画、『ミリオンダラー・ベイビー』の一幕です。ボクシングで世界王者を目指していたマギーはある試合をきっかけに、脊椎を損傷し、全身麻痺に陥ってしまいました。

「今までボクシングのためだけに生きてきた。呼吸器に生かされるだけの生活なんて私じゃない。ボクシングを思う存分に出来た私はもう十分に満足している。だから呼吸器を外して、私を殺してほしい。」

そういわれたコーチのフランキーは、厳格なカトリック教徒でした。キリスト教、特にカトリックでは、自殺や殺人は大罪とされています。なぜなら、そういった行為は、神聖な生に対する冒とくだと考えられているからです。主人公マギーは、全身麻痺に加え、壊死によって足を切断することになりました。どこの病院に行っても回復しない。おまけに生活保護を受けているマギーの家族は彼女の戦利金を奪おうと、遺書を書いてもらいにきました。辛さに耐えかねたマギーは自分の舌を傷つけ、何度も自殺を図ろうとします。

これから皆さんにお渡しする注射器を使えば、マギーを安楽死させることができます。しかし、マギーもフランキーも、今まで信じていた宗教や神を裏切ることになります。あなたがフランキーだったら、マギーのためにどのような最後を選びますか？

この説明を聞いた後、来場客が向かうのはマギーの病室である。その手には一通の手紙と注射器が渡されている。映画の中で、マギーの病室に向かうまで、フランキーは迷い続ける。私が変わってあげたい、生きていてほしい、彼女は生きたがっている…。沢山の迷いを抱えながらも、フランキーは病室へ向かう。彼が病室の中へ入ると、そこにあるのは一つのベッド、

心拍数を図る機械の音、そして蘇るマギーとの思い出である。このような「フランキーの迷い」と「蘇る思い出」、その二つと「目の前にある現実世界」。これを視覚の世界として表したのが、今回の私たちのインスタレーション作品である。

【今回のインスタレーションで表現したかったこと】

「生死の選択を迫られたとき、あなたはどうしますか？」

本学会では、映画『ミリオンダラー・ベイビー』で大きな議論を巻き起こしたエンディングを扱った。国民の半数以上がキリスト教徒であるアメリカ合衆国では道徳的観点に加えて、宗教の教義も人々の価値観や考え方に大きく関わってくる。

カトリックにおいては自分や他人の死を操ることは大罪とされている。そのような行為をした者は死後の世界において罰がある他、現実世界において神父が葬儀を受けつけないなど、カトリックにとっては非常に深刻な問題となる。つまり、生死を左右する判断は、キリスト教徒がアメリカ合衆国よりも少ない日本においても重要な問題ではあるが、人口の 70％以上がキリスト教徒（2015 年ギャラップ社の調べによる）であるアメリカ合衆国においては日本とは別の観点からも議論がなされるのである。

文化的背景によって、私たちの判断基準は大きく変わることがある。この事実を踏まえ、私たちは何事も多角的な視野をもって考える必要がある。そのために様々な文化的事情を「知る」ということは非常に大切になってくる。それが、今回のインスタレーションを通じて私たちが最も伝えたいことである。

【『ミリオンダラー・ベイビー』のエンディングについて】

試合中の事故によって全身が動かなくなってしまったマギーはフランキーに尊厳のある「死」を要求する。フランキーがその頼みを断ると、その日の夜にマギーは自らの舌を噛み切って自死しようとする。マギーは一命を取り留めたものの、その姿を見たフランキーは決断した。マギーの呼吸装置を外し、致死量を超えるアドレナリンを点滴に混ぜ、マギーの死を幇助しよう、と。こうしてフランキーは「許されざる者」として十字架を背負い、病室を去っていった。

このエンディングがアメリカ国内で大きな論争を巻き起こした。以下、それを簡潔に説明していきたい。

【アメリカ国内で起こった論争】

◎フランキーの決断を左右したのは次の 3 点である

・ボクシング一筋で、ひたむきなマギーが、ボクシングが出来なくなってしまった事

・マギーが舌を噛み切って自死しようとする姿

・フランキーがカトリック教徒である事

フランキーは迷いに迷いながらも、マギーの尊厳ある「死」を結論に選んだ。彼は劇中で「ボクシングは尊厳を奪うスポーツである」と述べているが、この映画から「尊厳を奪われた＝生きているよりも死を選んだ方が、自分のボクサーとしての尊厳を保てる」という解釈をする人が多く存在することに、議論の火種があると私たちは解釈した。

◎上記３点以外に考えられる判断材料

・現代は医療技術が日進月歩。時を待つという選択肢を含めれば、マギーももう一度ボクシングを再開できたのでは・・・？
・マギーは尊厳ある「死」を望んだが、神父やフランキーの葛藤をより強く伝える事で、最後にマギーを説得し、「生」を選ばせることができたのではないか。
・障害を負うことになった＝生きる価値がないとマギーが判断したのは、早計すぎるのではないか。

この映画では尊厳ある「死」が多く描かれているのに対し、尊厳ある「生」との葛藤を十分に描かれなかった事が議論になっている。

キリスト教では、神から授かったものである生命を粗末に扱うことは神への冒涜であるという考えが強い。2015 年ギャロップ社の調査によると、アメリカ合衆国におけるキリスト教信者は全人口の約 70％を占め、キリスト教はアメリカで主流の宗教といえる。そのようなアメリカで製作・上映された映画であるからこそ、「生」と「死」の表現にはシビアな意見が寄せられるのだろう。

【「生」の権利と「死」の権利】

現代では、世界中の法律・憲法において人権が保障されつつある。様々な「生」の権利が保障される中で、「死」を選ぶ生き方も注目を集めている。それと同時に「死」は非常に難しく曖昧なテーマであり、特にキリスト教右派などにおいて数々の議論がなされている。

アメリカでは 2005 年、ある事件により激しい論争が起こった。植物状態のまま長年生きてきた女性、テリー・シャイボの生き方が報道されたからだ。テリーの両親は延命を望んだのに対し、夫はこれ以上の治療をやめて尊厳死を迎えさせることを望んだ。このような論争は尊厳死にとどまらず、二級殺人や積極的安楽死など、多様な最期の迎え方の中で繰り広げられている。以下は私たちが様々な資料をもとにまとめた、安楽死と尊厳死の違いである。

【尊厳死と安楽死の違い】

尊厳死とは、過剰な医療を避け尊厳をもって迎える自然な死。最期が自然な死であり、患

者が最善の医療を選択して残りの人生をよりよく生きることまで含むため広義的な意味がある。そのため消極的安楽死と混同されやすいが、消極的安楽死は尊厳死の意味合いに含蓄される形をとる。

安楽死とは、死期の近い患者を身体的、精神的苦痛から救うため死に至らしめること。安楽死には積極的安楽死、消極的安楽死の２種類がある。積極的安楽死とは、薬物を投与して死を迎えさせること。消極的安楽死とは、延命治療などの治療を中止することである。

上記で紹介したのは二種類の「死」に過ぎないが、「生」をもって幸福を手に入れるか、「死」を選んだ方がより幸福か、そのような議論はあとを絶たない。

【おわりに】

私たちが伝えたかったこと。それは宗教的背景、文化的背景など、それぞれが過ごしてきた人生やその背景によって考え方が変わってくるということである。それぞれの生きてきた道、そして当たり前のように過ごしてきた文化が異なるために、私たちが考えていることは異なる。**自分にはない考え方、自分とは異なる考え方を理解するために、他者に対して関心を持ち、知識を増やすことの大切さ**に気付いて頂ければ幸いである。

【参考文献】

・眞壁伍朗、土井健司、榎本てる子、中道基夫、井出浩（2012）『自然と教会』キリスト教新聞社
・デラボ・ノイス（2014）『「死」の百科事典』あすなろ書房
・保阪正康（1993）『安楽死と尊厳死』講談社現代新書
・ユーリハウス・ハッケタール（1996）『最後まで人間らしく』未来社
・ハーバート・ヘンディン、大沼安史（2000）『操られる死　安楽死がもたらすもの』東京時事新聞
・ヘルガ・クーゼ（1965）『尊厳死を選んだ人々』講談社